

2016  
第8号

国士館史研究年報  
楓原



学校  
法人 国士館

Kokushikan



2016  
第8号

国士館史研究年報

# 楓 原



学校法人 国士館



# 政経学部 の設置

政経学部は、一九六〇（昭和三五）年九月三〇日に認可申請を行い、翌一九六一年（昭和三六）年三月一〇日に認可を受けて、政治学科・経済学科（定員各一〇〇人）を設置した。政経学部は、体育学部に次いで開かれた学部であり、総合大学を目指していた本学にとって悲願の学部設置であった。

政経学部設置の目的は、国際的な視野に立ち、西欧の学説を批判検討するとともに、日本伝統の政治的倫理観を持つ人材の育成にあった。

なお、学部設置直後の一九六一年六月二七日、『国士舘大学新聞』を創刊し、今日まで発行を続けている。



1961（昭和36）年6月27日  
政経学部開学及び6号館落成を  
伝える『国士舘大学新聞』第1号

# 礎を築いた 教授陣

政経学部設置にあたっては、政治学、経済学、法学など各学界より、第一級の高名な教授陣が招聘された。開設初年度の教授陣を見ると、早稲田大学から中村宗雄（法学博士）、内田繁隆（政治学）、鹿児島経済大学から田崎仁義（経済学博士）、日本大学から宇尾野宗尊（商学博士）らが着任している。その後も一九六四（昭和三九）年には、国際法や外交史で著名な田村幸策（法学博士）を、翌一九六五（昭和四〇）年には、国際政治学会の初代理事長を務め、東京大学名誉教授であった神川彦松（法学博士）を招聘するなど、高等教育機関に相応しい教育体制を整えた。



1964（昭和39）年 田崎仁義教授ゼミナール



1965 (昭和40)年  
内田繁隆教授ゼミナル



1966 (昭和41)年 田村幸策教授ゼミナル

# 新設された 6号館

政経学部設置にあたり、一九六一（昭和三六）年四月五日に六号館（RC五階建）が竣工した。六号館五階には柔道場を設け、一九六六（昭和四一）年一月に竣工する一〇号館（RC地下一階・地上五階建）五階の剣道場の完成まで多くの式典が催された。



1961(昭和36)年 完成した6号館(政経学部校舎)

## 国士館創立九九年

国士館史資料室長 佐々 博雄

平成二八年は、国士館創立九九年。人間でいえば「白寿」の年であった。いよいよ、国士館も本年で「百歳」となる。目下、資料室の恒常業務はもちろん、本年刊行予定の『国士館百年史 通史編』の編纂を、少ない資料室員全員が総力をあげて、専門委員の諸先生とともに進めている最中である。そのような状況の中で、国士館史研究年報『楓原』も皆様のご支援とご協力によって、第八号を刊行することができた。とくに今号は、「論文」、「思い出の記」の執筆に多くの方々のご協力をいただき、本学にとっても新しい知見を得ることができ、深く感謝する次第である。

昨年、四月に熊本県、一〇月には鳥取県を震源とする大地震が起こるなど、多くの自然災害が日本列島を襲い、改めて地震国日本を認識せざるを得ない年であった。国士館からも災害救援のため、多くの学生と教職員が現地へ赴き、ボランティア活動をおこなった。被災地の復興を心からお祈り申し上げる。一方、八月のブラジルリオデジャネイロオリンピックには、本学学生や卒業生など選手九名が出場し、また、教員四名がスタッフとして参加した。シンクロナイズドスイミング日本代表団体競技では、小俣夏乃さん（体育学部二年）が銅メダルを獲得した。リオ五輪は、日本選手の活躍が目立ったオリンピックであった。『楓原』八号では、ブラジルでの野球、空手道の指導などの普及にあたった国士館職員「思い出の記」も掲載した。

国士館は、関東大震災などの自然災害や戦災における校舎喪失に遭いながらも、それを乗り越え発展を遂げ、本年は創立百年を迎える。これまでの先人の努力に敬意を表しつつ、国士館百年の歩みを記録する編纂事業が、国士館のアイデンティティの確認とともに、国士館を共通に理解する「記憶の場」となるよう、われわれも努力せねばならない。

平成二九年三月十五日

# 目次

## 卷頭言

国士舘創立九九年

佐々 博雄 7

## 論文と資料紹介

論文

教育の「土台」としての宗教・文化

― 渡辺海旭から、柴田徳次郎および長谷川良信に受け継がれたもの ― …… 菊池 結 11

国士舘史関係資料の翻刻並びに補註 第八卷 …… 国士舘史資料室 27

1 国士舘大学政経学部増設認可申請書

国士舘大学政経学部増設要項 31 学則 50 校地 66

校舎等建物 67 図書・標本・機械・器具等施設概要 78

学部及び学科別学科目又は講座 80 職員組織 86 将来の計画 112

# 国士館の思い出

人間形成の礎となった四年間	板倉 紀之	115
思い出の記	江崎 澄子	127
硬式野球部OB職員として―少年野球でブラジル国際交流―	田所 清人	137
国士、海を渡りて―国士館ブラジル支部の回想―	伊井 克己	149

# 国士館を支えた人々

大場 信續	浪江 健雄	179
-------	-------	-----

# 平成28年度事業報告

1 国士館百年史編纂委員会並びに専門委員会	国士館史資料室	189
(1) 国士館百年史編纂委員会		
(2) 国士館百年史編纂委員会 専門委員会		
2 国士館史資料室の活動		
1 調査・収集		
(1) 平成28年度の主たる資料調査		
(2) オーラル調査		
(3) 主な寄贈資料		

2 整理・保存

- (1) 資料目録作成状況
- (2) 資料保存

3 利用・公開

- (1) 収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）
- (2) ホームページ
- (3) 教育普及活動

4 室の構成

5 活動日誌

## 関係法規

.....

国士館百年史編纂委員会要綱／国士館史資料室規程

## 教育の「土台」としての宗教・文化

渡辺海旭から、柴田徳次郎および長谷川良信に受け継がれたもの



菊池 結

### はじめに

現代において、大学教育の場においても、社会福祉においても、方法論が重視され、本質論が軽視されているように感ずる。しかし、渡辺・長谷川・柴田に通じる脈筋は、必ずしもそうではない。

本論文の目的は、一つはこれまで触れられることのないかった仏教社会事業家の嚆矢である渡辺海旭<sup>1</sup>、淑徳大学の創設者であり、宗教と社会事業と教育の三位一体論を唱えた長谷川良信<sup>2</sup>、国士館の創立者である柴田徳次郎のつながりを発見することである。もう一つは、同時期に論じられた福祉や教育の「土台」として仏教に役割が与えられたことを考察することである。渡辺と長谷川は浄

土宗の僧侶であるが、柴田は、必ずしも仏教徒であると位置づけられていない。しかし柴田は、日本が明治維新後、西洋文明を積極的に受容し、社会の近代化を急速に推進するなかで、伝統文化を破壊し、軽視することに憂いを感じていた。そして柴田とその有志たちは、日本の「革新」をはからんと、「社会改良」と「青年指導」を目的として「青年大民団」を組織し、一九一七（大正六）年に、「活学を講ず」の宣言とともに、私塾「国士館」を創設した。「国士館創設趣旨」で謳われているのは、吉田松陰の精神を範とし、日々の「実践」のなかから心身の鍛錬と人格の陶冶をはかり、国家社会に貢献する智力と胆力を備えた人材を養成することにあった。

すでに述べたように日本が明治維新後、西洋文明を積極的に受容するなかで、渡辺・長谷川・柴田らは、日本

的な道徳として、さらには教育などを支える精神的なよ  
りどころとして、仏教の重要性を主張したと考えられ  
る。彼らのなかで、欧米諸国のキリスト教的な思想体系  
と、日本古来の仏教的なものとの考え方という二つの対抗  
軸があったと考えられる。

## 一 日本の仏教教育

日本の仏教教育は、日本天台宗の開祖・最澄（七六七  
— 八二二）の山家学生式あるいは空海（七七四—  
八三五）の綜芸種智院から語られることが多い。現在で  
も、日本の仏教系大学は数多くある。「仏教系大学会議」  
という組織も存在し、同会議は建学の理念を仏教におく  
全国の仏教系大学（短期大学を含む）が、それぞれの個  
性を尊重しつつ各大学間の連携を密にし、もって各大学  
の充実発展をはかるとともに高等教育機関としての社会  
的責務を遂行することを目的とし、一九九四（平成六）  
年に設立された。仏教系大学会議加盟校は、以下の通り  
である（二〇一六年現在）。

- 愛知学院大学
- 愛知学院大学短期大学部
- 足利工業大学

- 足利短期大学
- 大阪大谷大学
- 大谷大学・大谷大学短期大学部
- 九州大谷短期大学
- 岐阜聖徳学園大学・岐阜聖徳学園大学短期大学部
- 京都華頂大学
- 華頂短期大学
- 京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部
- 京都嵯峨芸術大学
- 京都嵯峨芸術大学短期大学部
- 京都女子大学
- 京都文教大学
- 京都文教短期大学
- くらしき作陽大学
- 高野山大学
- こども教育宝仙大学
- 駒沢女子大学・駒沢女子短期大学
- 駒澤大学
- 埼玉工業大学
- 札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部
- 四天王寺大学・四天王寺大学短期大学部
- 淑徳大学

淑徳短期大学  
種智院大学  
相愛大学  
大正大学  
筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部  
鶴見大学・鶴見大学短期大学部  
東海学園大学  
同朋大学  
東北福祉大学  
苫小牧駒澤大学  
名古屋音楽大学  
名古屋造形大学  
花園大学  
兵庫大学・兵庫大学短期大学部  
佛教大学  
身延山大学  
武蔵野大学  
立正大学  
龍谷大学・龍谷大学短期大学部  
飯田女子短期大学  
大阪千代田短期大学  
帯広大谷短期大学

京都西山短期大学  
正眼短期大学  
聖和学園短期大学  
高田短期大学  
東京立正短期大学  
函館大谷短期大学  
余談だが、日本仏教社会福祉学会の団体会員（大学・短期大学以外も含む）は、叡山学院、大谷大学、京都文京短期大学、高野山大学、駒沢大学、札幌大谷大学・札幌大谷短期大学部、淑徳短期大学、淑徳大学、種智院大学、浄土真宗本願寺派社会福祉推進協議会、真宗大谷派宗務所教育部、浅草寺、増上寺、大正大学、知恩院、筑紫女学園大学、同朋大学、東北福祉大学、日蓮宗現代宗教研習所、花園大学社会福祉学部、佛教大学、身延山大学、立正大学社会福祉学部、龍谷大学である（二〇一四年現在）。

## 二 道徳と教育（明治から大正、昭和初期にかけて）

日本では一八七二（明治五）年の学制以後、初等教育の義務就学の方策がとられ、一八八六（明治一九年）の小学校令では明確に尋常小学校四年間の就学を父母・後

見人などの義務と定めた。その後一九〇七（明治四〇）年に義務教育修学年限を二年延長して六年とした。井上哲次郎も一九一二（大正元）年、国民教育は「小学校から中学校及び中学程度の教育を込めて云ふのでありまして、これは国民として必ず受けて置かんければならぬ教育」<sup>③</sup>であると述べ、いわゆる義務教育をもって国民教育と考えられるようになる。

それとともに国民道徳も学校中心となり、第一期小教則時代（明治初年から一二、三年ごろ）、第二期小教則綱領時代（明治一四年頃より二二年頃）、第三期改正小学校令時代（明治二三年頃より三六年頃）、第四期国定修身書時代（明治三七年以降）とされる。<sup>④</sup>

第一期は外国の修身書を教科書または参考書とし、第二期は儒教による修身教授が行われ、第三期は教育勅語による徳目が教えられ、第四期は物語を基本として徳目、人物を配したものとなっている。

一八九〇（明治二三）年一〇月三〇日には、国民道徳の基本を示し、教育の得本理念を明らかにするために、教育勅語が發布された。政府は勅語の謄本を全国の学校に配布し、天皇、皇后の写真の礼拝と勅語奉読を核とする学校儀式を案出し推奨した。この頃、三教合同、神道優先、教育勅語の国民道徳のもとで、仏教界も勅語への

歩みよりと仏教人生論により生涯教育化、国民道徳化を促すこととなる。

また、大正期から昭和期にかけ、教育界に宗教教育の必要性が叫ばれ、一九二五（大正一四）年には宗教教育叢書が刊行され、日曜学校協会から月刊「宗教教育」が刊行されるに至った。大正中期には、全国小学校教員大会でも、全国高等女学校長会でも、高等師範学校長会でも、全国師範学校長会議でも、宗教の必要性が叫ばれて、全国師範学校長会議では、宗教教育を教科のなかに取り入れることを決議した。これは道徳教育の不徹底を、宗教情操教育という形で補うということが主となっている。<sup>⑤</sup>

### 三 渡辺海旭の教育論<sup>⑥</sup>

次に渡辺らの教育論についてみていく。長上深雪は、仏教社会福祉の特徴は「目に見える活動の姿にはなく、実践を支える仏教精神にある」と述べる<sup>⑦</sup>。同様に、渡辺らの教育論は、教育を支える土台となるのが仏教であると論じている。以下、それぞれの教育論について述べる。渡辺らの教育論の根底にある基本的精神は、大乘仏教の精神である。

## 1. 誕生と家庭環境

渡辺海旭は、一八七二（明治五）年一月一日、東京市浅草区田原町三丁目一番地に父・啓蔵、母・と奈の長男として誕生した。幼名は芳蔵である。

父の啓蔵は東京小伝馬町の「まごめ」の番頭をしていて、父の生活は相当に困窮していたことが伝えられている。経済的な理由のためか、一八八一（明治一四）年、渡辺が九歳のときに抜嫡のための改名届を提出、翌年一月一九日に許可されている。このとき浅草にある「満照寺」に入寺したといわれているが、この満照寺にいた期間は短く、一八八四（明治一七）年には寺をでて、博文館の小店員となっている。

しかし満照寺の住職と東京・小石川の源覚寺の端山海定（西光寺前住職）とが懇意だったことから、一四歳で端山海定について得度を受けている。出家した動機やそのきっかけについては明らかではないが、当時渡辺家は経済的に困窮しており、なにか経済的理由によるものであったと考えられている。渡辺海旭論文集『壺月全集』下巻の「伝記」には、「偶々、頓悟の質を當時小石川浄土宗源覚寺に在りし西光寺前住職端山海定和尚に見出され、一四歳にして和尚の室に入り薙髮得度す」とある。

## 2. 青年期の学び

幼少の頃から聡明であった渡辺は、一八八七（明治二〇）年、一五歳で浄土宗第一教校（現芝中学高等学校）に入学する。その後、浄土宗学本校に進み、高等予科と高等本科の全科を修め、一八九五（明治二八）年、学年第二位の優秀な成績で卒業している。学友には、望月信亨（一八六九—一九四八）や荻原雲来がいる。高等予科では宗余乗学、哲学、国語、漢文、英語、羅甸、数学、地理、歴史、博物、理財学などを学び、高等本科では俱舎、唯識、華嚴、天台の専門分野があり、渡辺は、俱舎部を卒業している。この在学中に、西欧の仏教研究にも注目し、ドイツの研究者の文献をもとに『西蔵仏教一班』（一八九五年）を研究し発表している。

卒業後すぐに、関東各県下浄土宗寺院連合第一教校教諭を任命される。また、『浄土教報』の主筆に就任している。その他、浄土宗内地留学生に任命され、三年間比較宗教学を学んでいる。一八九八（明治三一）年には、師僧の海定が隠退したため、その後を継いで西光寺の住職となる。また、革新的な仏教改革を目指した「仏教清徒同志会」（後の新仏教徒同志会）の設立に参加するなど、活発な活動をみせている。

### 3. ドイツ留学

渡辺は、一九〇〇（明治三三）年五月五日、浄土宗第一期海外留学生として、ドイツのストラスブル大学に留学し、E・ロイマン教授 (Leumam, Ernst, 1859-1931) に師事している。そこで、パリ語、サンスタリット語を学習し、それらによる比較研究に取り組んでいる。一九〇七（明治四〇）年、『普賢行願讃』の研究で、ドクトル・フィロソフィーの学位を取得している。

一方で、欧米の社会や宗教情勢を視察している。「日想観樓雜感」(浄土教報四三三号) には、「日本の今日より将来を推すと、どうしても吾党の士が一肌ぬいで、社会が健全の発育を遂げる為国家に報効(ママ)する為、是非とも社会事業や、慈善事業に眼をつけて頂かねはならない」と書いている。一九一〇（明治四三）年に、帰国すると、ただちに宗教大学（現大正大学）、東洋大学の教授となる。また、正式に『浄土教報』の主筆にも復帰する。

### 4. 仏教社会事業家へ

ドイツ留学中に暖めていた考えを実践するように、帰国翌年の一九一一（明治四四）年、「浄土宗労働共済会」を設立する。また、一九一二（明治四五）年五月には、

研究機関である仏教徒社会事業研究会を主催する。一九一八（大正七）年五月には、宗教大学社会事業研究室の開設に尽力している。

### 5. 渡辺の教育論

渡辺は、芝中学校校長（一九一一年九月就任、以後死去までの二〇余年間勤める）などを務め、多くの教育事業に携わっている。彼の教育論の一つに、「四つのL」がある。四つのLとは、Lのことであり。Lは四つのLが上下左右に組み合わされて成り立っており、渡辺は四つのLとは「Light, Love, Life, Liberty」である。光明と、愛と生命と自由は現代人の理想としてまた生活として誰とて是認せぬものはあるまい。また仏教といひ基督教といひ神道といひ、何れの宗教、何れの教養に於ても此四つを主眼とせぬものはない。L字が仏教の代表記号として適当であることは勿論、広く各宗教を通して之を標示としても差支えない」と述べている。

## 四 長谷川良信の教育論

### 1. 誕生と家庭環境

長谷川良信は、一八九〇（明治二三）年一〇月一二

日、茨城県西茨城郡南山内村字本戸（現笠間市内）に生まれる。六歳で浄土宗・得生寺の住職小池智誠の養子となる。一五歳で上京し、浄土宗第一教校（現芝中学高等学校）に入学する。一九一〇（明治四三）年に、浄土宗第一教校を卒業し、宗教大学（現大正大学）に進学する。在学時より生涯の師である渡辺海旭や矢吹慶輝と知り合う。

宗教大学卒業後に、渡辺の薦めもあり、東京市養育院の巢鴨分院（現石神井学園）に勤務するが、病気により退職する。その後、『浄土教報』の記者として再出発し、宗教大学に「社会事業科」の開設を訴えるなど、再び活動を始める。一九一八（大正七）年に、東京府慈善協会の救済委員制度が創設されるに伴い、長谷川は、巢鴨方面の救済委員を委託される。徹底した調査のなかで、個人としての活動よりも、組織的な事業の必要性を痛感し、西巢鴨にある通称「二百軒長屋」に、「マハヤナ学園」（一九一九年）を創設した。長谷川が、若年二八歳でマハヤナ学園を創設するとき、創立委員に柴田徳次郎も名を連ねている。国士的な豪傑さと、日本的な精神を重視する点は、渡辺・柴田・長谷川の三者に共通する。

## 2. 宗教・社会事業・教育の三位一体論

長谷川は、宗教・社会事業・教育の三位一体論を提唱した。三位一体は、通常はキリスト教で、父・子・精霊の三位は唯一の神が三つの姿となって現れたもので、元は一体であるとする教理のことを指す。転じて、三つの異なるものが一つになること、また三者が心を合わせることを意味する。また、代表的な著書である『社会事業とは何ぞや』のなかで、長谷川は、「社会事業とは社会の進歩人類の福祉の為に社会的疾病を治療し社会の精神的関係及経済的關係を調節する機能をいふ―定義」と述べている。<sup>9)</sup>

## 3. 長谷川 of 教育論

一九一八（大正七）年に創設された「マハヤナ学園」は、「社会福祉法人マハヤナ学園」として、二〇一〇（平成二二）年に創立九〇周年を迎えた。また、教育事業としては、淑徳大学が昨年（二〇一五年）創立五〇周年を迎えている。淑徳大学は、大乘仏教の理念を建学の精神としており、長谷川は、「For him（彼のために）」ではなく、together with him（彼と共に）でなければならぬ」と述べている。一九六五（昭和四〇）年に、社会福祉学部社会福祉学科から始められた淑徳大学は、

「together with him」の実践を通じての理想社会の建設と真実な人間の育成」を目指すものとしている。それらは、仏教でいう自利利他の精神であり、今日の「共生」の思想といえる。

## 五 柴田徳次郎の教育論

### 1. 誕生と家庭環境

柴田は、一八九〇（明治二三）年二月二〇日、福岡県那珂郡別所村（現筑紫郡那珂川町別所）に生まれる。一四歳で上京し、苦学の末に早稲田大学専門部を卒業。在学時より同郷の頭山満、野田卯太郎らと知り合う。一九一七（大正六）年十一月、二六歳で同志とともに国士館を創設した。国士館は、現在では中学・高校・大学・大学院を一貫する学校法人国士館となっている。建学の精神は、「日本の将来を担う、国家の柱石たるべき眞智識者「国士」を養成する」である。

### 2. 柴田の教育論

『大民』大正六年十一月号に、宣言「活学を講ず」が巻頭に掲げられた。以来、国士館はこの「活学」を教学の理念とし、学ぶ者みずからが不断の「読書・体験・反

省」の三綱領を実践しつつ、「誠意・勤労・見識・気魄」の四徳目を涵養することを教育指針に掲げてきた。<sup>10</sup>この「活学を講ず」は、「国士館設立趣旨」として、新たな教育機関の設立を世に訴える宣言文となった。注目すべきは、「精神文明なくして国家豈に一日の安きを得んや」と高らかに謳い、「活学を講ず」ではさらには、昨今の日本文化のありようを「猿真似の文化」であると批判している。このような柴田らの思いが国士館と渡辺・長谷川らとの結びつきとなったのではないかと考えられる。

## 六 柴田徳次郎と国士館

### —— 渡辺海旭との関係について ——

本節においては、柴田徳次郎が仏教者である渡辺海旭に「思想問題」の授業を依頼した経緯について述べる。資料は、主に青年大民団の機関紙『大民』を使用する（資料1）。これまでに、柴田と渡辺の関係を指摘した例はほとんどない。渡辺海旭研究では、「国士館完成長老懇談会記念写真」として、柴田、渡辺、徳富蘇峰、渋沢栄一、野田卯太郎、頭山満らとともに写された写真が現存しているが（資料2）、どういう経緯で撮影されたのかは不明であった。これまで指摘されたことのない、柴田と渡辺との接点を述べるだけでも価値はあると思う。

教育の「土台」としての宗教・文化

資料1 現存する『大民』一覽(二〇一三年現在)

第1巻第1号	大正5年6月15日発行	第4巻第4号	大正8年4月1日発行	第7巻第7号	大正10年7月1日発行
欠		第4巻第5号	大正8年5月1日発行	第7巻第8号	大正10年8月1日発行
第2巻第3号	大正6年3月10日発行	第4巻第6号	大正8年6月1日発行	欠	
第2巻第4号	大正6年4月1日発行	第4巻第7号	大正8年7月1日発行	欠	
第2巻第5号	大正6年5月1日発行	第4巻第8号	大正8年8月1日発行	欠	
第2巻第6号	大正6年6月1日発行	第4巻第9号	大正8年9月1日発行	欠	
第2巻第7号	大正6年7月1日発行	第5巻第1号	大正8年10月20日発行	欠	
第2巻第8号	大正6年8月1日発行	第5巻第2号	大正8年11月1日発行	欠	
第2巻第9号	大正6年9月1日発行	第5巻第3号	大正8年12月1日発行	欠	
第2巻第10号	大正6年10月1日発行	第6巻第1号	大正9年1月1日発行	第8巻第4号	大正11年4月1日発行
第2巻第11号	大正6年11月1日発行	第6巻第2号	大正9年2月1日発行	第8巻第5号	大正11年5月1日発行
第2巻第12号	大正6年12月1日発行	第6巻第3号	大正9年3月1日発行	第8巻第6号	大正11年6月1日発行
第3巻第1号	大正7年1月1日発行	第6巻第4号	大正9年4月1日発行	欠	
第3巻第2号	大正7年2月1日発行	第6巻第5号	大正9年5月1日発行	第8巻第8号	大正11年8月1日発行
欠		第6巻第6号	大正9年6月1日発行	第8巻第9号	大正11年9月1日発行
第3巻第4号	大正7年4月1日発行	欠		第8巻第10号	大正11年10月1日発行
第3巻第5号	大正7年5月1日発行	欠		第8巻第11号	大正11年11月1日発行
欠		第6巻第10号	大正9年10月1日発行	第8巻第12号	大正11年12月1日発行
第3巻第8号	大正7年8月1日発行	第6巻第11号	大正9年11月1日発行	欠	
欠		第6巻第12号	大正9年12月1日発行	欠	
第3巻第10号	大正7年10月1日発行	欠		欠	
第3巻第11号	大正7年11月1日発行	第7巻第2号	大正10年2月1日発行	第9巻第5号	大正12年5月1日発行
欠		第7巻第3号	大正10年3月1日発行	第9巻第6号	大正12年6月1日発行
第4巻第1号	大正8年1月1日発行	第7巻第4号	大正10年4月1日発行	第9巻第7号	大正12年7月1日発行
第4巻第2号	大正8年2月1日発行	第7巻第5号	大正10年5月1日発行	第9巻第8号	大正12年8月1日発行
第4巻第3号	大正8年3月1日発行	第7巻第6号	大正10年6月1日発行		

筆者は、柴田が、渡辺に道徳のよりどころとしての仏教（あるいは宗教一般）を教えるよう依頼したのではないかと推測している。特に、一九二三（大正一二）年に、大民倶楽部が「佛教各宗派聯合海外布教団」の発会を図るなどは、仏教各宗の連携と大乘仏教を土台にした社会問題への取り組みという渡辺の思想の影響を受けているといってもよい。

柴田は、芝中学校で、渡辺の修身の授業を受けたことがあるともいわれている。<sup>12</sup> 芝中学校で、渡辺の「修身」の授業を受けた柴田が、その人柄に感服し、関係が繋がったのではないかと考えられる。そして、もう一人、柴田と渡辺の接点を考えるにあたって重要な人物がいる。それは、渡辺の弟子であり、マハヤナ学園の設立者である長谷川良信である。柴田と長谷川は、共に後に渡辺が校長を務めることになる芝中学校の学友であり、「二人で社会国家を論じたり、酒を酌み交わしたりしていた<sup>13</sup>」という。しかし、同様に、これまで国士館や柴田と長谷川のつながりを指摘するものはほばない。

### 1. 柴田徳次郎と渡辺海旭との接点

柴田は、芝中学校で、渡辺の修身の授業を受けたことがあるともいわれているが、これまで、柴田と、浄土宗



1926（大正15）年6月3日 国士館長老懇談会（於渋沢栄一郎）

（前列左より頭山満、野田卯太郎、渋沢栄一、徳富猪一郎（蘇峰）、後列左より花田半助、渡辺海旭、柴田徳次郎）

僧侶であり仏教社会事業家である渡辺との関係を指摘するものは少ない。

ここでは、まず渡辺と、頭山満や徳富蘇峰らとの関係を挙げておく。渡辺の甥である作家の武田泰淳は、渡辺が晩年に頭山や徳富らとのグループと付き合ったのは失敗であったと述べている<sup>14)</sup>。渡辺が彼らといつ交際をはじめ、どのような影響を受けたのかを明確にすることは、今後の渡辺海旭研究の課題だと思われる。なぜならば、太平洋戦争中の植民地政策と、植民地での仏教者の社会事業とがある種の密接な関係にあることがしばしば指摘され始めているからである。しかし、ここでは本論文の論旨から外れるため述べない。渡辺と頭山、徳富らとの接点は二つある。

ひとつは、すでに述べたように、一九二六（大正一五）年に「国士館完成長老懇談会記念写真」として、頭山や徳富と一緒に写る渡辺の写真がある（『壺月全集』下巻には、この写真は、私塾國士館の設立を協議する有志として、一九一六（大正五）年のものとして収載されているが、甥の泰淳が四四歳の渡辺を晩年というのはいささか若すぎる気がするので、年号の誤りであろう）。

ふたつめは、新宿中村屋の相馬夫妻とボース<sup>15)</sup>、それと頭山との関係からの接点である。新宿中村屋の相馬夫妻

は、長女俊子の死をきっかけにして、渡辺の信奉者となったことは有名な話である。特に、妻の黒光は、壺月会という渡辺の法話会を主催するほどであった。ボースとは、中村屋のボースとして日本に初めてインドカレーを伝えたインド独立運動の指導者のラス・ビハリ・ボースのことである。ボースは、一九一五（大正四）年にイギリスの追及を逃れて訪日し、頭山満の支援を受け、新宿中村屋の相馬夫妻の自宅に匿われることになった。その後、相馬夫妻の長女敏子と結婚したが、敏子は一九二五（大正一四）年に亡くなっている。相馬愛蔵は、渡辺の哀悼文のなかで、「私の婿のボースの處へ、三周忌の墓参りに行きました。頭山翁と先生とは初対面でした」と書いている。したがって、愛蔵のいう三周忌とは、一九二七（昭和二）年のことであろう。この時点で渡辺は、五五歳を迎えている。渡辺は、太平洋戦争を迎える前の一九三三（昭和八）年一月五日に六一歳で敗血症により逝去している。

そうすると、愛蔵の記憶違いという可能性もあるが、柴田と渡辺との出会いはそれよりも遥かに早いことになる。次に、柴田と渡辺との接点をみていく。柴田が上京し、渡辺が死去するまでの、彼らの接点を年表にすると左の通りになる。

一九〇五（明治三八）年上京。

一九〇七（明治四〇）年東京市・芝中学校第三学年に入学。（一九〇八（明治四一）年三月同校全科卒業）。

※一九一〇（明治四三）年渡辺海旭中学校校長就任。

一九一二（大正元）年早稲田大学政治経済学科（専門部）に入学。（一九一五（大正四）年七月同校全科卒業）。

一九一三（大正二）年「青年大民団」結成。

一九一六（大正五）年機関誌『大民』創刊。

一九一七（大正六）年麻布区麻布筭町（現西麻布、ごく一部は南青山）に、私塾「國士館」を設立。

日・祭日を除き夜七時から九時まで、政治・経済・社会・宗教・哲学・武道などのほか、外国語を教える。

※臨時補講として、渡辺海旭「思想問題」を教える。

一九一九（大正八）年財団法人国士館を設立。

※財団法人国士館の理事に、渡辺海旭就任。

一九一九（大正八）年松陰神社隣接地（現世田谷キャンパス）に移転、国士館高等部設置。（昭和五年三月廃止）。

一九二六（大正一五）年国士館完成長老懇談会を開

催。

※渡辺海旭、徳富蘇峰、渋沢栄一、野田卯太郎、頭山満らとともに写した写真が現存（前掲した資料②）。

一九二三（大正一二）年国士館中等部設置。（一九二五（大正一四）年三月廃止）。

一九二五（大正一四）年国士館中学校設置。（一九四九（昭和二四）年三月廃止）。

一九二六（大正一五）年荏原郡西部六町村合同経営の国士館商業学校設置。（一九四九（昭和二四）年三月廃止）。

一九二九（昭和四）年国士館専門学校設置。（一九五五（昭和三〇）年三月廃止）。

一九三〇（昭和五）年国士館高等拓植学校設置。

（一九三四（昭和九）年一月廃止）。

一九三二（昭和七）年満洲鏡泊湖畔に鏡泊学園を設置。

※鏡泊学園総長に、渡辺海旭就任。

※一九三三（昭和八）年渡辺海旭死去。

このように、柴田と渡辺の出会い、少なくとも一九一七（大正六）年の国士館設立以前であることが分かる。しかし、柴田が芝中学校に入学したとされる

一九〇七（明治四〇）年は、渡辺は、ドイツ留学期間であり、柴田の学友であった長谷川が紹介したのだろうという推測の域をでない。

## 2. 国士館担当課目について

しかし、前述のとおり、渡辺は、財団法人国士館の理事や、渋沢栄一郎で行われた国士館長老懇談会に、頭山や野田らと同席するなど、相談役としてかなりの位置にいたと考えてよい。<sup>16</sup> 本節では、『大民』に書かれているものを中心に、渡辺が担当した科目を記述する。

これらをみるかぎり、渡辺に期待されたのは、「修身」や「思想問題」である。仏教者である渡辺に、思想問題の授業を担当させたのは、設立趣旨の冒頭にあるように<sup>17</sup>、当時の「唯だ科学智を重んじて、徳性涵養を忘る」教育に対する反旗であったと考えられる。これは、「宗教・社会事業・教育の三位一体」を唱えた長谷川にも共通する考え方であり、一方で、教育なり、社会事業があり、一方でそれを精神面で支える、強化する、より良いものにする、または日本的なものにする、大乘仏教の思想があるとするのである。この点において、仏教思想とは、社会的なものを内面的な精神として支えるという役割を与えられるのである。また、柴田は、母親がかなり

の信仰心に篤い女性であつたらしく、その影響は小さくはないと述べている。『大民』をみるかぎり、渡辺の担当課目は以下のようなものである。

一、『大民』三卷二号大正七年二月一日「国士館設立趣旨」講師 芝中学校 渡辺海旭 補教として 思想問題。

二、『大民』三卷一号大正七年一月「国士館講座一月分」佛教哲学 椎尾弁匡 社会問題 長谷川良信。

三、『大民』三卷五号大正七年五月一日 補教として 思想問題 渡辺海旭。

四、『大民』三卷八号大正七年八月一日「国士館移設趣旨」補教として 思想問題 渡辺海旭。

五、『大民』三卷一〇号大正七年一〇月一日「国士館講座九月分」思想問題 渡辺海旭。

六、『大民』五卷一号大正八年一〇月二〇日「一週間に於ける学科の配当左の如し」宗教 渡辺先生。

七、「国士館規則（高等部）」「一週間に於ける学科の配当左の如し」宗教 渡辺海旭。

八、『大民』六卷五号大正九年五月一日「国士館第一期に於ける一週間の学科配当左の如し」仏教史上に現はれたる東洋思想（二時間）渡辺先生。

九、『大民』七巻四号大正一〇年四月一日 宗教(火、

二時間) 渡辺先生 社会学及社会問題(水、二時間)  
長谷川先生。

一〇、『大民』八巻九号大正一一年九月一日「国士館夏  
期講習会記事」第一期 宗教心に就いて ドクトル  
渡辺海旭 第三期 宗教に就いて ドクトル 渡辺海  
旭。

一一、大正一二年三月三〇日から四月四日「国士館春季  
講習会開催」思想問題に就いて 渡辺海旭。

一二、『大民』一〇巻八号大正一二年八月一日 東京在  
住の佛教各宗派の僧侶と会談し、佛教各宗派連合海外  
普教団の発会を図る。

一三、大正一四年夏(発行日付なし) 国士館要覧「国士  
館専門部組織」哲学 ドクトルフィロソフイエ 渡  
辺海旭 社会問題 マハヤナ学園 長谷川良信 「中  
学校」講師 倫理 芝中学校 ドクトルフィロソ  
フイエ 渡辺海旭。

一四、大正一四年八月二六日から二〇日「国士館第四回  
夏季講座」一七日 世界列国の社会事業に就いて  
長谷川良信、二〇日 補講 渡辺海旭。

一五、大正一四年一二月二日から五日「興国青年大演習  
開催」講師 渡辺海旭。

一六、昭和四年三月一日「文部省国士館専門学校設置  
許可」修身 渡辺海旭。

その他に、『大民』には、大正一一から国士館学長を  
務めた長瀬鳳輔の国士館々葬や、野田卯太郎追悼会にお  
いて、渡辺が導師を務めたことが報じられている。

### おわりに

以上、渡辺に影響を受けた柴田と長谷川の社会事業お  
よび教育事業について述べてきた。そこから明らかにな  
るとは、欧米諸国の近代社会事業あるいは教育事業を学ん  
だ彼らが、それぞれに仏教に精神的な重要性を見出して  
いることである。

また、これまでに、渡辺と柴田あるいは柴田と長谷川  
との関係を指摘されることはまれであった。しかし、こ  
のように彼らの思想は、仏教は社会事業と教育事業を支  
える重要な精神的基盤であるという点で共通する。日本  
は、明治維新後、西洋文明を積極的に受容した。彼ら  
は、仏教的な慈悲業や、慈善ではない近代社会事業など  
を学び、吸収し、日本的な土壌のなかでそれを解釈した  
のである。

註

- (1) (2) 渡辺や長谷川に関する文献は多い、例えば、次のものがある。芹川博通『渡辺海旭研究 その思想と行動』（大東出版社、一九七八年）、長谷川匡俊『長谷川良信』（シリーズ福祉に生きる／24）（大空社、二〇一五年）、『仏教と社会事業と教育と長谷川良信の世界』（長谷川仏教文化研究所、一九八三年）。
- (3) 井上哲次郎『国民道徳概論』（三省堂、一九二二年）付録二九頁。
- (4) (5) 齊藤昭俊『仏教教育論集』（仏教教育研究所、二〇〇九年）、齊藤昭俊『仏教教育選集Ⅰ 慈悲の教育』（国書刊行会、二〇一一年）、斎藤昭俊『近代仏教教育史』（国書刊行会、一九七五年）。
- (6) 渡辺の教育に関する論考に、次のものがある。「漫言教則―米峰―への私信」（『新仏教』一〇巻六号、一九〇九年）、「女子教育機関の充実を計れ」（『浄土教報』一三五七号、一九一九年）、「中等教育私見」（『浄土教報』一三八三号、一九一九年）、「教育の欠陥とその責任者」（『浄土教報』一二一三号、一九一六年）、「教育界の醜状」（『浄土教報』一五〇〇号、一九二二年）。
- (7) 日本仏教社会福祉学会編『仏教社会福祉入門』（法藏館、二〇一四年）一三頁。
- (8) 『壺月全集』（壺月全集刊行会、昭和八年改訂版、一九七七年）三七〇頁〜三七三頁。
- (9) 長谷川良信『社会事業とは何ぞや』、『長谷川全集』上巻、二二六七頁。
- (10) 『国士館九十年』（学校法人国士館、二〇〇七年）。
- (11) 浄土宗第一教校は、一九〇六（明治三九）年に「男子に須要なる高等普通教育を為すを以て目的とす」として、宗門外の一一般子弟の教育に門戸を開放。私立芝中学校となる。初代校長に松濤賢定就任。一九一一（明治四四）年、第三代校長に渡邊海旭就任。
- (12) 国士館中学校設置認可申請書。一九二五（大正一四）年三月三〇日に添付された柴田の履歴には、一九〇七（明治四〇）年四月東京市芝区私立芝中学校第三学年へ入学、一九一二（大正元）年九月一日早稲田大学政治経済科（専門部）へ入学、一九一五（大正四）年七月同校全科卒業とある。
- (13) 長谷川匡俊『シリーズ福祉に生きる 長谷川良信』（大空社、二〇〇五年）一二二頁。
- (14) 吉田久一『著作集二』（川島書店、一九九三年）に

著者（吉田）宛の武田泰淳氏の書簡が採録されている。

- (15) 相馬愛蔵・黒光。相馬夫妻は、東京本郷に小さなパン屋中村屋を開業、一九〇四（明治三七）年にはクリームパンを発明した。一九〇七（明治四〇）年には新宿へ移転、一九〇九（明治四二）年には現在地に開店した。中華饅頭、月餅、インド式カリー等新製品の考案、喫茶部の新設など本業に勤しむ一方で、絵画、文学等のサロンをつくり、荻原礫山、中村彝、高村光太郎、戸張弧雁、木下尚江、松井須磨子、会津八一らに交流の場を提供し、「中村屋サロン」と呼ばれた。

- (16) 国士館設立趣意書（一九一七年）の「先生及講座時間」によると、すでに渡辺は、思想問題の臨時講話を担当している。一九一九（大正八）年の国士館落成式および開会式では、芝中学校校長として、渡辺は祝辞を述べている。また、一九二一（大正一〇）年七月に、創設された「財団法人国士館維持会」に名前は見当たらないものの、同年築地精養軒で行われた「国士館相談会」に撮影された写真に、渡辺の姿が写っている。

- (17) 国士館の設立趣旨冒頭は、このように述べられている。

る。「物質文明の弊日に甚だしく、人は唯だ科学智を重んじて、徳性涵養を忘る今日に於て教育とは唯だ科学智の売買たるのみ此の如きは唯だ物質文明に終る、精神文明なくして国家豈に一日の安きを得んや、蓋し精神文明は物質文明を統一指導するものなり」。

---

---

## 国士館史関係資料の翻刻並びに補註 第八卷

---

---

### 凡例

- 一 ここには、国士館史編纂のために調査収集した資料のうちから、翻刻・校訂と補註が終了し、重要度が高いものを順次紹介する。
- 一 資料には、巻別に適宜、通し番号と表題を付し、その下に（ ）で出典を略記した。
- 一 資料は、漢字・仮名遣いとも、できるだけ原本に忠実に翻刻したが、一部に句読点を補い読みやすく改めた。
- 一 資料中の漢字は、原則として常用漢字に改めた。ただし、常用漢字にないものおよび地名・人名など特に必要と認めたものは、原本のままとした。
- 一 現在では読みにくくなった語句には、平仮名でふりがなを付したが、もともと原本にあるふりがなは片仮名で表記した。
- 一 資料の成立事情及び資料中に使用される用語で意味を解しにくいものには、簡略な補註を付し、読者の理解に資した。
- 一 資料の翻刻・校訂は、国士館史資料室収蔵の原本、ないしは原本から作成した忠実な複製資料によった。

一 昭和三十五年九月 国士館大学政経学部増設認可申請書（総務部保管資料）

（欄外印）

「校大第 195 号 昭 35.9.29. 文部省」

国士館大学政経学部<sup>\*</sup> 政治学科 増設認可申請書  
経済学科

このたび国士館大学政経学部 政治学科 増設したいと思えますから学校教育法第四条の規定によって  
ご認可下さるよう別紙書類を添えて申請いたします。

昭和三十五年九月三十日

設置者

学校法人国士館理事長 柴田徳次郎〔印〕

文部大臣 荒木満壽夫殿

国士館大学政経学部増設認可申請趣意書

日本の教育は、敗戦によって、百八十度の転換を余儀なくされました。而もそれは、民主主義の名の下  
に、日本民族の心の支柱である日本精神を歪曲し、魂の抜けた世界人を造ることに重点が置かれました。

従つて日本の伝統を重んずる気風は失われ、日本の歴史を学ぶ心は稀薄となり、道義日本の誇りは地を払うに至りました。次代の日本を荷う責任の重い大学生が、自国を軽侮し、国際共産主義の謀略に踊らされ、国会議事堂を取巻く安保反対斗争の暴徒と化したことは、敗戦後の誤れる日本の教育を、最も雄弁に物語っています。

国士館大学は、これとは反対に、皇室を敬い、国家を重んじ、歴史と伝統を守らんとする精神の上に、建学の理想を打ち建てて参りました。戦前は、武道を主軸とした国漢地歴の国士館専門学校として、我が国教育界に於ける異色ある存在でありました。不幸にも敗戦後の誤れる占領政策によって、武道は廃止され、国士館の存続も一時は危殆に瀕しましたが、昭和二十八年漸く国士館短期大学（経済科、国文科）として復活し、昭和三十一年には三年制体育科を増設し、遂に翌三十二年十二月、四年制体育学部昇格して今日に至りました。

文武の道によって、学徒の志操を陶冶せんとする国士館は、今日の混迷せる青年の浮薄な思想動向坐視するに忍びず、茲に、日本の歴史と伝統に基礎を置き、而も国際的な視野に立つて、西欧の学説を批判検討しつつ、日本の再建に役立つ有為な青年の育成道場として、特色のある政経学部を創設することに決意致したのであります。

赤に偏向せるマスコミや組合運動が、戦後の日本の発展を如何に阻害し、純真な青年学徒の方途を如何に



七、修業年限履修方法及学士号	一一一
八、学部及学科別学生定員	一二五
九、職員組織	一二七
一〇、設置に関する調	六三一
一一、資産	八〇五
一二、維持経営の方法	八九三
一三、開設年次	九八五
一四、現在設置している学校の現況	九八七
一五、将来の計画	一〇七五

(内表紙)

「一、国士館大学政経学部増設要領」

第一 国士館大学政経学部	政治学科
	経済学科
増設要項	
一、名 称	

国士館大学政経学部政治学科

同 経済学科

二、位 置

東京都世田谷区世田谷一丁目一〇〇六番地

三、目的及使命

本学政経学部は教育基本法に基き広く一般の基礎教育に関する学術及び専門の政治学、経済学に関するの知識技能を修得させることを目的とし以て世界文化の進展に貢献すると共に教育政治実業等の諸界における社会人を育成することを使命とする。

四、校 地

総坪数 二七、五一四坪三五

専 用 九、一四四坪 国士館大学政経学部

共 用 一四、〇八一坪 国士館大学体育学部と共用

四、二八九坪三五 } 国士館短期大学  
 国士館高等学校・中学校 } と共用

<p>国士館大学設置認可当時</p> <p>総坪数 二二、三七〇坪三五</p> <p>専 用 一八、〇八一坪</p> <p>国士館大学体育学部</p> <p>共 用 四、二八九坪三五</p>	<p>国士館大学政経学部増設後</p> <p>総坪数 二七、五一四坪三五</p> <p>専 用 九、一四四坪</p> <p>国士館大学政経学部</p> <p>共 用 一四、〇八一坪</p>
---	--

五、校舎等建物

国士館短期大学  
 国士館高等学校  
 国士館中学校 } と共用

国士館大学体育学部と共用  
 四、二八九坪三五  
 国士館短期大学  
 国士館高等学校 } と共用  
 国士館中学校

総坪数 四、六〇五・四一坪

専用 一、四〇四・八〇坪 国士館大学政経学部

共用 三、二〇〇・六一坪

内 訳

一、九四一・〇八坪 国士館大学体育学部と共用

一、二五九・五三坪 国士館短期大学と共用

国士館高等学校と共用

国士館大学設置認可当時

総坪数 三、一六三・〇八坪

専用 一、九四一・〇八坪

国士館大学（体育学部）

国士館大学政経学部増設後

総坪数 四、六〇五・四一坪

専用 一、四〇四・八〇坪

国士館大学政経学部

六、図書標本機械器具等設備概要

(一) 図書

共用 一、二二二、〇〇坪 内 訳 八七六、二五坪 国士館短期大学と共用 三四五、七五坪 国士館高等学校と共用	共用 一、九四一、〇八坪 体育学部 一、二五九、五三坪 国士館短期大学と共用 国士館高等学校と共用
--	---

総 数 五九、四九〇冊

専用 一七、七〇九冊 国士館大学政経学部

共用 四一、七八一冊

国士館大学体育学部、国士館短期大学、  
 国士館高等学校と共用

国士館大学設置認可当時 総 数 四〇、九三一冊 専用 一四、〇五五冊 国士館大学体育学部 同 (二三、七三五) 国士館短期大学 (国文科) (経済科) 共用 三、一四一冊	国士館大学政経学部増設後 総 数 五九、四九〇冊 専用 一七、七〇九冊 国士館大学政経学部 共用 四一、七八一冊 国士館大学体育学部と共用 国士館短期大学と共用
--	---

(二) 標本

国士館短期大学 国士館高等学校 } と共用	国士館高等学校と共用
-----------------------------	------------

総数 一、〇九〇点

専用 一〇〇点 国士館大学政経学部

共用 三六〇点 同 体育学部と共用

二九五点 国士館短期大学と共用

外 (三三五点 国士館高等学校専用)

(三) 機械器具

国士館大学設置認可当時 総数 九四〇点 専用 三一〇点 国士館大学体育学部 二九五点 共用 国士館短期大学と共用 (二三五点 国士館高等学校専用)	国士館大学政経学部増設後 総数 一、〇九〇点 専用 一〇〇点 国士館大学政経学部 三六〇点 共用 国士館大学体育学部と共用 二九五点 国士館短期大学と共用 (三三五点 国士館高等学校専用)
---	--

総数 二、七六〇点

専用 一四三点 国士館大学政経学部

共用 二、六一七点

内訳 一、六一七点 国士館大学体育学部と共用

一、〇〇〇点 国士館短期大学  
と共用

国士館高等学校

国士館大学設置認可当時	国士館大学政経学部増設後
<p>総数 二、二四一点</p> <p>専用 一、三一六点 国士館大学体育学部</p> <p>共用 一七五点 国士館短期大学と共用 七五〇点 (国士館高等学校専用)</p>	<p>総数 二、七六〇点</p> <p>専用 一四三点 国士館大学政経学部</p> <p>共用 二、六一七点 一、六一七点 国士館大学体育学部と共用 三八〇点 国士館短期大学と共用 六二〇点 (国士館高等学校専用)</p>

七、学部及学科の組織並に附属施設

(一) 学部及学科の組織

政経学部 政治学科

経済学科

(二) 附属施設

国士館大学設置認可当時	(一) 学部及学科の組織 体育学部体育学科  (二) 附属施設 附属図書館 体育館
国士館大学政経学部増設後	(一) 学部及学科の組織 体育学部体育学科 政経学部政治学科 同 経済学科  (二) 附属施設 附属図書館 体育館 水泳プール(五〇メートル九コース)

八、学部及学科別学科目概要並に教職課程の有無

(一) 学部及学科別学科目

学部	学科	学 科 目	必修単位数	選択単位数	備 考
部 学 経 政	(通共) 科学治政 科学済経	一般教育科目 人 文 関 係 国 倫 哲 文 理 学 学 学	四	四 四	

部		学		経		政																
(通共)		科	学	学	治	政	経															
実	講	独	英	外国語科目	地	統	数	生	自然科学関係	教	社	政	経	心	法	社会科学関係	音	地	歴	漢	外	
技	義	語	語	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	楽	理	史	読	学	
二	二	一	二	四	八	八										四						
		八	四	四	六	二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	二	四	四	四	四	四
																						日本国憲法を含む

部 学 経 政																							
科 学 治 政													計	計									
専門科目																							
社 会 政 策	勞 働 法	商 事 政 策	刑 事 法 策	刑 法 度	司 法 制	比 較 憲 法	日 本 政 治 思 想 史	日 本 法 制 史	民 政 法 史	行 政 法 史	外 交 史	社 会 学 史	国 際 法 史	憲 法 史	西 洋 政 治 史	日 本 政 治 史	国 際 政 治 学	政 治 制 度 論	行 政 政 治 学	政 治 思 想 史	政 治 学 原 論		
										四			四	四	四	四	四	四	四	四	二 四	四	
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四		四	四		四							七 〇		

		部 学 經 政																				
		科 学 治 政																				
専門 經濟 原論	計	公衆衛生学	倫理学	哲学	地誌学	地理学	外国史	日本史	卒業論文	外国政治書講読	演習	国際経済論	貿易論	金融論	経営学	経済政策	財政学	経済原論	新聞学	国際機構論	政治哲学	国際文化政策論
	四	四	四	四	四	四	四	四	八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
	二 二 八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
		体育学部にて受講	〃	〃	〃	〃	〃	〃	就職希望者必修（社会）	選択必修	選択必修											

	部	学	経	政
	科	学	济	経

経済時  
 取引所  
 貿易論  
 銀行論  
 保険論  
 金融論  
 交通論  
 工業論  
 農業論  
 東亞論  
 景氣論  
 商變論  
 憲法論  
 會計論  
 經營論  
 商業論  
 社会論  
 統計論  
 財政論  
 國際論  
 經濟論  
 西洋論  
 日本論  
 經濟史  
 經濟史  
 經濟史

四 四 四 四 四 四 四 四 四 四

四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四

選  
 択  
 必  
 修

部		学		經		政																				
科		学		濟		經																				
職業指導	公衆衛生學	倫理學	哲學	地理學	地理學	外國史	日本史	卒業論文	外國經濟書講讀	演習	珠算	實務計算	商業英語	新聞學	經濟思想史	國際政治論	外交學	政治學	國際法	民法	民法	勞働法	經濟法	簿記	市場原理論	
八																										
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
教職 (商業) 希望者必修	〃 (体育学部受講)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	教職 (社会) 希望者必修	選択必修	選択必修																選択必修

九、修業年限・履修方法及び学士号

(一) 修業年限

政経学部の修業年限は四ヶ年とする。在学年限は八ヶ年を超えることはできないものとする。

部 学 経 政		学部
(通共) 程 課 職 教		学科
計	図書学 教育実習 商業科教育法 社会科学教育法 教育行政 教育史 青年心理学 教育心理学 道徳教育の研究 教育原理	学 科
		教職に関する専門科目
一一一	三 四 四	必修単位数
一六	四 二 二	選択単位数
		備 考

(二) 教職課程の有無

1. 本大学政経学部に教職課程を置く。

2. 本大学政経学部の教職に関する専門科目は次表のとおりとする。

計	四八	一五二
---	----	-----

(二) 履修方法

1. 政経学部政治学科及経済学科の授業科目は一般教育科目、外国語科目、保健体育科目、専門科目及び教職科目の五つとし、又夫々の授業科目を必修科目と選択科目とに分ける。
2. 学生は修業年限四ヶ年のうち、各年次に於いて学科目を次のとおり履修するものとする。
  - (1) 第一年次―一般教育科目、外国語科目、保健体育科目を主として履修。教職関係に於ての教職に関する専門科目のうち、日本史又は外国史、地理学又は地誌学、哲学又は倫理学、及び教職に関する専門科目の一部を加え履修出来るものとする。
  - (2) 第二年次―一般教育科目、外国語科目、保健体育科目のうち体育実技、専門科目の一部を主として履修。教職関係に於ての教職に関する専門科目のうち、日本史又は外国史、地理学又は地誌学、哲学又は倫理学、公衆衛生学、職業指導及び教職に関する専門科目の一部を加え履修出来るものとする。
3. 学生は専攻を希望する学科目の演習に指導を受け、その科目を主としての卒業論文を提出しなければならぬ。卒業論文は八単位とし、必修単位数に加える。

4. 学生は毎学年度始めに当該年度に開設する授業科目のうち、必修科目と共に、選択科目中より所要単位を選択し此れを届出て履修するものとする。
5. 一科目の課程を修了したものには、次の基準により単位を与える。
  - (1) 講義は一時間の講義に対して教室外における二時間の準備のための学習を必要とすることを考慮し、毎週一時間十五週の講義を以て一単位とする。
  - (2) 外国語（外国語講読、商業英語等を含む）及び演習は、教室内二時間の授業に対して教室外一時間の準備のための学習を必要とするものとし、毎週二時間十五週の授業を以て一単位とする。
- (3) 実験、教育実習、体育実技等は学習がすべて実験室、実習場、運動場等で行われるものとし、毎週三時間十五週の実験・実習・実技を以て一単位とする。
6. 卒業要件として要求する最低取得単位数は次のとおりとする。
  - (1) 一般教育科目に於いて人文・社会・自然の三系列の各々の関係科目にわたって必修科目を含め、夫夫三科目以上十二単位以上合計九科目以上三十六単位以上を必修取得しなければならぬ。
  - い。
- (2) 外国語科目は英語及び独逸語の二科目とし、此のうち英語を八単位以上、独逸語を四単位以上

合計十二単位以上を必修取得しなければならない。

(3) 保健体育科目に就いて、保健講義一単位、体育理論講義一単位、体育実技二単位合計四単位を必修取得しなければならない。

(4) 専門科目に於いて必修科目を含め選択した科目について合計七十二単位以上を取得しなければならない。

(5) 卒業資格として要求する最低取得単位数は前項の(1)乃至(4)による合計百二十四単位以上である。

7. 単位履修の認定は主として試験、研究報告、卒業論文による。

8. 教員職員免許状の授与を希望するものは教育職員免許法に規定する単位を取得しなければならない。  
い。

(三) 学士号

1. 本大学学部にて四ヶ年以上在学し、所定の学科目を履修し定められた単位数を取得したものは、学士試験に合格したものと見做し、卒業証書を与える。

2. 本大学政経学部政治学科を卒業したものは、政治学士、同学部経済学科を卒業したものは、経済学士と称することができる。

十、職員組織概要

(一) 政経学部

合 計	そ の 他	医 師 書 記 婦	司 書 部	学 生 部	事 務 局	図 書 館	事 務 員	助 手	講 師	助 教 員	教 員	学 長																										
	七 七	一 〇	二 〇	二 〇	二 〇	二 〇	二 〇	六	一 九	三 二	〇	〇																										
	六 三			二				一	六	八	四 九																											
	五 四							二 三	一	三																												
	一 九 四	一	二	二	二	二	二	六	四 〇	一 七	一 二 二	〇																										
												備 考																										
													(一) 従来通り、重複記入 上表中には、体育学部設置認可当時の 一般教育科目、外国語、保健体育関係 の教員を共通に次の如く含んでいる。																									
													<table border="1"> <tr> <td>計</td> <td>講 師</td> <td>助 教 員</td> <td>教 授</td> <td>専 任</td> </tr> <tr> <td>八</td> <td>一</td> <td>二</td> <td>五</td> <td></td> </tr> <tr> <td>二</td> <td></td> <td></td> <td>二</td> <td>兼 担</td> </tr> <tr> <td>二</td> <td>三</td> <td></td> <td>二</td> <td>兼 任</td> </tr> <tr> <td>一 五</td> <td>四</td> <td>二</td> <td>九</td> <td>計</td> </tr> </table>	計	講 師	助 教 員	教 授	専 任	八	一	二	五		二			二	兼 担	二	三		二	兼 任	一 五	四	二	九	計
計	講 師	助 教 員	教 授	専 任																																		
八	一	二	五																																			
二			二	兼 担																																		
二	三		二	兼 任																																		
一 五	四	二	九	計																																		

(二)

国士館大学設置認可当時と同大学政経学部増設後の比較

											国士館大学(体育学部)設置認可当時								
学 長	教 員	教 授	助 授	講 師	助 手	事 務 員	図 書 館 長	事 務 局 長	学 生 部 長	書 記	医 師	看 護 婦	そ の 他	合 計	専 任	専 担	兼 任	計	備 考
1	16	4	7	4	1	1	1	1	1	1	2	1	48	1	5	1	68		
									1					9			11		
														68					
											同大学政経学部増設後								
学 長	教 員	教 授	助 授	講 師	助 手	事 務 員	図 書 館 長	事 務 局 長	学 生 部 長	書 記	医 師	看 護 婦	そ の 他	合 計	専 任	専 担	兼 任	計	備 考
1	44	1	7	1	1	1	1	1	1	2	3	1	103	1	7	1	61	1	239
									1					61		9	3		
														61					
														239					

十一、学部及学科別学生入学定員・総定員



昭和三十六年四月

十五、開設年次

第一年次、第二年次

十六、併設学校・附属研究所等の概要

(一) 併設学校

国士館大学体育学部

国士館短期大学国文科

同 経済科(第二部)

国士館高等学校普通科

同 商業科(定時制)

国士館中学校

(二) 附属研究所

ナシ

(内表紙)  
「二、学

則」

第二学 則

国士館大学学則

第一章 総 則

第一節 目的及使命

第一条 国士館大学（以下本大学という）は、教育基本法及び学校教育法の精神に基き、広く一般の基礎教育に関する學術に更に専門の政治・経済並に体育に関する科学の理論と實際とを教授研究し、それ等の知識技能を修得させることを目的とし、世界文化の進展に寄与貢獻すると共に、実業界・教育界・並に体育界における社会人を育成することを使命とする。

第二節 学部学科の組織

第二条 本大学に政経学部及び体育学部を置く。

政経学部は政治学科及び経済学科を以て組織し、体育学部は体育学科を以て組織する。

本大学政経学部及び体育学部に教職課程を置く。

第三節 学生定員

第三条 本大学政経学部及び体育学部に入学させる定員は左の通りとする。

政経学部 政治学科 一〇〇名

同 経済学科 一〇〇名

体育学部 体育学科 一〇〇名

第四条 本大学政経学部及び体育学部の学生総定員は左の通りとする。

政経学部 政治学科 四〇〇名

同 経済学科 四〇〇名

体育学部 体育学科 四〇〇名

第二章 通 則

第一節 学年・学期及休業日

第五条 本大学の学年は四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第六条 学年を分けて左の二学期とする。

前期 自四月一日 至十月十五日

後期 自十月十六日 至三月三十一日

第七条 本大学の休業日は左の通りとする。

国民の祝日

日曜日

国士館創立記念日（十一月四日）

春期休業 自三月二十一日 至四月五日

夏期休業 自七月二十一日 至九月十日

冬期休業 自十二月二十五日 至翌年一月十日

春期、夏期及冬期休業の期間に就いて学長が必要と認めたときは変更することがある。

臨時休業は、その都度学長が決定する。

第二節 入学・休学・退学及転学

第八条 入学は学年の始めにおいてする。

第九条 本大学学部に入學することのできる者は、左の各号の一に該当するものでなければならない。

1. 高等学校を卒業した者
2. 通常の課程による十二年以上の学校教育を修了した者
3. 通常の課程以外の課程により前項に相当する学校教育を修了した者
4. 外国に於て学校教育に於ける十二年の課程を修了した者
5. 文部大臣の指定した者
6. 其の他本大学に於て高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めたる者

第十条 前条の資格を以って入学を志願する者には、本大学所定の入学試験を課し、これに合格した者に入学を許可する。

第十一条 入学志願者は、本大学所定の左の書類に定められた入学検定料を添え、指定期日までに提出を要する。

1. 入学願書
2. 履歴書
3. 出身学校の調査書又は卒業（終了）証明書及成績証明書
4. 写真（半身像、手札型最近のもの）
5. 身体検査書
6. 右の外、推薦による入学志願者に限り、出身学校長推薦書、人物考査書を要す。

第十二条 他の大学から本大学各部に転入を希望する者は、その大学の承認のある場合に限り、教授会の詮衡を経て入学を許可することがある。

他の大学を退学した者、短期大学を卒業した者で、本大学に編入学を希望するものについては、本大学教授会の詮衡を経て入学を許可することがある。

第十三条 前条により本大学に転入学又は編入学を希望する者は、第十一条所定の提出書類入学検定料に加

えて、在学した大学の修得単位証明書及成績証明書を添付しなければならない。

第十四条 入学を許可された者は、指定期日迄に本大学所定の宣誓書、保証人連署の在学証明書、戸籍抄本  
其他必要書類を提出し且つ入学金及授業料を納付しなければならない。指定期日までにこの手続きを完了  
しないときは入学許可を取消すことがある。

第十五条 保証人は父兄又は父兄に代つて本人を保証することが出来る者に限る。

第十六条 保証人が遠隔の地に居住している場合は、別に副保証人を設けなければならない。

副保証人は、東京都内又はその近傍の地に居住し、独立の生計を営む成年人者とし、且つ本校において適  
当と認められた者に限る。

第十七条 保証人及副保証人は、その保証する学生の在学中の事項に就き、その責任を負うものとする。

第十八条 学生及保証人又は副保証人は、その身分住所職業等に異動が生じた時は、直ちに届出なければな  
らない。

第十九条 保証人又は副保証人に変更の必要が生じた時は、直ちに願出て許可を受けなければならない。

第二十条 学生が病氣又は已むを得ない事故のため欠席する時は、理由を具し本人より届出なければならな  
い。

欠席七日以上に亘るときは、理由を具し保証人連署で届出を要する。又病氣のため七日以上欠席すると

きは医師の診断書を添付しなければならない。

第二十一条 学生が病気又は事故のため三ヶ月以上に亘り通学出来ない場合は、許可を得て休学することが出来る。休学しようとする者はその理由を具し保証人連署の休学願を学長に提出しなければならない。病気による休学の場合は医師の診断書を添付しなければならない。休学期間中でもその事故が止み、休学取消を願出た時は復学を許可することがある。

休学期間を経過し休学の事由が消滅したときは、休学者は直ちに復学願を提出し、学長の指示を受けなければならない。

休学期間は在学期間を算入することなく、授業料その他の納付金の徴収は行わない。

第二十二条 学生の病気其他已むを得ない事由で退学しようとするときは、その理由を具し保証人連署の退学願を提出し、学長の許可を受けなければならない。

前項によって退学した者が再入学を願出た時は、選考の上許可することがある。

第二十三条 学生は左記各号の一に該当するときは教授会の協議の上除籍される。

- (一) 学部が八年在学しても尚卒業が出来ない者
- (二) 操行が不良で改善の見込のない者
- (三) 学力劣等で将来成業の見込のない者

(四) 無届で三ヶ月以上連続欠席した者

(五) 授業料その他規定された納付金を納付しない者

第三節 入学検定料、入学金及授業料

第二十四条 本大学に入学を志願する者は所定の入学検定料を納付しなければならない。

第二十五条 本大学に入学を許可された者は所定の入学金、授業料、施設費、教材費、実験実習費等を納付しなければならない。

第二十六条 本大学の授業料その他は、毎学年始めに納入するものとする。

第二十七条 本大学の入学検定料・入学金・授業料は左の通りとする。

入学検定料 参千円

入学金 壹万円

授業料 年額参万六千円

第二十八条 学生は、在学中に授業料その他納付金に変更があつた場合には、新たに定められた金額を納付しなければならない。

第二十九条 既に納入した入学検定料・入学金・授業料その他の納付金は、如何なる理由があつてもこれを返還しない。

第四節 教職員組織

第三十条 本大学に学長、図書館長、学部長、事務局長、学生部長、書記、司書、医員及び看護婦を置く。

第三十一条 本大学に教授、助教授、専任講師、助手及び専任講師を置く。

第三十二条 本大学の教職員の職制及事務処理についてはこれを別に定める。

第五節 教授会

第三十三条 本大学に教授会を置き、学長及び専任の教授を以てこれを組織する。但し必要と認められる場合は助教授、専任講師を加えることができる。

第三十四条 本大学教授会は学長の教育に関する諮問機関とし、学長がこれを召集し、その議長となる。

第三十五条 本大学教授会は、学長又は教授会の提案する左の事項を審議する。

- 一、学則の制定・改廃に関すること
- 一、学科課程及授業に関すること
- 一、学生の入学・退学・休学・転学・除籍及び賞罰に関すること
- 一、学生の試験及卒業論文に関すること
- 一、学生の卒業に関すること
- 一、学生の厚生・補導に関すること

一、人事に関すること

一、その他研究及教育に関すること

第六節 附属図書館

第三十六条 本大学に附属図書館を設ける。

第三十七条 本図書館は国士館大学・国士館短期大学及国士館高等学校の教職員及学生生徒の研究並に教育に必要な図書を集集保管し閲覧させることを目的とする。

第三十八条 本図書館の閲覧時間は別にこれを定める。但し、祝日・本大学記念日・日曜は休館とする。尚必要に応じ適宜休館することがある。

第三十九条 定められた規則に違反し、又係員の指示に従わない者は入館を拒絶することがある。

第四十条 図書閲覧其他に関する細目は別にこれを定める。

第七節 保健施設

第四十一条 本大学は教職員・学生のために、医務室を設置し、一般養護に関する任務の外、健康増進に関する指導を行う。

第四十二条 医務室には左の職員を置く。

医師、保健婦

第四十三条 医務室に関する細則は別にこれを定める。

### 第三章 学 部

#### 第一節 在学年限・学科課程

第四十四条 本大学政経学部政治学科及び経済学科並に体育学部体育学科の在学年限は四ヶ年以上とする。

第四十五条 本大学政経学部政治学科及び経済学科並に体育学部体育学科に於いて開設する学科目は、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目、専門科目及び教職に関する専門科目とし、夫々の授業科目と各々の必修単位数、選択単位数、開設単位数及び開設年次は別表第一、第二及び第三による。

別表の外必要に応じて特別講義又は演習を開設することができる。

第四十六条 本大学政経学部並に体育学部に置く教職課程に於いて開設する教職に関する専門科目の授業科目と各々の必修単位数、選択単位数、開設単位数及び開設年次は別表第四による。

#### 第二節 履修方法

第四十七条 学生は、一般教育科目・外国語科目・保健体育科目・専門科目の各学科目を履修しなければならない。但し教育職員免許状取得希望者は前項の外、教職に関する専門科目を履修しなければならない。

第四十八条 一般教育科目は別表第一の人文関係、社会科学関係、自然科学関係の三系列について、夫々三科目以上十二単位以上合計九科目以上三十六単位以上を修得し、外国語科目に於ては英語を八単位以上、

独逸語を四単位以上合計十二単位以上を修得し、又保健体育科目に於いて講義及実技各二単位合計四単位を修得しなければならない。

第四十九条 専門科目に於いては必修科目を含め七十二単位以上を修得しなければならない。

学生は第四年次（又は最終年度）に卒業論文を提出しなければならない。卒業論文の単位は専門科目の単位に加算する。

第五十条 本大学に於ける卒業の要件としては、学生は四ヶ年以上在学し、一般教育科目三十六単位以上、外国語十二単位以上、保健体育四単位、専門科目七十二単位以上、合計百二十四単位以上を修得しなければならない。

第五十一条 授業科目の単位算出の基準は左のとおりである。

一、講義は一時間の講義に対して教育外における二時間の準備のための学修を必要とすることを考慮し、毎週一時間十五週の講義を以て一単位とする。

一、外国語（商業英語、外国書講読を含む）及び演習は教育内二時間の授業に対し教育外一時間の準備のための学修を必要とするものとし、毎週二時間十五週の授業を以て一単位とする。

一、実験・実習・体育実技は学習がすべて実験室、実験場で行われるものとし、毎週三時間十五週の授業を以て一単位とする。

第五十二条 学生にして教育職員免許状取得を希望する者は教育職員免許法に規定する単位を本学で開設する各学科目にわたって取得しなければならない。

### 第三節 試験及称号

第五十三条 必修科目及選択科目各授業科目の単位修了の認定は試験による。

第五十四条 試験は各授業科目の試験とし、年度或は各学期の終りに施行する。必要に応じて中間試験を行うことがある。

第五十五条 学生は当該年度に開設する学科目（授業科目）の内、必修科目の外選択科目より必要単位を選択し、開講後二週間以内に履修科目の申告を行わなければならない。学生は申告し所定の授業時数の三分の二以上出席した科目に限り試験を受けることができる。休学中の者は試験を受ける資格はない。

第五十六条 試験は筆答・口述・レポート・論文等による。実施に当ってはこれらの方法を併用することができる。

第五十七条 実験、実習等の単位修了の認定は平常の成績で定めることがある。

第五十八条 各学科目（授業科目）の成績は一期（十五週）で終了する科目については其の期の成績をとり、年間を通じて授業する科目については前期成績と後期成績との平均点をとることを原則とする。

各科目の成績は試験成績に出席率を加味し判定することがある。

第五十九条 各学科目（授業科目）成績について合格、不合格をきめる。成績評語は優・良・可・不可とし、優は一〇〇点―八〇点、良は七九点―七〇点、可は六九点―六〇点、不可は五九点未満とし、六〇点以上を合格、五九点以下を不合格とする。

第六十条 正当な理由がなくて試験を受けなかった該科目の評点は零点とする。

第六十一条 各学科目（授業科目）の試験に合格した者には当該科目所定の単位を与える。

第六十二条 単位取得が出来なかつた当該科目の受験には、改めて其の科目を所定の時数聴講し又は実習しなければその資格は与えられない。

第六十三条 本大学学部にて四年以上在学し、所定の授業科目を履修し、定められた単位数を取得した者は学士試験に合格したものとみなし卒業証書を与える。

第六十四条 本大学政経学部政治学科を卒業したものは政治学士、同経済学科を卒業したものは経済学学士、体育学部を卒業したものは体育学士と称することができる。

#### 第四節 聴講生

第六十五条 本大学に開設された学科目（授業科目）中、一科目又は数科目の聴講を願出するものがあるときは、その学力を詮衡し聴講生として入学を許可することができる。

第六十六条 聴講生の入学資格は、左の各号の一に該当するものでなければならない。

一、高等学校を卒業した者

一、其他教授会で前号と同等以上の学力があると認められた者

第六十七条 聴講生でその履修学科目の聴講修了者には聴講証明書を与える。聴講生に対しては試験を行わないことを原則とする。但し本人の請求があれば試験を行い、それに合格した者にはその科目に関する修了証書を授与し、単位の取得を認定することができる。

第六十八条 大学学部を卒業して聴講生となったものが、大学学部在学中と通算して所定の単位を取得した場合、教員免許状授与を申請する資格を得ることができる。

第六十九条 聴講生に関して前条に規定した以外の事項は、本大学学部一般の規定を準用する。

#### 第五節 外国人学生

第七十条 外国人が本国の許可を得て、本大学に入学を志望するものがあるときは、教授会で詮衡した上、入学を許可する。

第七十一条 外国人学生に関し、前条に規定した以外の事項は本大学学部一般の規定を適用する。

#### 第六節 委託学生

第七十二条 他の大学、研究機関その他から、特に本大学開設学科目の履修を目的として指導を委託された者があるときは、教授会の詮衡を経て委託学生として入学を許可することができる。

第七十三条 委託学生に関して特に規定あるものの外は、本大学学部一般の規定を適用する。

#### 第七節 公開講座

第七十四条 本大学学部は、在学生のための授業科目以外に、必要に応じ特別の講座を設け、これを一般大衆の教養のために公開することがある。

第七十五条 公開講座に関する細目はこれを別に定める。

第七十六条 削除

#### 第八節 賞 罰

第七十七条 本大学学部の学生で、学術優秀、操行善良の者は、教授会の推薦により特待生の待遇を与えられることがある。特待生となった者は次学年の授業料が免除される。

第七十八条 本大学学部を卒業した者で、学力優秀、操行善良で将来有望の者には、教授会の詮衡を経て学費を給与し、その研究を継続させ又は留学させることがある。

第七十九条 特待生で学業又は研究を怠り、若くは不都合な行為があつた者は直ちにその待遇及特権が停止される。

第八十条 本大学学生で学則に違反し校内の風紀をみだし、校具を汚損し又は学生の本分に反する行為のあつた者はその軽重に従い懲戒を行う。

懲戒は謹慎、停学、放校の三種とする。

第九節 寄 宿 舎

第八十一条 本大学に寄宿舍を置く。

寄宿舍に関する規定はこれを別に定める。

附 則

第八十二条 本学則は昭和三十三年四月一日から施行する。

附 則

第八十三条 本学則は昭和三十六年四月一日から施行する。

〔別表第一〕第四 略〕

(内表紙)

「三、校 地」

第三 校地 (図面添付)

校舎敷地	種 別		所 在 地	備 考
	専用(坪)	共用(坪)		
一、〇〇〇			東京都世田谷区世田谷一丁目一〇〇六	国士館大学政経学部
三、〇〇〇			東京都町田市広袴町八四〇	

〔内表紙〕  
〔四、校舎等建物〕

第四 校舎等建物 (図面添付)

一、第一表

種別	専用	共用	計	建物様式	室数	備考
六号館	一、四〇四、八〇 (坪延)		一、四〇四、八〇	鉄筋コンクリート 五階建	四五	竣工予定 年月日 昭三六、三、二〇
計	一、四〇四、八〇		一、四〇四、八〇		四五	
五号館			一、三〇二、五〇	鉄筋コンクリート四階建	三六	国士館大学 体育学部専用
体育館		三五九、六三	一、三〇二、五〇 三五九、六三	鉄筋コンクリート平家 建一部二階建	八	国士館大学 体育部と共用

校舎敷地		五、〇八八、三五	東京都世田谷区世田谷一丁目一〇〇六	国士館大学体育学部 〃〃〃 高等学校 共用
運動場	五、一四四		東京都町田市広袴町八四〇	国士館大学政経学部
運動場		五、二〇一、〇〇	東京都世田谷区若林町二九三	国士館大学体育学部 〃〃〃 短期大学 共用
運動場		八、〇八一	東京都町田市広袴町八四〇	〃〃〃 高等学校 共用
合計	九、一四四	一八、三七〇、三五		右 同

種別	専用	共用	計	建物様式	室数	備考
一号館		一四一、二九	一四一、二九	木造スレート葺平家建	六	国士館高等学校 と中学校
寄宿舎		一二〇、一五	一二〇、一五	木造一部トタン葺 二階建	一六	
館長公舎		四九、三二	四九、三二	木造瓦葺平家建	九	
学生集会場		四一、二一	四一、二一	木造一部トタン葺 平家建	三	
車庫		三七、〇〇	三七、〇〇	木造トタン葺平家建	一	
二号館		二一三、四五	二一三、四五	木造アルミ二階建	九	国士館高等学校 と中学校
高校事務室		三八、二四	三八、二四	木造瓦葺二階建	五	右 同

種別	専用	共用	計	建物様式	室数	備考
四号館		九〇、〇七	九〇、〇七	木造アルミ葺平家建	三	国士館短期大学 と共用
三号館		四五六、八〇	四五六、八〇	木造スレート葺 二階建	二七	国士館短期大学 と共用
学生便所		四五〇	四五〇	木造スレート葺 平家建	一	同 右
計		五五一、三七	五五一、三七			

種別	専用	共用	計	建物様式	室数	備考
武道場		二三五、二五	二三五、二五	木造瓦葺平家建	六	右 同
運動具庫		一二、五〇	一二、五〇	木造スレート葺平家建	二	
学生控室		一一、〇〇	一一、〇〇	右 同	一	
厩舎		二〇、二〇	二〇、二〇	木造トタン葺平家建	一	
計		一、九四一、〇八	一、九四一、〇八			

二、第二表

六号館	建物種別	専用	専用別共	室名	坪数	用途	収容人数	室数	備考
	第三事務室			室	一、四〇四・八〇	政経学部事務用	一〇五	一	政経学部用
	教員控室			室	一三・八〇	非常勤講師用	一〇	一	
	第一実習室			室	二七・三四	講義用	五〇	一	
	第二実習室			室	二〇・五〇	学生実習用	三〇	一	
	第一演習室			室	二〇・五〇	右同	三〇	一	
	第二演習室			室	二七・三五	学生演習用	五〇	一	
	学生控室			室	二七・三五	右同	五〇	一	
	ポンプ室			室	四七・九〇	学生控用	一〇〇	一	
					三・〇〇		〇〇	一	

合計	専用計	共用計	寄衛室計	職員宿舍	教員宿舍
	一、四〇四、八〇	三、二〇〇、六一	二、七五	二、二五	四三、五〇
			二、七五	七〇五、四一	四三、五〇
四、六〇五、四一			二、七五	七〇五、四一	四三、五〇
			木造瓦葺平家建	木造一部アルミ葺二階建	木造一部アルミ葺二階建
			一	三	四
			右同	右同	右同
	政経学部専用	政経学部専用	右同	右同	右同
	高等学校 短期大学部 と共用	体育学部			

二階 便所	第十九研究室	第十八研究室	第十七研究室	第十六研究室	第十五研究室	第十四研究室	第十三研究室	第十二研究室	第十一研究室	第十研究室	第九研究室	第八研究室	第七研究室	第六研究室	第五研究室	第四研究室	第三研究室	第二研究室	第一研究室	一階 階段	一階 廊下	一階 玄関ホール	一階 洗面所	一階 便所
八・一八	五・四三	一・二・五五	一・二・五五	九・一〇	一・二・五五	一・二・五五	九・一〇	一・三・八〇	一・三・八〇	一・三・八〇	一・三・八〇	一・二・五五	一・二・五五	九・一〇	一・二・五五	一・二・五五	九・一〇	一・三・八〇	一・三・八〇	一・一・八一	四六・五四	二〇・五四	二・七三	八・一八
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	専任教員用				
右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右					
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
														用研究図書及助手	合 同					用研究図書及助手	合 同			

第十三教室	四階廊下	四階洗面所	四階便所	第二十一研究室	第十二教室	第十一教室	第十教室	第九教室	第三階廊下	三階洗面所	三階便所	第二十教室	第八教室	第七教室	第六教室	第五教室	第四教室	第三教室	第二教室	二階廊下	二階洗面所			
六一・五三	四一・八四	四一・一一	二・七三	八・一八	五・四三	九五・七〇	四七・九〇	四七・九〇	二七・三五	四一・一一	四一・一一	二・七三	八・一八	三四・二〇	三四・二〇	三四・二〇	二七・三四	二七・三四	二七・三四	三四・二〇	三四・二〇	二七・三四	四〇・七〇	二・七三
				専任教員用	学生合同講義用	右同	右同	講義用				専任教員用	同右	同右	同右	同右	同右	同右	講義用					
一〇〇	一〇〇			一	一	八〇	八〇	五〇						六〇	六〇	五〇	五〇	六〇			五〇			
						一一	一一	一一						一一	一一	一一	一一	一一				一一		

											五号館	計										
											共用											
一階洗面所	一階洗面所	湯沸室	宿直室	ボンブ研究室	第七研究室	第六研究室	第五研究室	第四研究室	第三研究室	第二研究室	第一研究室	第二事務室	講師室	第一事務室	学長室	第五階階段	第五階廊下	夕食室	第十六教室	第十五教室	第十四教室	
三〇	七〇	五〇	五〇	一四・五	一二・五	一二・〇	一二・五	一二・〇	一六・五	一五・〇	二〇・〇	一一・五	三一・五	三一・五	二四・五	一、四〇四・八〇	四・八四	三八・二六	五〇・〇	四七・八五	六一・五三	六一・五三
				全同	全同	全同	全同	全同	全同	全同	専任教員研究用	事務用	非常勤講師研究室	事務用	学長公室兼会議室					右同	右同	学生講義用
				二	二	二	二	二	二	二	二	一〇	二〇	一五	二〇					八〇	八〇	一〇〇
				一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三六				一		
															国士館大学 体育学部と共用							

第十三教室	第十二教室	第十一教室	第十教室	第九教室	第八教室	第七教室	第六教室	二階廊下	二階階段ホール	二階洗面所	二階便所	第五教室	第四教室	第三教室	第二教室	第一教室	物理学 実験室	生理学 実験室	体育心理学 実験室	生理学 実験室	一階廊下	一階ホール	一階段及ホール
三一・五	三一・五	三一・五	二四・五	二四・五	三一・五	三一・五	二四・五	三六・五	二一・〇	三〇	七〇	三一・五	三一・五	二四・五	二四・五	三一・五	三一・五	二四・五	三一・五	二四・五	三六・五	三一・五	二一・五
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	講義用						〃	〃	〃	講義用	〃	〃	〃	実験用			
六〇	六〇	六〇	五〇	五〇	六〇	六〇	五〇					六〇	六〇	五〇	五〇	六〇	六〇	五〇	六〇	五〇			
—	—	—	—	—	—	—	—					—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

体育館	(図書室)																		
専用																			
女子更衣室 用具室 指導員室兼研究室 管理保健室 第二更衣室 体育場	塔屋	四階廊下	四階階段ホール	四階洗面所	四階便所	第二学生控室	第一学生控室	書庫	事務室	新聞雑誌閲覧室	特別閲覧室	図書閲覧室	第十五教室	三階廊下	三階階段ホール	三階洗面所	三階便所	第十四教室	
八・二一 八・七九 八・〇三 五・六五 一・二五 二・五六・四三	八・五	三六・五	二一・五	三〇	七〇	五六〇	五六〇	二二〇	五〇	九〇	二〇〇	五六〇	三一・五	三六・五	二一・五	三〇	七〇	二四・五	
女子更衣及休憩用 用具格納用 指導員控室用 管理保健用 更衣及休憩用 体育実習用	〃 学生控室用 専属事務員用 一般学生職員用 教授職員用 学生図書閲覧室 講義用																		
二〇 一〇 一〇 四〇 四〇	二〇〇 二〇〇 三〇 三〇 五〇																		
一 一 一 一 一 一 八	一 一 一 一 一 一 一																		
										政経学部と共用 開閉窓により換気採光完備、座席数一六五 従前の一番二番合併教室を図書室に改造す (昭三五二月)									

三 号 館	四 号 館	計 厩 舎	学 生 控 室	運 動 具 庫		武 道 場	
共 用	共 用	専 用	専 用	専 用		専 用	
一 番 教 室	二 番 教 室	三 番 教 室	四 番 教 室	五 番 教 室	六 番 教 室	劍 道 場	研 究 室
一 六 〇 〇	二 〇 〇 〇	二 〇 〇 〇	二 〇 〇 〇	二 〇 〇 〇	一 六 〇 〇	〃	〃
二 五 ・ 三 三	六 四 ・ 七 四	一 、 九 四 一 ・ 〇 八	二 〇 ・ 二 〇	一 一 ・ 〇 〇	一 二 ・ 五 〇	三 三 ・ 二 五	二 七 ・ 七 八
併 合 教 室	控 室	厩 舎	学 生 控 室	運 動 具 庫	そ の 他	柔 道 場	音 楽 教 室
講 義 用	合 併 講 義 用	学 生 馬 術 用	学 生 集 会 用	運 動 具 格 納 用	〃	物 品 格 納 用	研 究 用
四 〇 〇	四 〇 〇					一 〇 〇 〇	一 〇 〇
二 七	二 一	三	七	一	二	一 一 一	一 一
国 士 館 と 共 用	国 士 館 と 共 用						





〔内表紙〕  
〔五、図書・標本・機械・器具等施設概要〕

第五 図書標本機械器具等設備

一ノ一 図書

種別	専用	共用	計	内訳		備考
				内国書	外国書	
一般教育図書 人文関係 社会科学関係 自然科学関係	五〇〇 三五〇 三五〇	三〇九〇 三一二一 一八六〇	三五九〇 三四八一 二二一〇	二三四九 一九八〇 一五二五	一二四一 一五〇一 六八五	体育学部 短期大学 と共用 以下同じ
計	一二〇〇	八〇八一	九二八一	五八五四	三四二七	

合計	共用計	専用計	計	職員宿舎	教員宿舎
				第一 第二 室 室	第一 第二 教員 宿舎 宿舎
			七〇五・四一	一二・二五 九・〇〇	二一・五〇 一二・〇〇
			一、四〇四・八〇		
			三、二〇〇・六一		
			四、六〇五・四一		
				三	四



政経学部	二〇		
計	一〇〇点	六五五点	七五五点
			外(三五五点)以上総数一〇九〇点

〔二ノ二標本目録 略〕

三ノ一 機械器具

種別	専用	共用	計	備考
一般教育	一〇〇点	三五一点	四五一一点	体育学部短期大学と共用
専門教育				体育学部短期大学と共用
体育学部		二二六六	二三〇九	と共用
政経学部	四三			(内高等学校の分六二〇点)
計	一四三	二六一七	二七六〇	

〔三ノ二機械器具目録 略〕

(内表紙)

〔六、学部及び学科別学科目又は講座〕

第六 学部及学科別学科目

学部	学科	学 科 目	年 次 及 単 位				備 考
	一般教育科	人文関係	第一年次	第二年次	第三年次	第四年次	
						計	

部			学			經			政				
(通共) 科 科			学 学			治 濟			政 經				
計	独 英 逸 語 語	外 国 語 科 目 計	地	統 数	生 自	教 社	政 經	心 法	社 音	地 歴	漢 外	国 倫	哲
			計	物 物	学 学	育 会	治 濟	理	学 学	関 係	楽 理	史 読	文 講
六	二	四	三八	四	四		四	四	四	二	四	四	四
六	二	四	三二	四	四	四	四	四		四		四	四
四	二	二											
四	二	二											
二〇	一八	一二	七〇	四	四	四	四	四	四	四	二	四	四



部		学																					
科		学																					
計	公衆衛生学	倫理学	哲学	地学	地学	外史	日史	卒业論	外国政治書講	演習	国際經濟論	貿易論	金融論	經濟學	財政學	經濟學	新開學	國際機構論	政治哲學	國際文化政策	社會政策	労働法	商法
八			四			四																	
三〇	四	四	四	四				二									四						
八四		四							二	二			四	四	四	四		四	四	四			四
五四									八	二	四	四									四	四	四
一七六	四	四	四	四	四	四	四	四	八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四



部		学																			
科		学																			
計	職業指 導	公衆衛生 學	倫理學	地理學	地國本 史	外本 史	卒論 文	外國經濟 書讀	演習 語	商業英 語	新開 學	經濟思想 史	國際政治 論	外交學 論	國民學 法	勞働法 法	簿記原 理	市場論	經濟學 題	取引所 論	
八			四	四																	
二八		四	四		四		二	二	二				四								
一〇六		四	四				二	二	二	四	四	四	四	四	四	四	四			四	
五八							八	二			四					四		四	四		
二〇〇		四	四	四	四	四	四	八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四

部 学 経 政																
計 合	計	(通共) 程 課 職 教														
		函 書 館 学	教 育 実 習	商 業 科 教 育 法	社 会 科 教 育 法	教 育 行 政 学	教 育 心 理 学	青 年 心 理 学	教 育 心 理 学	道 徳 教 育 の 研 究	教 育 原 理	教 職 に 関 す る 専 門 科 目				
六七	四							四								
一〇九	一二					四			二	二	四					
二〇八	一四				四		四	四	二							
一二三	七						三	四								
五〇七	三七						八	三	四	四	四	二	二	四	二	四

〔七、修業年限・履修方法及び学士号 八、学部及び学科別学生定員 略〕

(内表紙)  
〔九、職員組織〕

〔一、職員総括表 二、学部及学科別教員 略〕

三、学長並びに学部及学科別教員予定表

○	○	○	○	○	○	○	号	番	
7	6	5	4	3	2	1	学	名	
教	教	教	教	教	教	学	長	職	
教授	教授	教授	教授	教授	教授	長			
科教一	科教一	科教一	科教一	科教一	科教一			の	
目育般	目育般	目育般	目育般	目育般	目育般			専門科目	
専任	専任	専任	専任	専任	専任	専任		の別	
								兼任	
								兼担	
								本務の名称	
								担	
国文学	生物学	数学	心理学	哲学	倫理学			担当	
和漢文学科 明治四五七	早稲田大学 文学部 大正六・八	東京帝国大学 理科大学 大正六・七・一七	東北帝国大学 理科大学 昭和七・四	米国加州大学 大学院 心理学専攻 昭和七・四	東京帝国大学 文学部 哲学科 大正一・二・三・三	文学部大学院(倫理学) 昭和二・八・三	政治経済科 大正四・六	早稲田大学 卒業 昭和二・八・三	最終卒業学校 学部、学科名 年月
	士博学理	士博学理	B. A. 及M. A		士博学文			号	
論著	論著	そ論著	論著	論著	論著	著		及著	
七文五書	九四文六書	の他文書	学会文書	八文四書	四文一書	四書		論文	
○・○四	○・一四	○・三四	○・一二	○・五三	○・二一			術	
昭和三六	昭和三六	昭和三三	昭和三三	昭和三六	昭和三三	昭和三三		び書	
40,000	40,000	40,000	40,000	40,000	40,000			歴	
京東	京東	葉千	岡福	葉千	島広	京東		教	
男	男	男	男	男	男	男			
明治二二・九・二三	江本義教 明治二五・二・二八	柴田寛 明治一九・三・二五	三隅一成 明治二七・四・一	橘高倫一 明治三〇・一・一	佐藤嘉祐 明治三三・二・二五	柴田徳次郎 明治三三・二・二〇		氏	
教授	教授	教授	教授	教授	教授			名	
早稲田大学 昭和二四	学習院大学 昭和二五	国士館大学 昭和三二・一〇・	国士館大学 昭和三二・二・二四	宇都宮大学 昭和二八・四・二六	国士館大学 昭和三二・一〇・	国士館大学 昭和三二・一〇・		備考	
199~204	193~198	187~192	179~186	173~178	169~172	165~168		申請学校名	
								審査年月日	
								職名、学科目	
								個人	
								教員	
								頁数	
								調書	

	○	○	○			○	
15	14	13	12	11	10	9	8
教授	教授	教授	教授	講師	助教授	助教授	教授
科教一	科教一	科教一	科教一	科教一	科教一	科教一	科教一
目育般	目育般	目育般	目育般	目育般	目育般	目育般	目育般
兼任	兼任	兼任	兼任	専任	専任	専任	専任
教育原理 教授 国史館大学 教職課程	政治学原論 教授 国史館大学 政経学部教	経済政策 教授 国史館大学 政経学部教	教育行政学 教授 国史館大学 教職課程教				
教育学	政治学	経済学	法学	生物学	国文学	法学	地質学
哲学専攻 早稲田大学 文学部 文学科 明治四一七	政治史専攻 早稲田大学 政治経済 学部大学院 研究科政治学 大正八・九	法科大学法科 早稲田大学 政治経済 学部大学院 研究科政治学 明治四三・六	慶応義塾大学法学部 政治学科 昭和九三・三一	東京帝国大学 理科大学 臨海実習会修了 明治三八・八	文学部 文学科(国文学専 攻) 昭和一七・九二・五	早稲田大学 法学研究科 昭和三〇・三	東京帝国大学 理科大学 地質学科 大正一〇・五
		士博学法				士修学法	士博物理
論著 一〇書 四五・五三	論著 その他 五文 〇・七二	論著 二〇書 〇・〇二	論著 予定一 六書 二一 〇・一	論著 三〇書 ナシ 〇・六三	論著 二文一書 〇・七一	論著 一文一書 ナシ 〇・八一	論著 十三文一書 三六 〇・〇一
昭和三三 四	昭和三四 四	昭和三四 四	昭和三四 四	昭和三四 四	昭和三四 四	昭和三四 四	昭和三四 四
40,000	40,000	40,000	20,000	30,000	30,000	40,000	40,000
京東	井福	京東	野長	山岡	京東	京東	京東
男	男	男	男	男	男	男	男
小沢恒一 明治一六・六・六	内田繁隆 明治二四・二・二	渡部鏡蔵 明治一八・二〇・二四	横田重左衛門 明治四一・八・二六	影山藤作 明治八・一・二六	宮沢林直 大正八・四・二七	柴田梵天 大正六・六・二八	赤木健 明治二八・二〇・三
教授 昭和三二・一〇・ 二四 教育学	教授 政治学原理 日本政治史 早稲田大学 昭和二七・四	教授 経済政策 経済原論 高崎経済大学 昭和三二	教授 社会科教育 法教育行政法学 愛知学院大学 昭和三一・四	講師 生物学 国史館大学 昭和三二・二〇・ 二四	助教授 国文学 国史館大学 昭和三二・二〇・ 二四	助教授 法学 国史館大学 昭和三二・二二・四	教授 地学 お茶の水女子大学 昭和三五・四・一
(441~646)	(299~304)	(483~486)	(647~652)	217~220	213~216	209~212	205~208

国史関係資料の翻刻並びに補註 第八卷

○	○	○	○	○	○	
21	20	19	18	17	16	
教授	教授	教授	教授	講師	助教授	
科教一	科教一	科教一	科教一	科教一	科教一	
目育般	目育般	目育般	目育般	目育般	目育般	
兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	
哲学教授 国史館短期 大学	義中国文学講 史日本漢文学 教授 国史館短期 大学	義中国文学講 中国文学史 教授 国史館短期 大学	義中国文学講 中国文学史 教授 国史館短期 大学	講義 経済学部 国史館短期 大学	政経学部 助教 日本史(教) 国史館短期 大学	教育史
哲学	漢文講読	漢文講読	外国文学	社会学	歴史	
昭和二三・四・二四 文学部 大学院哲学科修了	早稲田大学高等師範 部 国語漢文科 大正三・七・五		東京帝国大学 文学部 ドイツ文学科 昭和三・三二	龍谷大学文学部社会 学科 昭和四・三 米國パシフィック大 学文学部社会学科 昭和一〇・二一	東京文理科大学 史学科 昭和二五・三・一五 同大学研究科修了 昭和二七・三・三一	
			士博論文			
論著	論著 刊行予定	著	その論著 の他五書	論	論著	
四文二書	四文二書	六書	四文二書	九文	三文二書	
〇・三一	〇・五一	〇・八三	〇・七三	〇・八	〇・八	
四三三昭 和	四三三昭 和	四三六昭 和	四三六昭 和	四三六昭 和	四三六昭 和	
5,000	5,000	5,000	5,000			
京東	京東	京東	京東	京東	京東	
男	男	男	男	男	男	
明治三三・八・三 太田定康	成井弘文 明治二三・三・二八	新田興 明治二四・二・二五	芳賀檀 明治三七・六・七	三上弘之 明治三九・九・二八	藤井秀夫 昭和二・一・二一	
教授 哲学	教授 漢文学	教授 漢文学	教授 ドイツ文学		助教 歴史	名古屋学院短期 大学 昭和三四・九・一五
233~238	229~232	225~228	221~224	(353~358)	(455~460)	

○	○			○	○	○		
30	29	28	27	26	25	24	23	22
教授	教授	教授	教授	講師	講師	講師	講師	講師
外国語	外国語	外国語	外国語	一般教員	一般教員	一般教員	一般教員	一般教員
専任	専任	専任	専任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任
				統計学 教授 日本大学	人文地理 助教授 日本大学 文学部	音楽 教授 上野学園大 学	歴史 助教授 東京経済大 学	経済学 教授 経済学 部 教授 経済学 部
独逸語	英語	英語	英語	統計学	地理	音楽	歴史	経済学
東京帝国大学文学部 ドイツ文学科 明治四二・四	明治大学商科専門部 正科 大正六・九	英国ワシントン州立 大学 大学院社会学科 大正一五・六	早稲田大学 英文学科 明治四二・三	東京文理科大学 数学科 昭和七・三	日本大学法文学部文 学科 (地理学専攻) 昭和一五・三・二五	東京音楽学校本科声 楽部 同研究科 明治四四・三	東京帝国大学文学部 西洋史学科 昭和一〇・三・三一	東京帝国大学経済学 部経済学科 昭和五・三
論著	著	論著	論著	論著	論著	著	論著	著
文六書	六書	文二書	その他六文二書	文五文六書	文八文三書	三書	一文二書	一五書
〇・五三	〇・四二	〇・二三	〇・三三	〇・四二	〇・四	〇・七一	〇・八一	七・三一
昭和三六	昭和四三	昭和四三	昭和四三	昭和四三	昭和四三	昭和四三	昭和四三	昭和四三
40,000	40,000	40,000	40,000	5,000	5,000	5,000	5,000	10,000
京東	京東	野長	京東	京東	形山	湯新	京東	京東
男	男	男	男	男	男	男	男	男
成田秀三 明治一四・二・四	可児猛 明治二九・二・一〇	西野入徳 明治二〇・二・二二	市川又彦 明治一九・二・二三	佐藤輝實 明治四一・二・一〇	大井武 大正四・五・七	大和田愛羅 明治一九・三・二四	神保規一 明治四五・二・一〇	日下藤吾 明治四一・二・二六
教授 英語	関東短期大学 昭和三二・三・二四	国士館大学 昭和三二・三・二四	国士館大学 昭和三二・三・二〇	麻布獣医大学 昭和二四・九	日本大学 昭和三二・七・一	日本女子体育短期 大学 昭和三〇・四	東京経済大学 昭和二五・四	国士館大学 昭和三二・二・〇
267~270	261~266	255~260	251~254	(637~600)	247~250	243~246	(239~242)	(611~614)

国士館史関係資料の翻刻並びに補註 第八卷

○	○	○	○	○	○	○	○
38	37	36	35	34	33	32	31
助手	教授	教授	教授	講師	教授	講師	助教
科体保 目育健	科体保 目育健	科体保 目育健	科体保 目育健	科外国語 目語	科外国語 目語	科外国語 目語	科外国語 目語
専任	兼任	兼任	専任	兼任	兼任	兼任	専任
	学解剖及生理 教授 国士館大学 国士館大学 国士館大学	(陸上競技) 教授 体育管理 体育方法 国士館大学		独逸語 教授 日本大学	英語 教授 国士館短期 大学	倫理学(教) 教授 政経学部 国士館大学	
実技	講義	実技 講義	実技 講義	独逸語	英語	独逸語	英語
昭和三五・三二・一五 国士館大学 体育学部	昭和一六・一一 慈恵会医科大学 士博医学	昭和一一・一五 東京高等師範学校 体育科甲組	大正六・三二・二六 東京高等師範学校 体育科	昭和一一・三二 東京帝国大学 文学部独逸科	大正六・七 東京帝国大学 文学部	昭和八・三三・三一 東京帝国大学 文学部 倫理学科	大正九・六・三〇 東京帝国大学 法学部英法科
	士博医学						
ナシ	論 五文	論著 五文三書	著 四書	著 七書	著 二書	論著 五文四書	論著 ナシ 一文
シナ	○・五	○・九	○・一一	○・三一	八・三三	○・一一	○・〇一
昭和三六 四	昭和 三六 四	昭和 三三 四	昭和 三三 四	昭和 三三 四	昭和 三三 四	昭和 三四 四	昭和 三六 四
12,000			40,000	5,000	5,000		30,000
山歌和	京東	湧新	京東	鳥徳	京東	京東	京東
男	男	男	男	男	男	男	男
昭和 一三・二・三 武	大正 六・一・一 佐藤英夫	明治 四四・四・二 金子藤吉	明治 二五・三・二 森秀	明治 四三・九・四 満足卓	明治 二六・二・一 榎本剛	明治 四三・二・一 阿部秀夫	明治 二八・九・一 塚本貞二
	解剖及生理学 教授 国士館大学 昭和三二・二・五	教授 保健体育 国士館大学 昭和三二・一〇・二四	教授 体育方法(体操) 国士館大学 昭和三二・二・五	講師 独逸語 国士館大学 昭和三二・一〇・二四	教授 英語 国士館大学 昭和三二・一〇・二四	講師 独逸語 中央大学 昭和二七・三	助教 英語 金沢大学 昭和二五・一〇・二八
295~298	291~294	287~290	283~286	279~282	275~278	(411~468)	271~274

○	○	○		○	○	○
44	43	42	41	41	40	39
教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授
学部政治学 政治学 科 門	学部政治学 政治学 科 門	学部政治学 政治学 科 門	学部政治学 政治学 科 門	学部政治学 政治学 科 門	学部政治学 政治学 科 門	学部政治学 政治学 科 門
専任	専任	専任	専任	専任	専任	専任
民法	国際政治学 外交史 外国政治学 書講読	行政法	民法	憲法	政治思想史 政治学演習	政治学原論 日本政治学 大学院研究科 政治学、政治史 大正八・九
東京帝国大学 法科大学 政治学 大正一〇・四・三〇	東京帝国大学 法科大学 政治学 大正三・六	東京帝国大学 法科大学 英法科 明治四二・七・一〇	明治大学政治経済学 科 昭和一七・九・二五 中央大学法学部 昭和二三・三・二五	東京帝国大学 法科大学 明治三〇・七	東京帝国大学 法律学部 大正六・三	早稲田大学政治経済学 部 大学院研究科 政治学、政治史 大正八・九
	士博学法			士博学法	士博学法 (ツイト)	
論 四文	論著 八文六書		論著 二五書 一二文	著 六書	論著 五文六書	主要著書 論文五五 多数
〇・六三 昭和三六 四	〇・五一 昭和三六 四	〇・五三 昭和三六 四	〇・二一 昭和三六 四	〇・四五 昭和三六 四	〇・九 昭和三六 四	〇・七二 昭和三六 四
40,000	40,000	40,000	40,000	40,000	40,000	40,000
重三	梨山	京東	京東	川奈神	京東	井福
男	男	男	男	男	男	男
清水谷隆寛 明治二三・二二・一六	三枝茂智 明治二一・一〇・二三	沢田竹治郎 明治一五・八・二	打越定男 明治四一・八・二六	寛克彦 明治五・一二・二八	藤沢親雄 明治二六・九・一八	内田繁隆 明治二四・二・二
香川大学 昭和二四・三 教授 民法 法学	大東文化大学 昭和三〇 教授 国際政治学 政治学	愛知大学 昭和二八・四 教授 行政法	千葉敬愛短期大学 昭和二六・四 助教授 民法 法学 刑法	東京帝国大学 法科大学 明治三六 行政法 憲法	日本大学 昭和三〇・四 教授 政治学	早稲田大学 昭和二七・四 教授 日本政治史 政治学原理
333~338	327~332	321~326	311~316	311~316	305~310	299~304

国史館史関係資料の翻刻並びに補註 第八卷

○	○	○	○	○	○	○
51	50	49	48	47	46	45
講師	講師	講師	講師	講師	助教授	助教授
学部政治学専攻科	学部政治学専攻科	学部政治学専攻科	学部政治学専攻科	学部政治学専攻科	学部政治学専攻科	学部政治学専攻科
専任	専任	専任	専任	専任	専任	専任
外交史	外国政治書講読	民法	司法制度	社会学	日本法制史及演習	国際文化政策論
昭和三五・三三・三一 早稲田大学法学部 旧制大学院修了	昭和二二・九・二五 早稲田大学 政治経済学部 政治学科	昭和三一・三二・二五 早稲田大学大学院 法学研究科 修士課程	大正八・七 東京帝国大学 法学部 独法科	昭和一〇・二一 米国家ソシエツク大 学文学部社会学科	昭和二五・九 慶応義塾大学法学部 政治科	昭和一九・九 東京帝国大学 法学部 政治学部
		士修学法				
論	論著	論		論	論著	論著
八文	一文二書	十一文		九文	一文一書	一文二書
○・四	○・五	○・三	○	○・八	六・六	○・八
昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四
20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	30,000	30,000
京東	京東	川奈神	潟新	京東	川奈神	口山
男	男	男	男	男	男	男
昭和四二・二六 大畑篤四郎	大正一四・六・九 清水良三	昭和四七・一五 大澤正男	明治一八・五・一三 大野璋五	明治三九・九・二八 三上弘之	昭和二三・一 利光三津夫	大正四二・二・二三 櫻井光堂
外交史演習 講師		民事訴訟法 講師			東洋大学 助教授	麗沢大学 助教授
昭和三五・四・一 早稲田大学		昭和三二・二・一九 山梨学院短期大学		昭和二三・二・二二 日本法史学	昭和二三・二・二二 国際文化政策論	昭和三四 国際文化政策論
373~398	369~372	363~368	359~362	353~358	347~352	339~346

○	○	○				○
58	57	56	55	54	53	52
教授	教授	教授	助手	助手	助手	講師
専科 政治学	専科 政治学	専科 政治学	専科 政治学	専科 政治学	専科 政治学	専科 政治学
目門	目門	目門	目門	目門	目門	目門
兼任	兼任	兼任	専任	専任	専任	専任
教授 国士館大学 政治学 経済学部	教授 国士館大学 政治学 経済学部	教授 国士館大学 政治学 経済学部				
経営学	財政学	経済原論	政治制度論	政治学	西洋政治史	日本政治思想史
大正十二・三 ベルリン大学	日本大学商学部 経済学 大正一〇・四・三〇 ハーヴァード大学 ジョンズホプキンス 大学	東京帝国大学 経済学部 法科大学 明治四三・六	早稲田大学大学院 政治学研究科 昭和三三・五	日本大学大学院 法学研究科 政治学専攻	日本大学大学院 法学研究科 政治学専攻 昭和三三・三	早稲田大学 大学院 政治学研究科 昭和三〇・三
士博学商	士博学済経	士博学法		士修学法	士修学治政	士修学治政
論著	論著	論著	論	論	論	論翻
十二文五書	一文一書	二〇文五書	二文	三文	二文	四文三訳
〇・八二	〇・八	〇・〇二	シナ	シナ	シナ	シナ
四三六	昭和三六	昭和三六	昭和三六	昭和三六	昭和三六	昭和三六
		40,000	12,000	12,000	2,000	20,000
京東	山岡	京東	玉埼	岡静	京東	京東
男	男	男	男	男	男	男
明治二三・三・六 宇尾野宗尊	明治二二・一〇・一六 森武夫	明治一八・一〇・一四 渡部鏡蔵	昭和三七・二七 奥原忠弘	昭和九・四・二〇 広井大三	昭和七・六・二〇 小林正敏	昭和三七・二四 河原宏
教授 経営経済学	教授 財政学 国際経済論	教授 経済政策 経済原論				
日本大学 昭和二三・四	奈良県立短期大学 昭和二八・九	高崎経済大学 昭和三二				
~520)	(499~504)	(483~486)	391~394	387~390	383~386	379~382

国史館史関係資料の翻刻並びに補註 第八卷

○	○	○	○	○	○	
64	63	62	61	60	59	
教授	教授	教授	教授	教授	教授	
専科 政治学 政治学	専科 政治学 政治学	専科 政治学 政治学	専科 政治学 政治学	専科 政治学 政治学	専科 政治学 政治学	専科 政治学 政治学
兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	
政治制度 教授 早稲田大学 政経学部	経済原論 教授 東京短期大学	金融論 教授 国士館大学 政経学部 経済学	労働法 教授 国士館大学 政経学部 経済学	商法 教授 国士館大学 政経学部 経済学	国際経済論 教授 国士館大学 政経学部 経済学	
政治制度 比較論	経済政策 総論	金融論	労働法	商法	国際経済 貿易論	
早稲田大学 政治経済学部 政治学 大正十五・三	東京帝国大学 経済学部 経済学	東京帝国大学 経済学部 商業学 大正八・七	東京帝国大学 法学部 民法科 大正六	明治大学法学部 大正十三・二 ドイツ国エルランゲ ン大学法学部 昭和十一・三	米国立シラキエール大 学大学院 大正一三・六 米国立ハーヴァード大 学院 大正一四・一〇	経営経済学市場論 昭和五・七
					M. A	
論著	論著	論著	論著	著	論著	
文書	その他	六文四書	八文四書	二書	八文六書	
○・九二		○・〇一	○・一二	○・五	○・三一	
昭和 三六 四	昭和 四	昭和 三六 四	昭和 三六 四	昭和 三六 四	昭和 三六 四	
5,000						
川香	京東	京東	京東	葉千	阪大	
男	男	男	男	男	男	
大西邦敏 明治三三・二一・一	難波田春夫 明治三九・三三・三	飯田一彦 明治二七・二九	星野辰雄 明治二五・四一・八	佐野重雄 明治三五・二・八	清水博 明治三四・二・一	
憲法 政治制度 教授 早稲田大学 昭和二六・四	経済原論 教授 東京短期大学 昭和二九	金融論 助教授 昭和三一・五	社会政策 教授 山梨学園短期大学 昭和三五	海商 講師 明治大学 昭和三〇・四	国際経済論 教授 東洋大学 昭和三〇・四	国士館短期大学 昭和二七・二一 教授 世界経済商 業英語
395~398	(585~588)	(539~544)	(505~510)	(529~532)	(498~498)	(515)

○	○	○	○	○	○	○
71	70	69	68	67	66	65
教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授
専攻科 政治学	専攻科 政治学	専攻科 政治学	専攻科 政治学	専攻科 政治学	専攻科 政治学	専攻科 政治学
兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任
政治学 教授	政治学 教授	政治学 教授	政治学 教授	政治学 教授	政治学 教授	政治学 教授
行政学	行政学	行政学	行政学	行政学	行政学	行政学
行政学	行政学	行政学	行政学	行政学	行政学	行政学
昭和一九・九三〇	昭和七・三	昭和七・三	昭和七・三	昭和七・三	昭和七・三	昭和七・三
士博学位	士博学位	士博学位	士博学位	士博学位	士博学位	士博学位
論著 三五文書	論著 一五文書	論著 教育篇 六文書	論著 四文二書	論著 六文二書	論著 外一 八文七書	論著 多数 四書
〇・六一	〇・八二	〇・二一	〇・二二	〇・三一	二三	〇・〇五
三八昭和	三七昭和	三七昭和	三六昭和	三七昭和	三七昭和	三七昭和
5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000
川奈 神	京 東	口 山	京 東	京 東	京 東	京 東
男	男	男	男	男	男	男
大正九・三・五 杉山逸男	明治三二・一二・四 百々巳之助	明治二〇・三・五 田村幸策	明治三二・一二・一〇 諸橋襄	明治二九・九・一四 長谷川了	明治三六・二・六 齊藤金作	明治二七・八・九 中村宗雄
行政学 教授	行政学 教授	行政学 教授	行政学 教授	行政学 教授	行政学 教授	行政学 教授
政治学	政治学	政治学	政治学	政治学	政治学	政治学
423~426	417~422	413~416	317~320	409~412	399~402	399~402

国史関係資料の翻刻並びに補註 第八卷

○	○	○	○	○	○
77	76	75	74	73	72
講師	講師	教授	講師	講師	講師
専攻科 政治学	専攻科 政治学	専攻科 政治学	専攻科 政治学	専攻科 政治学	専攻科 政治学
兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任
法学 水産行政	政治学 東京水産大	武蔵工業大 教授 時事問題	日本大学 教授 政治学	早稲田大学 教授 行政法	駒沢大学 教授 社会学
憲法	西洋政治史	国際機構論	政治哲学	憲法	社会学
昭和一・二・四 東京帝国大学法学部 所属大学院修了	早稲田大学 政治経済学部 昭和二・四・三	慶応義塾大学 経済学部 昭和二・三	京都帝国大学 文学部哲学科 昭和三・三	早稲田大学 政治経済学部 昭和一一・一二・二五	早稲田大学法学部 明治四〇・九 シカゴ大学大学院 一九一九・九
		士博学法	士博文		博士 フレイク ブライク ドク
論 一文	著 ナシ 三文	著 四書 五文	著 五書 一文	著 六書 十文	著 八書 その他
〇・一一 昭和三六	〇・一一 昭和三七	〇・九 昭和三六	〇・六一 昭和三六	〇・七一 昭和三六	〇・〇四 昭和三六
5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000
城宮	京東	京東	形山	手岩	京東
男	男	男	男	男	男
相原良一 大正元・九・一五	福田三郎 大正一一・二・一	山形誠一 明治三二・二・四	高山岩男 明治三八・四・一八	佐藤立夫 明治四五・三・二三	川辺喜三郎 明治一八・三・一五
法学 水産行政	政治学 東京水産大	武蔵工業大 教授 時事問題	神奈川大学 教授 哲学	早稲田大学 教授 行政法	駒沢大学 教授 社会学
451~454	447~450	443~446	439~442	435~438	427~434

○ 83	○ 82	○ 81	○ 80	○ 79	○ 78
講師	教授	教授	講師	助教	助教
専攻科 政治学 専任 政経学部 政治学 専任 教職関係	専攻科 政治学 専任 政経学部 政治学 専任 教職関係	専攻科 政治学 専任 政経学部 政治学 専任 教職関係	専攻科 政治学 専任 政経学部 政治学 専任 教職関係	専攻科 政治学 専任 政経学部 政治学 専任 教職関係	専攻科 政治学 専任 政経学部 政治学 専任 教職関係
兼任	兼任	兼任	専任	専任	専任
東京経済大 学 助教授 外国史	国士館短期 大学 教授 哲学	国士館大学 体育学部 教授 個人及 公衆衛生論			
西洋史	哲学 (教)	公衆衛生 学	地誌学	倫理学	日本史
東京帝国大学文学部 西洋史学科 昭和一〇・三三・三一	東京帝国大学 文学部 大学院哲学科修了 昭和二三・四二・四	東京帝国大学 医学部 大正二二・二一	立正大学文学部 地理学科(旧制) 昭和二七・三三・三二 同大学研究科 昭和三〇・三三・三一	東京帝国大学 文学部 倫理学科 大学院 昭和一一・二二	東京文理科大学史学 科研究科修了 昭和二七・三三・三一
		士博学医			
論著 一文二書	論著 四文二書	論著 その他六文二書	論著 八文一書	論著 五文四書	論著 三文二書
〇・八一	〇・三一	〇・〇四	〇・三	〇・二一	〇・八
昭和 三六 四	昭和 三六 四	昭和 三六 四	昭和 三六 四	昭和 三六 四	昭和 三六 四
5,000	5,000		20,000	30,000	30,000
京東	京東	京東	野長	京東	京東
男	男	男	男	男	男
神保規一 明治四五・二一〇	太田定康 明治三三・八三	小金井良一 明治二三・八六	有賀昭治 昭和二一・二八	阿部秀夫 明治四三・二一八	藤井秀夫 昭和二一・二一
東京経済大学 昭和二五・四・二 助教授 歴史	国士館大学 昭和三二・一〇・ 二四 教授 哲学	国士館大学 昭和三二・一〇・ 二四 教授 個人及 公衆衛生論		東京女学院短期大 学昭和三一・四 助教授 倫理学	名古屋女学院短期 大学 昭和三四・九・一五 助教授 歴史学
479~482	(233~238)	475~478	469~474	461~468	455~460

国士館史関係資料の翻刻並びに補註 第八卷

○	○	○	○	○	○
89	88	87	86	85	84
教授	教授	教授	教授	教授	講師
専科 政経学 部経済学 科	専科 政経学 部経済学 科	専科 政経学 部経済学 科	専科 政経学 部経済学 科	専科 政経学 部経済学 科	専科 政経学 部政治学 科 教職関係
専任	専任	専任	専任	専任	兼任
					日本大学 文学部 人文地理 助教授
労働法 社会政策 及演習	政治学 及演習	外国経済 論 貿易論 書講演	経済史 日本経済 史	経済原論 経済政策	地理学
東京帝国大学 法学部 同大学院 大正七	東京帝国大学 経済学部 政治学 大正一〇・四・三〇 ハーヴァード大学 ジョンズホプキンス 大学にて 大正一四一昭和二	米国シラキュース大 学大学院 大正一三・六 米国ハーヴァード大 学院 大正一四・一〇	東京高等商業学校 専攻部 明治四〇・七七	東京帝国大学 法科大学 明治四三・六	日本大学法文学部 文学科 (地理学専攻) 昭和一五・三・二五
	士博学済経	M. A	士博学済経	士博学法	
論著	論著	論著	論著	論著	論著
八文四書	一文一書	八文六書	七文六書	二文五書	八文三書
〇・一二	〇・八	〇・三一	〇・三四	〇・〇二	〇・四
昭和三六	昭和三六	昭和三六	昭和三六	昭和三六	昭和三六
40,000	40,000	40,000	40,000	40,000	
京東	山岡	阪大	潟新	京東	形山
男	男	男	男	男	男
星野辰雄 明治二五・四・一八	森武夫 明治二二・〇・二六	清水博 明治三四・二・一一	田崎仁義 明治一三・七・二五	渡辺鍊蔵 明治一八・二〇・一四	大井武 大正四・五・七
山梨学園短期大学 昭和三五 教授 社会政策	奈良県立大学 昭和二八・九 教授 財政学 国際経済論	国士館短期大学 昭和二七・二一 教授 世界経済商 業英語 昭和三四・四 教授 国際経済論 経済演習	明治大学経営学部 昭和二八・四・二 教授 経済史	高崎経済大学 昭和三二 教授 経済政策 経済原論	日本大学 昭和三七・一 助教授 人文地理
505~510	499~504	493~498	487~492	(483~486)	247~250

○	○	○	○	○	○	○
96	95	94	93	92	91	90
教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授
専科	専科	専科	専科	専科	専科	専科
門目	門目	門目	門目	門目	門目	門目
専任	専任	専任	専任	専任	専任	専任
交通論	銀行論	景気変動論	商法	簿記原理	市場論	商業学
満洲国立哈爾濱学院 大正十一年三	東京帝国大学 経済学部商業学科 大正八・七	慶応義塾大学 理財科 大正八・三	明治大学法学部 大正十三・二 ドイツ国エルランゲ ン大学法学部 昭和十一年・三	セントルイス大学 商理財学部卒業 大正一〇・六・五	日本大学商学部商学 大正一二・三 ベルリン大学経営経 済学市場論 昭和五・七	米国ペンシルヴェニ ア大学大学院経済学 明治四一・七
				B. C. S	士博学商	イフポルトクトド ーイフソロ
著	論著	論著	著	論著	論著	論著
三書	六文四書	三文六書	二書	六文七書	一文五書	その他六文四書
○・八 三六 昭 和	○・〇一 三六 昭 和	○・九 三六 昭 和	○・五 三六 昭 和	○・七一 三六 昭 和	○・八二 三六 昭 和	○・三四 三六 昭 和
40,000	40,000	40,000	40,000	40,000	40,000	40,000
賀佐	京東	都京	葉千	口山	京東	京東
男	男	男	男	男	男	男
八雲香俊 大正五・一・一五	飯田一彦 明治二七・二・九	山崎晴純 明治二七・六・七	佐野重雄 明治三五・二・八	油谷從爾 明治二〇・二・一五	宇尾野宗尊 明治二三・三・六	伊藤重治郎 明治一一・二・九
助教授 交通論	助教授 銀行論		海商論 保険法	簿記会计学	教授 商業学	教授 商業学
関東短期大学 昭和二九・五	鹿兒島商科短期大 昭和三一・五 〃三二・九		明治大学 昭和三〇・四	日本大学第三短期 大学 昭和二六・一	日本大学 昭和二三・四	東洋大学 昭和三一・四
550	539~544	533~538	529~532	521~528	515~520	511~514

○ 102	○ 101	○ 100	○ 99	○ 98	○ 97	
助 手	助 手	講 師	講 師	講 師	助 教 授	講 師
学部政経専 科部経学専 科経済学門 科	学部政経専 科部経学専 科経済学門 科	学部政経専 科部経学専 科経済学門 科	学部政経専 科部経学専 科経済学門 科	学部政経専 科部経学専 科経済学門 科	学部政経専 科部経学専 科経済学門 科	学部政経専 科部経学専 科経済学門 科
専任	専任	専任	専任	専任	専任	
(理 論) 経済学	(生 命) 保険論	珠算史	商業英語	商 法	史 西洋経済	
昭和二五・三 修士課程 青山学院大学院経済 学部経済学部	昭和三一・二 修士課程 専修大学大学院経済 学研究科	昭和二七・二五 専修大学 商経学部商業学科	大正十三・三 東京商科大学本科	昭和三三・三 早稲田大学大学院 法学研究科	昭和二四・三一 九州大学大学院経済 学研究科博士課程	
士修学済経	士修学済経			士修学法	士修学済経	
論	論 著	論 著	論 著	論 著	論 著	論
九文	八文一書	五文二書	三文四書	八文一書	八文ナ シ書	六文
シナ	シナ	〇・二	〇・五	〇・二	〇・二	
昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四	
12,000	12,000	20,000	20,000	20,000	20,000	
庫 兵	京 東	京 東	媛 愛	庫 兵	鳥 兒 鹿	
男	男	男	男	男	男	
昭和 三・九・二六 鱸沢晃三	昭和 五・六・一八 頓所忠治	大正 一三・三・二九 鈴木久男	国 松文雄 明治 三一・二・二九	福 井守 昭和 九・二・二〇	山 村延昭 昭和 六・四・二九	
		昭和 三五・八・一 講師 珠算史 大学	昭和 三〇・四 専任講師 英語 中国経済事 情		中村榮養短期大学 昭和 三五・四・一 助教 経済学 歴史学	
577~580	573~576	569~572	561~568	557~560	551~556	545~

○	○	○	○	○	○	○
109	108	107	106	105	104	103
教授	教授	講師	助教授	教授	教授	教授
専攻科 政治経済学	専攻科 政治経済学	専攻科 政治経済学	専攻科 政治経済学	専攻科 政治経済学	専攻科 政治経済学	専攻科 政治経済学
兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任
租税論 財政学 経済学 日本大学 経済学 教授	民法 法学 早稲田大学 教授	外交史 政治学 経済学 国士館大学 教授	国際法 政治学 経済学 国士館大学 助教授	民法 政治学 経済学 国士館大学 教授	外交史 政治学 経済学 国士館大学 教授	政治学 政治学 経済学 国士館大学 教授
財政学	民法	外交史	国際法	民法	政治学 外交史	政治学 論
昭和二二 日本大学 商学部 経済学 学科	昭和三六 早稲田大学 法学部 独法科 大正六・七	昭和三三 早稲田大学 大学院 旧制大学院 修了	昭和一九 東京帝国 大学法学部 政治学 学科	昭和一〇・四・三〇 東京帝国 大学 法科大学 政治学 科	昭和三六 東京帝国 大学法学部 政治学 科	昭和三六 早稲田大学 政治経済 学部 大学院 研究科 (政治学 政治史)
士博学	士博学				士博学	
その論著 他四文外 書一	著 多数四書	論 八文	論著 文書	論 四文	論著 八文六書	その論著 他五文他 五書
○・三三		○・四	○・八	○・六三	○・五一	○・七二
四三七	昭和三六	昭和三六	昭和三六	昭和三六	昭和三六	昭和三六
5,000						
葉千男	京東男	京東男	口山男	重三男	梨山男	井福男
明治一三・三・二〇 小林幾次郎	明治二七・八・九 中村宗雄	昭和四二・二・六 八畑篤四郎	大正四一・二・二三 櫻井光堂	明治二三・二・一六 清水谷隆寛	明治二二・一〇・二三 三枝茂智	明治二四・二・二 内田繁隆
教授 昭和二三 財政学	法学 昭和二四 民法	外交史 演習 早稲田大学 昭和三五・四・二	国際法 助教授 国際文化政策論 早稲田大学 昭和三四	民法 教授 香川大学 昭和二四・三	国際政治学 教授 大東文化大学 昭和三〇	政治学 原理 日本政治史 早稲田大学 昭和二七・四
581~584	(399~402)	(373~378)	(339~544)	(333~338)	(327~332)	(299~304)

国士館史関係資料の翻刻並びに補註 第八卷

○	○	○	○	○	○	○
116	115	114	113	112	111	110
講師	教授	教授	教授	教授	教授	教授
専攻科 経済学						
兼任						
経済学 教授 経済原論						
史	史	史	史	史	史	史
昭和三三						
東京帝国大学 経済学						
博士						
著	著	著	著	著	著	著
一五	四七	一六	二五	一〇	四三	三〇
七・三一	〇・〇二	〇・七	〇・九	〇・五二	〇・六四	〇・一二
昭和三三						
5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000
京東						
男	男	男	男	男	男	男
明治四一・二・二六	明治二四・二・一三	明治三七・六・一三	明治一八・二・二八	明治二七・七・一	昭和二三・七・一〇	明治二九・三・三一
経済学						
611~614	607~610	603~606	599~602	595~598	589~594	585~588

○ 123	○ 122	○ 121	○ 120	○ 119	○ 118	○ 117
助教 教授	助教 教授	講 師	講 師	講 師	講 師	講 師
専科 政経学 部経済 学	専科 政経学 部経済 学	専科 政経学 部経済 学	専科 政経学 部経済 学	専科 政経学 部経済 学	専科 政経学 部経済 学	専科 政経学 部経済 学
専任	専任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任
		日本大学短 大部商経科 教授 産業構造論	国士館短期 大学 専任講師 農業経済	国士館短期 大学 専任講師 保険論	早稲田大学 教授 法学 行政学 憲法	日本大学 商学部 経済学 事務局長
日本史	倫理学	工業経済 論	農業経済 論	保険論	憲法	実務計算
東京文理科大 史学科研究科修了 昭和二七・二八・二九	東京帝国大 文学部 倫理学科大学院 昭和一一・一二	東京大学 経済学部 商業学科 昭和六・三	立教大学商学部 経済学科 昭和八・三	早稲田大学大学院商 学研究科博士課程修 了 昭和三三・三三	早稲田大学政治経済 学部政治学科 昭和一一・三二・二五	日本大学 専門部商科 大正九・三
				士博学商		士博学商
論著	論著	論著	論著	論	論著	論著
三文二書	五文四書	一文四書	三文三書	十三文	數十文六書	九文四書
〇・八	〇・二一	〇・六	〇・八	三・二	〇・七	〇・八一
昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三七 四	昭和三七 四
		5,000	5,000	5,000		5,000
京東 男	京東 男	木柵 男	玉埼 男	京東 男	手岩 男	京東 男
藤井秀夫 昭和二・一・二一	阿部秀夫 明治四三・二・一八	土屋宗太郎 明治四一・一〇・二三	諸井忠一 明治四二・七・八	森田健三 大正一四・二・二四	佐藤立夫 昭和四五・三・二三	山崎與右工門 明治三〇・八・一四
名古屋女学院 短期大学 昭和三一・四	東京女学院 短期大学 昭和三一・四	日本大学 昭和三二・四	高崎市立短期大学 昭和二八・四・六	国士館短期大学 昭和三五・七・二八	早稲田大学 昭和二四	日本大学 昭和二四・二
倫理学 助教 教授	倫理学 助教 教授	産業構造論 教授	農業経済 講師	生命保険論 講師	行政法 憲法 教授	実務計算 教授
(455~460)	(461~468)	633~636	629~632	629~632	(435~438)	615~620

国士館史関係資料の翻刻並びに補註 第八卷

○	○	○	○	○	○
129	128	127	126	125	124
講師	講師	講師	講師	教授	教授
専攻科 政経学 部経済学 科	専攻科 政経学 部経済学 科	専攻科 政経学 部経済学 科	専攻科 政経学 部経済学 科	専攻科 政経学 部経済学 科	専攻科 政経学 部経済学 科
兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任
日本大学 文理学部 助教授 人文地理	東京経済大 学 外国史 助教授	日本大学 教授 統計学	国士館大学 政経学部 教授 青年心理学	国士館大学 体育学部 教授 個人及 公衆衛生論	国士館大学 (一般教育 科) 教授 哲学
地理学	西洋史	統計学	職業指導	公衆衛生学	哲学
昭和一五・三・二五 (地理学専攻)	昭和一〇・三・三二	昭和三三	昭和三三・三・三二 (心理学専攻)	昭和二二・二一 大正二二・二一	昭和三三・三・三二 大正二二・三・三二
			士修学文	士博学医	
論著	論著	論著	論著	論著	論著
三文八書	二書一文	六書五文	七文二書	二書六文 その他	四書八文
昭和三六 四〇・四	昭和三六 四〇・八一	昭和三六 四〇・四二	昭和三六 四〇・七	昭和三六 四〇・〇四	昭和三六 四〇・五三
		5,000			
山形	京東	京東	新潟	京東	葉千
男	男	男	男	男	男
大井武 大正四・五・七	神保規一 明治四五・二・一〇	佐藤輝実 明治四一・一・一〇	高鳥正士 大正一四・八・二三	小金井良一 明治二三・八・六	橘高倫一 明治三〇・二・一
日本大学 助教授 人文地理	東京経済大 学 歴史 助教授	麻布獣医 昭和二四・九 講師 数学 統計	国士館大学 昭和三五・四・一 助教授 青年心理学	国士館大学 昭和三二・一・〇・ 二四 教授 栄養学 個人及公衆衛生論	宇都宮大学 昭和二八・四・二六 教授 哲学
(247~250)	(479~482)	637~640	(653~658)	(475~478)	(173~178)

○	○	○	○	○	○
135	134	133	132	131	130
講師	教授	助教	教授	教授	講師
専科(課程)	専科(課程)	専科(課程)	専科(課程)	専科(課程)	専科(課程)
兼任	兼任	専任	専任	専任	専任
東洋大学 助教授 各教科 教育法	国士館大学 教授 倫理学				
商業科 教育法	道徳教育 の研究	教育心理 学 青年心理 学	社会科 教育行政 学	教育原理 教育史 教育実習	地誌学
中央大学 経済学部 昭和一八・九三	日本大学 文学部大学院 (倫理科) 昭和二八・三三	日本大学大学院 文学研究科 修士課程 (心理学専攻) 昭和二八・九三・〇〇	慶応義塾大学 法学部 政治学科 昭和九三・三二	早稲田大学学部 文学科哲学専攻 明治四一・七	立正大学文学部 地理学科(旧制) 昭和二七・三三・三三 同大学研究科 昭和三〇・三三・三三
	士博学文	士修学文			
論著	論著	論著	論著	論著	論著
文書	文書	文書	文書	文書	文書
〇・二一	三・二一	六・七	〇・二一	五・五三	〇・三
昭和三六 四	昭和三六 四	昭和三五 四	昭和三六 四	昭和三三 四	昭和三六 四
5,000		30,000	40,000	40,000	
京東	島広	湯新	野長	京東	野長
男	男	男	男	男	男
小川 福次郎 大正元・九・九	佐藤 嘉祐 明治三三・一〇・二五	高橋 正士 大正一四・八・二三	横田 重左衛門 明治四一・八・二六	小沢 恒一 昭和一六・六・六	有賀 昭治 昭和二一・二・八
商業科 教育法	道徳教育の研究 申請	国士館大学 助教授 教育心理学 青年心理学	愛知学院大学 昭和三一・四 教育行政 社会科教育法	国士館大学 昭和三二・一〇・二四 教育原理 教育史 教育実習	
659~664	(169~172)	653~658	647~652	641~646	(469~474)

143	142	141	140	139	138	137	136
教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	講師
専攻科 体育学 部	専攻科 体育学 部	専攻科 体育学 部	専攻科 体育学 部	専攻科 体育学 部	専攻科 体育学 部	専攻科 体育学 部	専攻科 体育学 部
専任	専任	専任	専任	専任	専任	専任	兼任
							国士館 短期大学 講師
（陸上競 技） 体育方法	（体育方法 格技）	体育原理	（体育方法 格技）	（体育方法 格技）	（体育方法 格技）	（体育方法 格技）	図書館学
昭和一〇・三二・一五 東京高等師範学校体 育科甲組	大正一五・三三 東京高等師範学校体 育科	大正五・三三・五 東京高等師範学校体 操専修科	大正五・三三・五 東京高等師範学校体 操専修科	大日本武徳会 武術教員養成所 明治四一・二二 剣道範士	慶応義塾 理財科中退 講道館十段	大日本武徳会 武術教員養成所 明治四一・四 剣道範士	東京帝国大学 文学部 国文学科 昭和三三・三三・一
論著	ナシ	論著	著	ナシ	著	ナシ	その論著
五文二書		四文四書	四書		三書		他五文四書
〇・九	〇・一一	〇・二三	七・〇三	〇・五二	〇・〇四	〇・一三	〇・〇三
昭和三三	昭和三三	昭和三三	昭和三三	昭和三三	昭和三三	昭和三三	昭和三三
38,000	40,000	10,000	30,000	30,000	30,000	30,000	5,000
湯新	根島	岡福	形山	馬群	手岩	京東	京東
男	男	男	男	男	男	男	男
金子藤吉 明治四四・四二・四	大野操一郎 明治三四・二二・五	岡部平太 明治二四・九・一〇	会田彦一 明治二六・四・二一	持田盛二 明治一八・二・二六	三船久藏 明治一六・四・二二	齐村五郎 明治二〇・五・四	土井重義 明治三七・九・三
国士館大学 昭和三三・一〇・ 二四 教授（陸上競技）	国士館大学 昭和三三・一〇・ 二四 体育方法（格技）	国士館大学 昭和三二・二五 教授 体育原理	国士館大学 昭和三二・一〇・ 二四 教授 体育方法 （格技）	国士館大学 昭和三二・二五 教授 体育方法 （格技）	国士館大学 昭和三二・二五 教授 体育方法 （格技）	国士館大学 昭和三二・一〇・ 二四 教授 体育方法 （格技）	共立女子大学 昭和三二・二二 講師 図書館学
							665~670

151	150	149	148	147	146	145	144
講師	助教授	助教授	助教授	教授	教授	教授	教授
専科	専科	専科	専科	専科	専科	専科	専科
目門	目門	目門	目門	目門	目門	目門	目門
専任	専任	専任	専任	兼任	専任	専任	専任
				国士館大学 政治学部 保健体育 専任教授			
(体育方法 球技)	(体育方法 球技)	(体育方法 球技)	(体育方法 体操)	(体育方法 体操)	(シクワイエ ション) 体育方法 校文科	解剖及生 理学 同実験	個人及公 衆衛生論 栄養学
昭和三六・二五 東京高等師範学校 体育科甲組	昭和三〇・二二 東京高等師範学校 体育第一部 昭和一〇・二〇 東京教育大学体育学 部	昭和三〇・二三 東京教育大学 体育学部 昭和三〇・二三	大正四・三・二八 茨城師範学校 国立体育研究所 生理衛生学教室 大正十二・八・一	大正六・三・二六 東京高等師範学校体 操専修科	大正九・三 東京女子高等師範学 校文科	昭和一六・二二 慈恵会医科大学部	大正二・二二 東京帝国大学医学部
						士博医学医	士博医学医
著	論	論著	論著	著	論著	論著	論著
二書	二文	二文一書	一文〇書	四書	文書	ナシ書 五文	多数文二書
〇・八	〇・一一	〇・一一	三・七一	〇・一一	〇・〇三	〇・五	〇・七一
昭和三三 四三	昭和三三 四三	昭和三三 四三	昭和三三 四三	昭和三三 四三	昭和三三 四三	昭和三三 四三	昭和三三 四三
34,000	22,000	16,000	40,500		15,000	15,000	12,000
岡 福	京 東	京 東	京 東	京 東	道海 北	京 東	京 東
男	男	男	男	男	女	男	男
園部 暢 明治三九・二・二三	坂井 政郎 大正一〇・二〇・四	石田 啓 大正一一・七・二二	川島 恒吉 明治二八・二・一七	森 秀 明治二五・三・二八	三浦 ヒロ 明治三一・二〇・二七	佐藤 英夫 大正六・一・一	小金井 良一 明治二三・八・六
国士館大学 昭和二三・二・二五 講師 体育方法	国士館大学 昭和二三・一〇・ 二四 助教授 体育測定 学 体育方法(球技)	国士館大学 昭和二三・一〇・ 二四 助教授 体育方法(球技)	国士館大学 昭和二三・三・三一 助教授 体操	国士館大学 昭和二三・二・二五 教授(体育方法 体操)	申請準備中	国士館大学 昭和二三・二・二五 解剖及生理学 教授	国士館大学 昭和二三・二・〇・ 二四 教授 個人及公衆 衛生論 栄養学

158	157	156	155	154	153	152	
助手	助手	講師	講師	講師	講師	講師	
専任	専任	専任	専任	専任	専任	専任	
(学体部)	(学体部)	(学体部)	(学体部)	(学体部)	(学体部)	(学体部)	(学体部)
専任	専任	専任	専任	専任	専任	専任	
(水泳)	(水泳)	(水泳)	(水泳)	(水泳)	(水泳)	(水泳)	
昭和二三・三	昭和二三・三	昭和二三・三	昭和三一・三	昭和三三・三	昭和二三	昭和二五・三・二五	
論	ナシ	論著	ナシ	論著	ナシ	ナシ	論
一文	ナシ	一文三書	ナシ	三文二書	ナシ	ナシ	七文
九・〇	四・〇	〇・三	〇・四	六・三	〇・六	〇・八	
一三四和	四三五和	四三三和	四三三和	四三三和	四三三和	四三三和	
20,000	18,000	12,000	20,500	16,150	26,000	15,500	
岡 静	根 島	田 秋	島 福	島 福	梨 山	道海 北	
男	男	男	男	男	男	男	
大正一五・二〇・二七	昭和九・一・二	昭和九・八・二〇	大正一三・六・二五	昭和五・一・一三	昭和二・一・三	大正一四・七・二	
		国士館大学	国士館大学	国士館大学	国士館大学	国士館大学	(球技)
		講師	講師	講師	講師	講師	
		体育方法(格技)	体育方法(体操)	体育方法(陸上競技)	体育方法(陸上競技)	体育方法(リクリエーション)	

167	166	165	164	163	162	161	160	159
講師	講師	講師	教授	教授	助手	助手	助手	助手
専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻
専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻
専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻	専攻
兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	専任	専任	専任	専任
財団法人 講道館 研修員	警視庁 剣道師範	警視庁 剣道師範		東京大学 名誉教授				
(体育方法 格技)	(体育方法 格技)	(体育方法 格技)	心理学	解剖及生理学	(体育方法 格技)	(体育方法 格技)	(体育方法 格技)	(体育方法 格技)
昭和二・三 東京高等師範学校 体育科	昭和一・二・五 武徳会 剣道教士	昭和大正七・七・一三 旧大日本武徳会本部 剣道範士	昭和大正一・一・三 心理学部 文学部	昭和大正一・一・三 医学部 医学科	昭和三五・三・一五 国士館大学 体育学部	昭和三五・三・一五 国士館大学 体育学部	昭和三五・三・一五 国士館大学 体育学部	昭和三五・三・一五 国士館大学 体育学部
				医学博士				
ナシ	ナシ	ナシ	著 二書	著 外 二書 多数	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
〇・四 三四	〇・〇一 四三三	〇・六一 四三三	〇・八三 四三三	〇・九三 四三三	四・〇 四五	四・〇 四五	四・〇 四五	四・〇 四五
昭和三 四	昭和三 四	昭和三 四	昭和三 四	昭和三 四	昭和三 五	昭和三 五	昭和三 五	昭和三 五
3,000	5,000	5,000			11,300	15,300	15,300	15,000
葉千	葉千	京東	山口	京東	森青	本熊	鳥兒鹿	野長
男	男	男	男	男	男	男	男	男
醍醐敏 大正一五・二・二	堀口清 明治三六・七・一二	小野十生 明治二九・五・二〇	松井三雄 明治三〇・六・二一	福田邦三 明治二九・三・二〇	阿部耕策 昭和一二・六・二八	東信義 昭和一二・一・三〇	大樫哲夫 昭和一二・二・二二	小林惣重郎 昭和一一・五・一三
昭和三〇・一〇・一五	昭和三二・二・二五	昭和三二・二・二五	昭和三二・二・二五	昭和三二・二・二五				
国士館短期大学	国士館大学	国士館大学	国士館大学	国士館大学				
体育方法(格技)	体育方法(格技)	体育方法(格技)	心理学教授	解剖及生理学教授				

○

175	174	173	172	171	170	169	168	
助手	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	
専攻 学体 部育	専攻 学体 部育	専攻 学体 部育	専攻 学体 部育	専攻 学体 部育	専攻 学体 部育	専攻 学体 部育	専攻 学体 部育	専攻 学体 部育
兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	兼任	
東京教育大 学体育学部 助手	警視庁 剣道師範	（文部技官） 伝染病研究 所 東京大学	東京慈恵会 医科大学 助手	東京教育大 学体育学部 教授 運動医学	東京教育大 学解剖学 助教授	東京教育大 学運動生理 学助教授	慈恵医科大 学講師 解剖学	
体育方法 （陸上競 技）	体育方法 （格技）	細菌及 免疫学	救急処置 看護法	健康教育 学校保健	解剖学 実験	運動生理 学校保健	发育論	
東京教育大 学体育学部 昭和二八・三	国士館短期大学 経済科 昭和三〇・三・五 剣道教師	東京慈恵会医科大 昭和一二・三	京都帝国大 学医学部	日本医科大学 昭和一六・二二・二六	東京歯科医学専門学 校 昭和一九・九二〇	東京慈恵会 医科大学	東京慈恵会医科大 昭和一六・二二・二〇	
		士博学医	士博学医	士博学医		士博学医	士博学医	
ナシ	ナシ	論文	論文	著 論文 ナシ書 九文	論文	論文	論文	
	〇・五	〇・〇二		〇・八一	〇・五一	〇・六	〇・九	
昭和三四 5,000	昭和三四 5,000	昭和三四 7,000	昭和三四 5,000	昭和三四 10,000	昭和三四 10,000	昭和三四 20,000	昭和三四 3,000	
岡 福	島 福	玉 埼		島 福	知 愛	京 東	阪 大	
男	男	男	男	男	男	男	男	
古藤 高良 昭和六・三・一六	阿部 三郎 大正八・十・十二	小峰 積 大正五・二・四	江部 梯藏 大正一二・九	豊田 章 大正三・三・三一	橋本 京一 大正一二・一〇・二〇	小川 新吉 大正八・九・四	皿井 長四郎 大正七・二・一五	
	申請（予定） 中	申請（予定） 中	申請（予定） 中	国士館大学 昭和三二・一〇・ 二四 講師 学校保健 健康教育論	国士館大学 昭和三二・二・二五 解剖学全実験 助教授	国士館大学 昭和二九・七 運動生理学 助教授	国士館大学 昭和三二・一〇・ 二四 講師 发育論	講師 体育方法（格技）

〔四、教員個人調 略〕

〔十、設置者に関する調〕十四、現在設置している学校の現況 略〕

(内表紙)

〔十五、将来の計画〕

第十五 将来の計画

一、学部及学科組織に関すること

(1) 将来施設の充実と共に政経学部政治学科及経済学科の第二部を増設し教育の充実徹底を期している。

(2) 次回に於て文学部を増設し、現在の短期大学国文科を昇格して国語国文学科とし、此れに歴史地理学科を併置し、教育の徹底を図る予定である。

(3) 将来大学院を設置し、思想堅固な青年研究者を養成し、信念ある大学教授を世に送り、学界に貢献せんことを期している。

二、学科目教員等に期すること

体育学部政経学部共に現在の学科目は必要に応じ拡充し、これに要する教員も準備する。

三、校地校舎等に関する事

校地については将来隣接地を買収し建物敷地、運動場の拡張を図る予定である。

校舎及施設については現在建築中の政経学部本館に隣接して図書館、講堂、学生会館の建設を期している。

四、図書・機械器具・標本等に関する事

此れ等については毎年予算を計上し常に補充と整備に意を用いると共に、更に教育の完遂を期する為、教材、実験施設の充実に努力する。

\*1 国士館大学政経学部 昭和三五（一九六〇）年、池田勇人内閣による「国民所得倍增計画」発表以降、日本は高度経済成長期に突入する。同時に第一次ベビーブームによって大学への志願者が急増し、各界から高等教育を受けた人材の増募が求められた。国士館もこの社会的要請に応える形で、学部増設を果たしていく。

政経学部は、昭和三五年九月三〇日に認可申請を行い、翌昭和三六（一九六一）年三月一〇日に認可を受けて、政治学科・経済学科（定員各一〇〇名）を設置した。なお、経済学科は、短期大学経済科からの編入により、初年度に一、二年次を開講している。教授陣には、田崎仁義、宇尾野宗

尊などが招聘された。また、中学校教諭一級（社会）および高等学校教諭二級（社会、商業）の教員養成課程認定も受けた。

政経学部設置目的の一つは、昭和三五年の日米安全保障条約改定による「安保闘争」の影響により左傾化する世論と欧化学説を批判し、日本伝統の政治的倫理観を持つ人材育成を目指すことにあった。

国士館の思い出

## 人間形成の礎となった四年間

体育学部一八期生 板倉 紀之



### はじめに

昭和四八年四月、国士館大学体育学部に入學し、多くの経験を積み、視野を広め、昭和五二年三月無事卒業した。運良く、静岡県教職員採用試験に合格していたので、母校である旧相良町立相良中学校（現牧之原市立相良中学校）に勤務することができた。

静岡県中南部の風光明媚な駿河湾の西端の地域周辺の中学校で勤務させていただき、以来三八年の歳月が流れ、平成二七年三月、無事定年退職することができた。大学卒業後は、多忙さにかまけて母校を訪問する機会はありませんでしたが、「国士館大学新聞」が定期的に届くようになり、国士館大学の最新情報を得ることができ、

併せて往時を懐かしく思い出すことができた。

平成二九年の一〇〇周年事業の一環として在学中の資料を収集しているとのことで、平成二八年五月には大学の時代の四年間の講義ノートや書籍を持参し、国士館史資料室を訪問した。その後担当者より『国士館史研究年報 楓原』の寄稿依頼を受け、ペンを取った次第である。

### 一 体育教師を夢見て

「先生！ 俺、体育の教員になりたいです。」

これは、私が高校二年生の時に、進路面談で担任の先生に答えた当時の気持ちである。

中学生の頃漠然と抱いた夢も体育教師であり、高校生生活を過ごしていく中で、その夢が更に強くなっていつ

た。

中学入学と同時にバスケットボールに出会い、小さな大会で優勝の経験をし、さらに、高校に進学してバスケットボールの専門家の体育教師との出会いもあり、バスケットボールに明け暮れた高校生活であった。

部活動の恩師も体育大学出身で、国士館大学を薦めてくれ、国語科の恩師は国士館大学出身であり、私の進路決定に親身になって応援してくださった。自信は無かったが、運良く合格し、夢の実現に向けてのスタート台に立つことができた。

私が生徒の頃、夏になると毎年のように「国士館大学剣道部」が地元静岡の旧相良町に合宿に訪れ、それはそれは凜凜しい出で立ちであった。当時は剣道には興味はなかったが、学生達が集い一種の風物詩でもあった。

私が「国士館大学」に入学したのはこのこととは関係ないが、振り返ってみれば何かしらの「縁」があったのかと不思議にも思える。

## 二 郷土出身の先生

私は静岡県の最南端の御前崎市の隣の牧之原市（旧相良町）出身である。海岸線に立てば雄大な日本一の富士

山が聳え、駿河湾から見える伊豆の山々、そして、見渡す限り洋々とした太平洋は、郷土の誇りであり日本を象徴する場所であると言っても過言ではない。

さて、国士館大学には同郷であり、国士館大学剣道部監督だった矢野博志先生がいらっしやう。また、奥様も同じ町内出身であり、私にとつては何かとご縁もあり、心の支えになり、大変心強かった。ご自宅にも何度となくお邪魔し、公私共にお世話になった。

矢野先生は、私が在学中に「剣道世界選手権」に出場し、見事優勝したことも記憶に残っている。体育学部では一年次と三年次に剣道の授業があり、その際にも世界一の「剣道」を披露してもらい勇気をいただいた。

大学には北海道から沖縄まで、日本全国から学生が集まり、その中での同郷つながりは本当に「縁」を感じたものである。

## 三 大学（寮）生活のはじまり

昭和四八年四月一二日。

父母と共に車に布団と一箱の衣類を積んで上京し、世田谷松陰寮に入寮した。私はバスケットボール部に入学したため、二階の二二五号室に入室した。なんと、キャ

プテン部屋で、他は三年生、二年生各一名ずつで、他の部屋とは違っていた。手続きが終わり、父母と別れた後、急に不安でいっぱいになった。

四月一六日、他の学部も含めての「国士館大学入学式」が剣道場で挙行された。制服（当時は大学生の制服も減少傾向であったが、伝統の黒の蛇腹が入った学生服）に身を包み、緊張感でいっぱいだった。

参列した父は「教育勅語」を聞き、たいへん感銘を受けていた（正直私には何の意味なのかさっぱりわからなかったが……）。

あとで、父から戦前から戦後しばらくは、日本国民の「教育」の大柱であったと聞かされた。当時は大人も子供たちも暗唱して、集会の度に唱和していたとのことであつた。

いよいよ松陰寮での生活がスタートした。

二年生から「寮生活の規律」を聞き、上級生との関わり方や挨拶の仕方・食事・掃除・洗濯等、事細かに指導をされた。

まずは、早朝五時起床で全寮生揃っての「点呼」である。松陰寮生全員が制服に身を包み、玄関前の砂利道に各部ごとに整列し、人員点呼をしてから寮歌を歌い、舎監の先生の指示を聞いて一日がスタートした。



松陰寮 225 号室にて（左が筆者、キャプテン河野英美氏と）

点呼が終わり、部屋に戻ってからは掃除に洗濯、雑用が終わると食券をもって地下の食堂に行き、やつと食事を摂ることができた。

上級生は第一限の講義もなく、ゆつたりとした生活ができるが、一、二年生は休む間もなく校舎に向かった。体育学部の校舎に行き一、二年生だけであるため、上級生に気兼ねしなくても良く、唯一安らぎの時間であった。他のクラブの同級生と様々な話をする、どの部も相通ずる厳しさがあることもわかり、自分だけが辛い思いをしているのではないということ、お互いに我慢していること等、わずかな希望が持てた。

親の期待にも応えなくてはならず、また、自分の甘さや弱さにも負けたくない思いで、どんなに辛くとも寮生活を乗り越えようと我慢した。

講義く寮の雑用く先輩の用事くクラブ活動く食事等、やつと一日が終わり夜になれば部屋ごと銭湯に通った(ちなみに一年時は四八円、四年時には二二五円が銭湯代だった)。親の背中も流したことは無かったが、三、四年生の背中を流したことも良き経験であった。寮に戻る際に、先輩達がコカ・コーラを買い、部屋でくつろぎながら飲んだ。しかし、他の部屋の上級生がキャブテン部屋に集まり、一人での対応は気苦労が多く、本当にた



▲裏側 国士館 寮歌



▲表側 教育理念と大講堂

世田谷(松陰)寮卒業記念品

昭和49年までは、4年間世田谷寮に入寮していた4年生が卒業する時に、寮生一同から記念品が贈られた。部は関係なく全員がもらえたが、昭和50年からはなぜか中止となった。真鍮で作られていて、とても高価なものである。この記念品は、筆者が2年上の先輩から託されたものである。

(大きさ:縦95mm×横190mm×奥行20mm)

いへんであった。特に、オイルショックの余波で寮生にとってトイレットペーパーを確保することが大変であった。夜八時から朝同様に「点呼」があった。

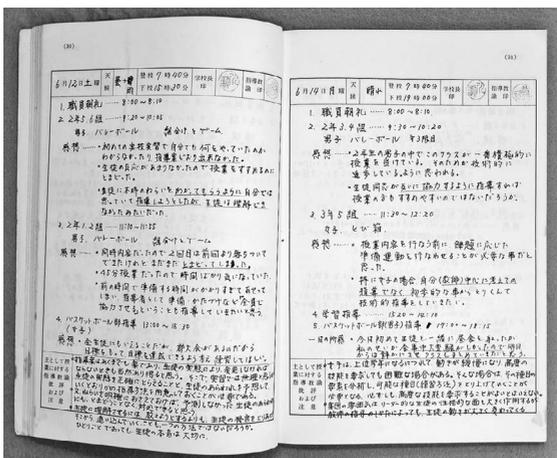
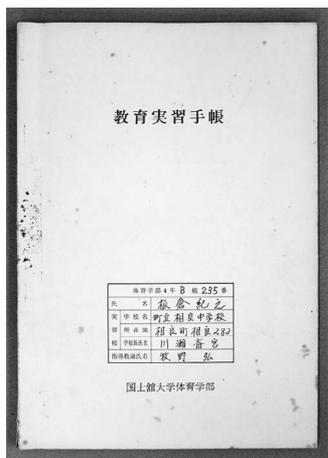
一年生の至らなさや失敗がある度に、上級生から直接指導の「反省会」は、とにかく「忍耐」の一言であった。しかし、先輩達も通ってきた道と言われれば、自分

たちも我慢しなければならぬものであると覚悟を決めて寮生活を過ごすしかなかった。たまらなく辛い時は、夜中に寮の屋上に出て、郷里の方向に輝く星を見つめ、涙を流しながら父母を思い出しては自分を奮起させていた一年間であった（我ながらよく耐え抜いたと思う）。

#### 四、大学での授業（講義・実習）

多少の運動は何でも中以上にこなせる自信もあったので体育教師の道を志した。だが、一、三年時に履修した剣道と柔道は本格的であり、基礎から学ぶと共に剣道部員や柔道部員の猛者との稽古は大変であった。

一年生は一般教養科目が中心で、三、四年生になると専門教育ばかりであり、講義を受け、万年筆で板書を書き写すだけでも大変であった。とにかく講義だけは休まず、また、居眠りもせず出席していた。



昭和 51 年 筆者の教育実習の記録

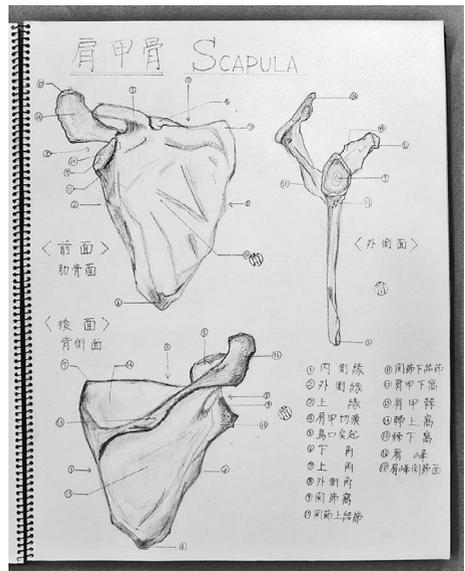
「学生監」という、いわば学級担任のような立場の先生方が講義の初めに出席カードを集め、学生達の出席状況を把握していた。

各学年の実習も貴重な体験であった。一年時には千葉県富津での水泳実習、二年時には河口湖でのスケート実習、三年時には菅平でのスキー実習を行った。スキーは、雪の降らない静岡の人間にとっては、未経験であったが楽しく学ぶ事ができた。昭和五〇年ごろは、まだ車でスキーに行くことなど一般的ではなかった時代である。

最上級生となった四年時には、母校での四週間の「教育実習」が始まった。中学卒業以来、七年ぶりの母校は懐かしかったが、見習い教師としての立場はまったく違い、毎日が緊張の連続であった。

教師に憧れ、教師になることを夢見ていた時とは違い、一日のすべての活動は「学校・生徒を第一に！」と考へなければならなかった。諸先生方から小さな事でも指導を受け、大人としての責任感とは何かを思い知らされた実習であった。

一時間の授業のために徹夜して仕上げた「指導案」も日を追うごとに慣れてきたと思ったが、毎日手直しをされ、夜中に修正し、翌朝印刷して、指導教官に提出し



解剖生理学でのスケッチ (筆者画)

た。一時間の授業が終わると同時に、次の指導案作りの繰り返しであったが、四週間の教育実習も何とか無事終えることができた。最終日には、指導教官の先生のクラスで送別会を開いてもらい感激し、教職への志を一層強く抱いて教育実習を終えた。

全国各地に分かれて教育実習を行ってきた同級生と共に、大講堂にて学部長の先生方に体育学部三六七名を代表して報告したことも良き経験となった。

後期には東京医科歯科大学での解剖実験の実習も忘れ



1 年次 千葉富津での水泳実習（前列中央が筆者）



2 年次 山梨県河口湖でのスケート実習（前列中央が筆者）

られない貴重な体験であった。人間の身体構造や臓器の種類と各々の役割を学び、健康な身体・生命の尊厳・生きることの意味など、様々なことを考えさせられた実習であった。

## 五、バスケットボール部員として

私の場合、大学入学イコール寮生活は、しごく当然のことと思いき、松陰寮に入寮し学生生活が始まった。同年の部員も半数の一六名が入寮したが、一年間持たずに出て行った者や二年時に出て行った者もいて、四年間入寮していたのは、私を含め、たったの二名となっていた。

百人の部員でレギュラーの一軍(A)、次の二軍(B)、そして、残りの三軍(C)という構成であった。一年生は毎日グラウンドや駒沢公園へのランニングが基本であった。Aチームの練習のために体育館の雑巾掛けやタオル・飲み物の準備、そして、練習後の片付けと雑巾掛けであった。

二年になり後輩ができると基本的なことの指導や先輩からのきつい指摘も自分たちの責任となり、幾度となく叱りつけられた。秋からは二軍に昇格し、練習試合でも

活躍できるようになった。

三年になり一軍に昇格したが、なかなか思うようには活躍できなかった。ただ降格しないように必死になって毎日の練習に励んだ。当時のバスケットボールの聖地であり、憧れであった代々木第二体育館での試合は今でも心に強く残っている。

いよいよ四年生。前年度にチームが関東二部Bに降格したため、夏の二次合宿もコーチを筆頭に、「二部A昇格」を合い言葉に頑張った。同級生や後輩の頑張りで、リーグ優勝し、二部Aに昇格すると共に、関東一〇位でインカレ出場も果たすことができた。

一〇月から後期に入り、卒業まで半年となった。最後に残っている「卒業論文」が大きな山(課題)となっていた。石田啓教授のゼミだったので、四人の仲間で「バスケットボールの攻防」についての論文に決めた。インカレ(全日本大学選手権)の出場を目指していたものの、①国史館大学の試合はどのような攻撃であるか? ②どのようなシュートが多いのか? ③誰が、どのようなポジションでシュートして成功したか、失敗したか? 等、記録を取り分析して、バスケットボールの攻防を追求しようと考えた。

しかし、計画を立てていく内に、様々な記録を集積し



4年次 国士館大学バスケットボール2・3・4年生  
(前左右から2人目が筆者、3人目は前山定コーチ)

なければならず、ゲームをしている自分たちでは無理であるため、松陰寮の後輩たちに関東大学バスケットボールリーグ戦の全記録をノートに記入してもらった。試合が終われば、すぐに記録の確認と整理をしなければならなかった。毎日の練習と大会での勝負と記録の分析とまとめ、九月～十月は本当に大変であった(のんびりと遊ぶ事など考える余裕などなかった)。

リーグ戦も好成績を上げ、念願の全日本大学選手権(大阪府立体育館にて)に出場することができた。あいにく関東一部優勝の「明治大学」との初戦であった。全日本メンバーやスター軍団の明治大学とは、体格差、能力差、経験の差等、いずれを取っても歴然の差であった。しかし、ふたを開けてみれば国士館大学が善戦し、一〇点差で敗れはしたが明治大学に一泡吹かせた。気を引き締めた明治大学が、それ以後実力を発揮し優勝して幕は閉じた。と同時に、四年生のクラブ活動も終了した。

## 六、国士館大学を卒業して

昭和五二年三月一八日には、新宿京王プラザにて体育学部の謝恩式を行い、教授陣の先生方や学生監の先生方

に個々の感謝の思いを伝えた（ちなみに私は仲間二人と和田任功学生監のお宅に泊めていただいた）。

三月二〇日。一〇号館剣道場にて卒業式が挙行された。郷里から父母が上京し式に参列してくれた。式も盛大に行われ、通い慣れた大学に感謝の意を込めて大講堂と正門に一礼して郷里へ向かった。

早いもので四年間の大学生活もアツという間に過ぎ去った。

「四年間、俺は何を学んだのか？」

自問自答する中で、とにかく目上の人に対しての「礼儀」は一応出来るようになったと思う。また、集団生活での自己の在り方や協力し合い、お互いを尊重し敬いながらの生活が大事であると卒業を前にして思う。いよいよ明日は卒業式だ。

自分の青春時代の楽しく辛い経験は、これからの人生に役に立つと思う。いつの日か懐かしみ良き思い出となるだろう。

「誠意」「勤労」「見識」「気魄」

この国士館大学の教育理念を肝に銘じ、これから

の人生の指針としていきたい。

昭和五二年から静岡県公立中学校の教員に採用され、保健体育科と国語科の教員を務めた。平成二七年三月、無事三八年間の勤務を終えた。自己の指導の根底では「誠意」「勤労」「見識」「気魄」が基盤となっていたと思



卒業式後に母と

てくれた父と母に感謝し、何かお礼をしてあげたい。

三月二〇日 0時23分記

（在学中のノートのメモより引用）

おわりに

う。生徒への指導はもちろん、自信をもって後輩教員にも伝えてきた。

現在は、学習支援員として中学生の支援をしているが、これからも自己が経験してきた指導理念を若い教師にも伝えていきたい。

還暦を過ぎた今、自らを鼓舞するためにも大切にしていきたい。

# 国士館創立 100 周年記念事業の寄付金募集

## ■募金の趣意

2017年、本学園は創立100周年を迎えます。国士館創立100周年記念事業により平成18年4月から教育の内容と組織そして施設・設備の両面にわたる総合的な整備を進めています。

この事業の総資金200億円のうち50億円を学生・生徒の父母・保護者、卒業生、教職員のほか、広く各界の方々からの寄付によりご援助をいただき計画とし募金活動を進めております。お陰様で多くの方々のご賛同を賜り、貴重な浄財をご寄付いただいております。第1期の事業は学部の改組、学科の新設、教育棟（梅ヶ丘校舎34号館）の新築などを完了し、第2期事業は、中高施設の環境整備、教育設備のリニューアルおよびメイプルセンチュリーホールの開設により本学園の教育研究環境を整備いたしました。引き続き第3期の事業を実施しております。事業達成へのご理解を重ねてお願い申し上げます。

●募金総額：50億円 募集期間：平成18年4月～平成30年3月

●募金方法：創立100周年記念事業募金事務局から、ご本人宛に募金の依頼状をお送りいたしております。依頼状未着の方は、募金事務室宛に申込書をご請求ください。

また、「コンビニエンスストア」や「インターネット」からも寄付を受け付けています。詳細は、大学ホームページまたは募金事務室でご確認ください。

## ■事業の概要

期別	事業項目	事業内容
第1期 18/4～20/3	世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎 教育施設の総合整備 教育・研究組織の再整備	総合教育棟の建設 研究・教育棟の建設 新学部の設置・学科の改編
第2期 20/4～25/3	町田・多摩キャンパス 教育施設の再整備 世田谷キャンパス	教育施設・設備のリニューアル 厚生施設の充実・環境整備 中高施設の環境整備
第3期 25/4～30/3	世田谷キャンパス 再開発整備	既存建物の建て替え 環境整備
通期	修学支援事業 教育振興 年史編纂事業	奨学基金の充実 スポーツ・文化活動の振興支援 100周年史の編纂
総事業費		200億円

上記の「事業内容」は、計画の具体化により、若干の変更を伴います。

## ■資金の概要

総事業費……………200億円  
うち学園資金……………150億円  
うち寄付金……………50億円

## ★募金についてのお問い合わせ

学校法人 国士館 募金事務室  
創立100周年記念事業募金事務局  
(世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎1階)

〒154-8515  
東京都世田谷区世田谷4-28-1  
電話：03-5451-8207

## 思い出の記

### 一、専門学校設置準備室の時代

一九九四（平成六）年四月一日、太宰府キャンパスに国士館大学福祉専門学校準備室が開設され、私は入職した。

一九九五（平成七）年四月、国士館大学福祉専門学校開校に向けて教室棟の改修及び実習棟の増築が始まった。

準備室員は、教室棟一階の事務室及び学生食堂で業務をしていた。廣渡修室長（開校後は校長）と私の二名は教務関連の書類の準備にかかった。まず、福岡県下の既存の介護福祉専門学校を訪問して資料を集めた。それらの資料と国士館短期大学の資料を参照しながら、国士館

の教育理念である四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」を理想の介護福祉士を育てる基本理念に置き、学生便覧を作成した。

カリキュラムは、社会福祉士介護福祉士養成施設指定規則に沿って、一般教養科目・専門科目はすでに出来ていた。特別科目は他校にはない本校の特性として、救急法・陶芸を入れ、教科外活動では、実習施設の年間行事を参考にしながら作成した。

太宰府キャンパスは、国士館の中では一番敷地が広く、山林に囲まれ、グラウンド、体育館など設備が整っていた。それらの施設利用は、開校後生徒のアイデアを取り入れながら一緒に考えることにした。

国士館旗争奪高校剣道大会は、開校前と同様に継続することになった。体育館の活用及び専門学校の広報活動

元国士館大学福祉専門学校助教

江崎 澄子





2004（平成16）年 太宰府キャンパス全景

を兼ねて夏季休業中に実施した。関西・九州各方面から剣士が集まり、応援を含めると延べ人数は一〇〇〇名を超え、太宰府キャンパスは人があふれ熱気があった。

入学式会場の教室棟五階の階段教室には、松島博理事長の筆による教育理念の四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」の額を掲げて、第一回入学式を迎える準備が整った。

## 二、教員時代

一九九五（平成七）年四月一〇日、第一回の入学生は、一四八名の受験生の中から選考された四四名であった。式典は、松島博理事長を迎えて厳粛に執り行われた。

入学生代表は、最年長者のMさんが代表の挨拶をされ、「二〇年ぶりに一〇歳代の若い人と椅子を並べて学ぶ事はとても緊張するし、授業についていけるか心配です」と気持ちを述べられた。しかし、二年間無欠席で、同級生からはお母さんの存在として慕われ、成績優秀で卒業式でも代表の挨拶をされるほどであった。

新入生の指導では、介護は主に高齢者対象の仕事が多いので、礼節を大切にし、登校下校時やすれ違った時、



1995（平成7）年4月10日 第1回入学式

授業開始終了時の起立礼など声を出してのあいさつを励行した。服装は、短パン、草履、ノースリーブ、透ける服などを避けるようにした。「義務教育の延長で細かすぎる」との生徒の反応もあったが次第に浸透していった。

国立夜須高原少年自然の家（福岡県朝倉郡筑前町）での一泊研修は、介護福祉士になるという志を高めるために、「理想の介護福祉士像」のテーマで、グループワークをした。徹夜でのグループワークは、活発な意見を出して共通の目的意識ができ、それらを模造紙にまとめて翌日発表した。クラスの仲間意識が芽生え、私はこれまで看護専門学校で一三年間教鞭をとってきたが、福祉については、初めての経験で知識が乏しく不安があった。講義で困ったことは、私自身が福祉の現場体験がなく、看護体験を話すと、生徒から「私たちは介護福祉士を目指しており、看護師を目指していません」と指摘され、これを契機に私は福祉大学へ編入し、福祉施設の現場実習を体験した。こうして生徒と共に私も成長していった。

終末期介護の講義の時、Y生徒が叔母の看取りの体験を詳細に作文に書いてくれた。その作文を読み上げながら、妹の死と重なり途中涙で読めなくなったが、生徒は

静かに聞いていた。心に残る体験であった。

教課外活動では、福祉施設で実施されている行事を取り入れた。季節行事の餅つき、七夕、ゲートボールなど生徒が計画・立案し、実施した。就職後、福祉の現場のレクリエーションで活用できるよう工夫した。餅つきは、生徒の体験者が少なく、近隣の高齢者の参加を願って生徒と一緒に実施した。最初は興味をしめさなかったが、餅米を蒸し、杵でつき、餅丸めなど作業をするうちに、高齢者との話し声や笑顔が出てきた。

七夕会では、校庭にある笹竹を切り、こよりを繕り、短冊を下げた。短冊には、「卒業ができますように」「彼女ができますように」「車の免許が取れますように」などの願い事が書いてあった。

救急法では、一次救命法及びAED使用法を実施した。

専門学校で救急訓練―今年七月非医療従事者の使用が可能になったAED(自動体外式除細動器)を使用した救急講習会が一日、太宰府市御笠の国士館大学福祉専門学校で実施された。AEDとは心臓が何らかの原因により細かく動き始めて、体に血液を送り出すことができない状態になった際に、電気

ショックを与えて正常な状態に戻す機械。民間にはまだ普及していない。講習会には生徒や教職員約五十人が参加。参加者は「予想以上に簡単ですね」と驚きながら体験していた。

(二〇〇四・一一・二五 太宰府広報より抜粋)

研修旅行では韓国日系婦人保護施設「慶州ナザレ園」を訪問した。園は終戦後韓国に残された日本人女性の一時避難場所であったが、後に日本人独居老人の収容施設になった。園内を見学すると、居室はすべて和風の個室で、日本の写真や置物が飾ってあった。日本の身元引受人がいない人、韓国国籍者や死亡扱いなど日本に帰れない人が入園されていた。A生徒と私は、八〇歳代の女性から話を伺った。「京都出身で韓国男性と結婚するも死別し、独居生活が困難なため入所したが、最初は寂しくて日本に帰りたいかった。当時は、園のそばにある高台から日本列島を眺めて泣いていました。しかし、日本に一時帰国した人の話では、最初は歓迎してくれるが遠慮しながらの生活より、住み慣れたナザレ園の生活の方が楽しいと聞き、私は近親者がいないので日本には帰りません」と話された。園では日本の歌を歌っていると聞いたので、「北国の春」「故郷」をみんなで合唱すると、入所

者より生徒のほうが涙ぐんでいた。帰りには、園の外まで見送りに出て、いつまでも手を振ってくれた。

翌日は、慶南専門大学校学生と通訳を交えて「福祉全般について」意見交換をした。その後、校庭での交流は、英会話や身振りで和やかな雰囲気が見られた。後日、国士館大学福祉専門学校を訪問された時は、七夕飾りやお抹茶でおもてなしをした。韓国にはそのような文化はないと興味を持たれた。

体育祭では、保護者や近隣の方が一〇〇名ぐらい参加され、障害物競走やゲームなどで盛り上がり、終了後は、生徒が作ったカレーと一緒に食べながら「アットホームでいいですね」と笑顔で話が弾み、後日保護者からお礼の手紙をいただいた。

また、実習施設の入所者を招待し、車いすゴム風船バレーや車いすフォークダンスなどを一緒にすると、「楽しかった。また来たいです」と話された。

学園祭のテーマは「おいでなさい」に決まり、ラジオ放送、西鉄大牟田線駅のポスター掲示、路上の宣伝チラシの配布など広報も工夫した。全員で分担して準備し、時間はかかったが、近隣の方や子どもたち、保護者や知人など多くの方が参加され、食べ物・不用品・梅干しのバザー、介護体験、障がい者体験など大変な盛況であった。

た。

開校五周年記念は、公開講座の講師にロサンゼルス及びソウルオリンピック金メダリストの国士館大学体育学部教授斉藤仁先生をお招きして、「金メダルへの道」を講演していただいた。会場は超満員で椅子を追加するほどであった。斉藤先生の知名度が高く、特にご年配の方が多く参加され大盛況であった。先生の温かなお顔からは想像もできない、自分に厳しい練習を重ねてこられた人生を知ることができた。

就職相談や指導は、実習施設へ求人依頼や福祉の職場説明会への参加など教職員が分担して行った。また、卒業生を招いて「福祉職場の現状」の説明会を開催した。求人は四〜五倍ぐらいあったが、三〇歳後半から四〇歳台には雇用条件が厳しかった。

就職後に職場訪問をすると、職場の一員として第一線で適切な介護を展開している姿は頼もしく、施設長からは、「勤務態度やスタッフの評判もよく信頼できる」とのお褒めの言葉を聞くことができた。

### 三、介護実習施設の巡回指導

介護実習施設（以後施設という）は、身体障がい者を

対象とした施設、身体障がい児を対象とした施設の約一五施設に生徒は二〜四名ずつに分かれて実習に行った。施設は交通の便が悪いところが少なくなく、生徒の多くは自家用車での通学となったため、交通事故が心配であったが、一年間で事故の報告はなかった。交通機関を利用すると二時間近くかかる施設もあり、実習施設に宿泊して実習した。

教員は、各施設へ週二回巡回指導に行き、まず指導者に実習状況を聞き、生徒からは、実習内容や困ったことを聞き、生徒間の情報交換や助言をする。実習でトラブルがあり呼び出されることもあった。入所者の花瓶を割る、移動時の打撲や転倒など、特に入所者に身体的外傷を負わせた場合は、施設長や指導者にあいさつに行き、生徒が精神的に落ち込んだ場合は、学校で指導したこともあった。

生徒から「入所者がいつもと様子が違うと指導者に報告すると、バイタルサインのチェック（血圧・脈拍等測定）をし、変わりありませんと言われたが、その夜亡くなられた」との報告があった。生徒はショックを受けていたが、翌日は実習に行っていたので安堵した。アセスメントの重要性や様々な貴重な体験は、これからの介護福祉の仕事に生きるはずである。



ケーススタディ集

巡回指導で一番多かった相談は、実習日誌が書けないことであった。施設の更衣室を借りて一緒に考え、電話相談は深夜に及ぶこともあった。

実習の総まとめをケーススタディ（事例研究、卒業論文に代わるもの）として実習施設別に全員発表した。講評は、実習指導者や実習施設に就職した卒業生に依頼した。質疑応答では活発な意見が出て、発表者が答えられないときは卒業生がフォローするなど、とても有意義な時間を共有することができた。

#### 四、閉校式

二〇〇一（平成一三）年の第七期生の頃から受験生が減少した。県下に介護福祉養成校が開設当時は七校であったが、平成一六年には二四校（学科を含む）に増加し、生徒募集が困難になった。また、高校へ生徒募集に訪問すると介護福祉を希望する生徒が減ってきたと言われた。それは、介護福祉現場の労働待遇が悪くなり（福祉制度の変更や入所者の重度化による職業病）離職する人が増えたことも影響していた。生徒増に向けて対策会議を重ねてきたが、効果は上がらなかった。若者にとつて福祉職場が魅力的なものでなくなり、本校のみでなく



2007（平成19）年3月15日 閉校式

周辺の介護福祉専門学校も閉校の声が聞こえてきた。

二〇〇七（平成一九）年三月、第一期生の卒業式を最後に閉校することになった。太宰府キャンパスは、敷地が広がったこともあり、卒業後に母校を訪問した際の思い出となるよう記念樹として、実習棟横に毎年いろは楓（国士館の校章）を植樹していた。閉校時には一一株になっていた。

## 五、旧太宰府キャンパスのその後

二〇一三（平成二五）年四月一日、太宰府キャンパスは太宰府市に譲渡移管され、同年七月二七日、本学及び太宰府市合同による除幕式が執り行われた。

跡地には、記念碑「国士館太宰府校地跡」と卒業生一同寄贈「念ずれば花ひらく」の二基が並べられ、後方には国士館校章のいろは楓が三株植樹されていた。

除幕式には、元国士館大学福祉専門学校同窓会役員に声掛けをすると一〇名が出席してくれた。卒業生と近況や専門学校時代の思い出話をしながら当時を懐かしんだ。

「記念樹は元気に育っていますか」と誰かの声が聞こえた。また、専門学校で培った思いを語ってくれた卒業



卒業記念樹

生もいた。「現場で働いてみて理想と現実の違いに挫折しそうになった時、同級生の声を聴くと勇氣と活力が湧いてきた」「施設実習で、授業とのギャップを強く感じ、様々な人生を歩んできた高齢者を介護するのだから介護の勉強に終わりはないと思った」などなど……。

その他、研修旅行、学園祭（おいでなさい）及び体育祭などの行事についても、一つ一つが生徒の手作りで、遅くまで意見を出し合って作り上げたことが大切な思い出となっているようであった。

二〇一六（平成二八）年六月二〇日、旧太宰府キャンパスを訪れた。国士館大学の名称を外された門を入ると、旧教室棟の外観は耐震補強がなされ、クリーム色に塗装されていた。玄関へ入ると、受付があり、応接テーブルとソファアは、私が就職した初日に座ったもので感慨深かった。旧食堂のテーブル・椅子は当時のままであった。

二階の旧教室は、施設課・上下水道課になっていた。三階は、校区自治協議会等の会議室、事務室になっていた。四階の旧図書館は倉庫、五階の階段教室は、当時のままであった。舞台には、演台と花台が並べられ、「寄贈平成九年三月一八日 国士館大学福祉専門学校第一期卒業生一同」の名称が刻まれ、当時のままであった。式



記念碑「国士館太宰府校地跡」と卒業生一同寄贈「念ずれば花ひらく」  
（国士館大宰府キャンパス跡地）



五階階段教室と第1期生寄贈の演台と花台

典（入学式・卒業式）を一回繰り返し、全員で国士館館歌を手話で唱和したことを想い出し、懐かしかった。手話による館歌は、専門学校の特徴でもあった。

旧実習棟の介護実習室、入浴実習室、調理実習室は、太宰府市公文書館の事務室及び資料室に改装された。校舎からグラウンドへ続く道の両側にあった桜の樹は一段と大きくなっており、グラウンドは整地され運動公園になっていった。体育館は、当時のままであったが、外壁は一部剥げていた。

卒業記念樹は、一一株が九株になっていた。記念樹の前には手作りの木製表札を建てていたが、見当たらなかった。しかし、九株の記念樹は大木に成長しており、嬉しかった。卒業生が訪れるのを待っているかのようにある。第一期生から第一期生までの様々な思い出が走馬灯のように甦ってきた。

国士館の思い出

## 硬式野球部OB職員として

### 少年野球でブラジル国際交流

政経学部経済学科二期生

田所 清人



二〇一七年国士館大学は創立一〇〇周年記念日を迎えることとなり、すでに一年を切って記念行事が動き出している。三五年前に野球部OB職員が今年リオ・オリンピック開催地ブラジル国に入り、サンパウロ市、アマゾン川流域マナウス市へも行き野球交流をしていたことをお伝えしておきたい。

この『楓原』への寄稿は、高校野球球児で野球の話になると止まらなくなる、国士館史資料室福原一成氏から、ブラジルで野球指導をしていた事実を是非とも書いてほしいとの熱い言葉に、少しためらいがあったがお受けして、一九八二（昭和五七）年に『国士館大学新聞』に寄稿したものを現在の思いも少し入れながら書くことにした。

私が灼熱とサンバ、そしてサッカーの国ブラジルへ行く機会を得たのは、一九八一（昭和五六）年七月上旬、当時「少年野球国際交流協会」（W・B・B・A）、現在「少年軟式野球国際交流協会」（I・B・A・boys）、当時代表であった江藤慎一氏（元プロ野球選手）がブラジル中央協会の紹介で柴田梵天総長を訪ねた際、近く二回目のブラジル親善少年野球使節団を訪問するという話があり、国士館大学もその時期に第五次ブラジル訪問団が訪伯することと合い重なり、柴田総長からその少年野球使節団のコーチとして同行するよう緊急に特命を受けた。

少年野球使節団のコーチ任務終了後は第五次ブラジル訪問団に参加することの指示を受け、初めてブラジルに行くことになった。

一九八一年七月二八日、少年野球使節団より先にサンパウロに向け、成田空港を出発した。一人旅の気楽さと不安と寂しさが入り混じっての空の旅だったが、隣り合わせた日系人男性や窓側のブラジル女性と、すぐ話が弾みサンパウロ・カンピーナスヴィラコッポス国際空港まで楽しい空の旅が出来、思いがけない旅の出会いを楽しんではいたが、私はポルトガル語が話せなかったため、隣の日系人男性が窓側の女性との通訳をして頂いて助かったことを覚えている。

長い長い空の旅も終り、いよいよブラジルである。空から初めて見るブラジルは緑色のジャングル、乾ききった赤色の土、赤色の屋根瓦でそれぞれのコントラストがとても暑さを感じさせた。そして上空から見る広大なブラジルの領土は、さすが日本領土の二三倍もある領土感を改めて深くした。ブラジルの気候は冬であったが内陸性気候のため日中はかなり温度が上がリ半袖姿の人が多く見受けられた。

翌日、少年野球使節団のサンパウロ到着を迎えるため、コンゴニヤス空港に向かったがサンパウロも車が多く、ちょうど午後六時半ごろの帰宅ラッシュにかかり、普通二〇分くらいの行程を一時間三〇分もかかってしまい焦り、冷や汗をかいていた。やっこのことで空港



空港でサンパウロの少年野球チームの歓迎を受ける使節団

に着いたが、少年野球使節団一行が搭乗した飛行機が二時間遅れたため、空港で長い時間待つことになってしまいたくしいの中で冷や汗が出る焦りは何だったか、出迎えるの日伯野球連盟関係者も待ちくたびれてしまっていた。しかし江藤団長を先頭に少年達が空港のゲートから顔を見せると歓声を上げて走り寄り、お互いしっかりと手を握り合っていた。

歓迎夕食会では、少年達は食欲旺盛で元気な姿を見せ旅の疲れなどどこ吹く風の様子、ホテルのロビーなどでふざけたり走り回ったりしていたが、団長と小沢コーチの消灯の声で全員あつという間に寝てしまった。元気で素直な良い少年達であった。

少年野球国際交流協会は、一九七七（昭和五二年）年に設立している。青少年野球の育成に努力し、特に少年野球は勝つことよりも精神面を重視し、チームワーク・忍耐などを養うことを指導方針として、国内でも全国各地を巡回して野球教室を開き、心身及び技量の向上を図っている。現在は「少年軟式野球国際交流協会」となり、一九八二（昭和五七）年に笹川良一、佐川清両氏らの支援を得て、文科省の認可を受け社団法人として受け継いでいる。

今回の使節団は、一〇歳から一二歳までの熊本県出身

児童を中心に編成されており、他に埼玉県から二人、東京都から一人が参加し選手は一五名であり、同行者は団長の江藤慎一氏と熊本商業高校時代の同期で九州電力株式会社野球部監督の藤井正氏、W・B・B・A専属コーチの小沢良亮氏、名誉副団長の深水慎一氏、総務局長の植田三四吉氏、母の会代表の江藤トヨ女史（江藤氏の母）そして私の総勢二二名である。

七月三十一日、休む間もなく早速練習を開始した。私も少年達とは初めての野球練習である。集合した子供達の間はキラキラと澄んでいた。この時期に正しい本場の教育をし、人造りをしなければと強く感じたのを今でも覚えていいる。そして、このブラジル国内遠征試合の一三日間は少年達に全力でぶつかって、少しでもよい思い出となるような野球が出来ることを願った。一方、ブラジル野球関係者及び少年達は、スタンドで日本の少年達がどのような練習をするのかじっと見つめ、日本野球を吸収しようという練習が終わるまで立ち上がる者はいなかった。当時ブラジルの少年野球では、プレーするのはほとんどが日系人であり、しかも学校単位のチームでは無く、各市町村で野球が好きな少年が集まりクラブ形式で野球チームをつくっていた。少年の部は年齢により三チームに分かれており、七歳〜九歳までと、一〇歳から一二歳ま



ボンレチーノ球場での試合を終えて



試合後は必ず地元チームの選手と交歓する

で、そして一三歳から一五歳までとなっていた。

各部門で地区大会、州大会及び全伯大会への出場を目標に熱を入れてプレーしている。そしてこの大会が日系移民の親睦にも大いに役に立っている。今回は日本少年野球チームの来伯で、各地の試合球場周辺はかなり盛り上がっていた。

八月一日、カンピーナス・インダイアトゥーバ球場でのストエステ選抜軍を皮切りに、オエステ選抜軍と合わせて二試合、サンパウロ市ボンレチーノ球場でのサンパウロABC軍、カピタル選抜軍との二試合、マリంగా市マリంగా球場でのパラナ選抜軍と二試合、ブレデンテ市球場でのブレデンテ選抜軍と二試合などと、一〇日間連日移動しながらの試合であったが、子供達は良く頑張りと、負け知らずに一〇連勝することが出来て内心ほっとしていた。

ブラジルの少年達は、日本の少年に比べ体力に恵まれているので、練習方法を改善し技術のレベルアップをはかれば、かなり強いチームが出来あがると思われる。しかし当時は、ブラジル野球界には優秀な指導者が不足しているため地方チームのレベルアップはなかなか困難のようであった。少年達は、一生懸命プレーをしているにもかかわらずポイントをついた指導がなされてない

め、練習も試合も、しまりが無い野球になってしまっていた。また、礼儀作法や精神面の指導もまだまだ出来ないチームが多かった感をもちながらの転戦であった。

次の球場への移動は専用大型バスで動いたが、バスから見える、はるかかなたの地平線や広大な牧場、コーヒー農園などが長時間移動の私達を和ませ飽きさせなかった。移動中の子供達との話及び行動を見ておもしろい。地方遠征では子供達は民宿（ホストファミリー）した。ある少年は次の町へ移動のバスに乗る前にホストファミリーのお姉さんに別れのキスをされ、バスの中でそのことを興奮気味に話していた。また、大人顔負けのことを話す少年の部屋へ行ってみると、一人で風呂に入るのが怖いと見えて、二人で入り並んで顔だけ出していた少年もいた。ツインベッドであるのに、寂しいから片方のベッドに二人で寝ていた少年もいた。やはり幼い小学生であり、かわいいものである。子供達にとつて私は教育実習の先生のような存在であったように思えた。すっかり溶け合ってしまったので兄のような存在でもあった気がする。

遠征中、健康を損ねた子供も若干いたが全日程を終え、サンパウロに帰ってきた時は全員元気であった。



少年野球使節団の少年達と筆者

別れる最後の夜は、全員私のところ来てサインや名刺を下さいと言ってきた。年賀状を出しますからとか、東京に行った時には必ず連絡しますから会ってくださいとか言って、全員が来てくれたので感激してしまった。願わくば将来この少年達の中から、大選手が一人でも出てほしいと思いながら別れを惜しんだ。

八月一日いよいよ少年達と分かれる日が来た。何となく私も寂しくなった。たった十数日間であったが一年くらい野球指導をしていたような気がしていた。サンパウロ・コンゴニャス空港で少年達最後の「コーチさようなら……」の声で私は涙がどとどと溢れてしまった。

私も当時「少年軟式野球国際交流協会」の指導方針に共鳴した一人であり、大学職員として微力を尽くしたのではないかと思っている。

### サンパウロ州サン・ロケ

### 国士館大学協会サンパウロ分校にて

八月一四日からは、柴田梵天総長を団長とする国士館大学ブラジル第五次訪問団とともに行動したが、訪問団最後の予定が終了した席で、柴田総長から新たな業務指示があり、私と柴田小次郎顧問は訪問団と別れることになった。アマゾン上流のマナウスから八月三〇日、サン

パウロ州サン・ロケにあるブラジル国士館大学協会サンパウロ分校へ行き、そこに宿泊することになった。後に業務指示を確認すると、サンパウロ市とリオデジャネイロ市の中間地点に農業学校（牧場）の跡地があるので国士館大学がその土地を購入出来たら直ぐその地に入つてもらいたいとの業務指示であった。結果的にはその土地は購入出来なかつたが購入していたら、かなり長い間ブラジルに滞在することになったかもしれない。半信半疑でサン・ロケで待機していたが、私はその様に記憶している。

サンパウロ分校には広大な敷地の中に雑木林があり、また元別荘地であつたためきれいに整地された芝生もあつた。ユーカーリの防風林が整然と並び、ゆるやかな起伏のある土地であつた。

海拔八〇〇メートルもありブラジルでは気候に恵まれている地方でもある。サンパウロ中心から西へ車両で約四五分の所にある。途中の街道沿いには、民家や工場が軒並み建てられており、近い将来この分校の周辺も大変賑やかになると思われる。分校の周辺には牧場や畑や林、別荘などあり、すばらしい景色である。そのすばらしい環境の中に国士館大学武道館を建設していた。

当時の道路状況を思い返すと、幹線道路は整備されて

いたが、分校の敷地に入る道路は雨が降るとドロドロになる土を固めた道であつて、大雨の日はヴァルジェンゲランド商店街に行くのが困難な状況であつた。現在聞くところによると細い道まで舗装され環境が整つているとのこと。サンパウロ市のベットタウン化して大きく発展している住宅街になっていくという（※国士館大学武道館は完成したが現在はブラジル日本文化福祉協会へ譲渡しサン・ロケ市がスポーツ大会等に使用している）。

以来、私はこの分校に三八日間滞在し、朝は囀る小鳥の鳴き声で目を覚まし、夜はユーカーリの葉が擦れるささやきで寝るといふ生活をしていた。しかし、あまりにも静かすぎて犬の遠吠えが聞こえる妙に不気味な夜もあつた。ヘビも居るといふ話を聞いていたが、季節が冬であつたため残念ながらもなかなかお目にかかれず、管理使用人が敷地内で野焼きをしていた時に約一メートルのガラガラヘビ（カスカベール）を見た。初対面なのでうれしいようなこわいような。その後も校内を歩いている時に、二回緑色のヘビ（ジャラクスー）と対面、また池の淵にいた黒いヘビなど彼らとも忘れずに交流した。

この間私は、図らずも近くの町ヴァルジェンゲランドにある日本語学校の少年野球チームを指導することになつた。この日本語学校には先に剣道指導で大学職員の



サン・ロケ国士館大学協会サンパウロ分校にて  
(左から須藤磐サンパウロ分校職員、柴田小次郎顧問（当時）と筆者）

上地康夫氏が入っており、稽古に厳しくも愛がある指導で、全生徒さんの人気先生になっていた。

この日本語学校の少年野球チームで一か月間、一三歳から一五歳を指導することになった。この選手達には礼儀作法や協調性（チームワーク）、野球をプレーするにあたっての精神面などについて週三回の割合で指導した。

基本練習を徹底的に行うことにより、このチームの選手達の技術は、始めて見た時とはずいぶん違って、チームのレベルは見る見るアップし、ご父母から感謝された。特に私が最初に選手に伝えたことは、グランドの出入りは常にグランドに対して感謝の気持ちをもって、一礼をすることを実行させたが、これはご父母から喜ばれた。このようなことは日本ではあたりまえであるが、ブラジルの三世・四世では理解できない点もいろいろあつたろうと思われる。しかし、このような些細なことでもヴァルジェングランデから周辺の町及び他チームへ伝わってくればと願った。

九月五日、この少年達と別れるときが来てしまった。マナウス総領事から柴田梵天総長に、野球指導員の派遣依頼が届いたからである。

ヴァルジェングランデの少年達と一〇月五日最後の練

習終了後、ブラジル国旗に全員が署名して心を込めた記念としてプレゼントしてくれた。主将の伊藤君が「田所先生から野球についての心構えや礼儀作法、基本技術を教えていただき本当にありがとうございました。先生のことは忘れません。是非またヴァルジェングランデに来てください」と挨拶されたとき、また目頭が熱くなつてしまった。

### マナウスアマゾンにて

一〇月九日、再びマナウスへ飛んだ。

マナウスアマゾンに日系人が地域に移住したのが一九二九年（昭和四年）今年で八七年になる。現在では人口一九〇万人。日本企業の工場も数多く進出。ホンダ、ヤマハ、パナソニック、ソニーの会社その他が進出している。当時、好景気を支えたゴムの木を栽培しようとするも、既に土地はやせ細っていたと聞く。土地は石ころや砂だらけ。作物が育たなかった。畑への水汲みが大変で遠く離れたところから運んでいたとも聞いている。

一九八一年一〇月その地で、第一回西部アマゾン野球大会が開催されることになった。同年八月に第五次訪問団が訪れて以来、親密になった本学との関係から、マナ



コロニアチームは大人もチームメイト、前列中央筆者

ウス総領事も本学に要請してきたものと思われる。

この大会への参加チームは、ベレンチーム、ポルトベリーヨA・Bチーム、マナウス対岸のカカオペレチーム、マナウスコロニアチーム、マナウスA・Bチームおよび商社選抜チームの計八チームである。大森淳正総領事も出席し、始球式をやるほどの熱の入れようであった。一〇日・十一日の両日にわたる激戦の結果、第一回の優勝を飾ったのはパラ州のベレンチームであった。私は両日にわたり審判及び進行係を務めたが、終始和やかな雰囲気の中で野球大会を無事終了することが出来た。

大会の翌日から大森総領事と日伯文化協会会長寺野氏から各チームの指導を依頼され、ポルトベリーヨチーム、マナウスの対岸にあるネグロ川（アマゾン支流）を四五分かけて渡河した所のカカオペレチーム、マナウスコロニアチームおよびマナウスBチームの四チームを約一週間にわたり指導した。

どのチームも私の指導事項を真剣に聞いて頂いて一生懸命プレーしてくれた。暑い中の三・四時間の指導であったが基本練習は身に付いたと信じている。どのチームも一日だけの指導であったが別れるときは、お互いに再会を約束していつまでも手を振っていた。

## ブラジルの休暇

三ヶ月のブラジル滞在中に、私が唯一ゆつくりできたのはイグアス瀑布への観光とマナウスにおけるネグロ川での川遊びであった。

イグアス瀑布観光はヴァルジェングランデ日本語学校で剣道指導していた上地康夫氏との珍道中であった。細かいことは書かないことにするが今思い出すと楽しいスリリングな数日であった。イグアス瀑布はアルゼンチン国とパラグアイ国が接する国境にあり、直線距離にして約四km、ゆるやかな曲線を描いて瀑布をつくる。落差約八〇メートル、三百余の滝が一大半円形劇場を造る。実に壮観であり水量は北米のナイアガラ瀑布や南アフリカのビクトリア瀑布をもはるかにしのぐと言われているが、まさしくその通りであった。特に「悪魔の喉」と言われている一番奥にある滝は、しばらく我を忘れさすような魔力を持っている。

マナウスでの川遊びは、ネグロ川（黒色）とソリモインス川（茶褐色）がY字に合流する場所にあるが、水温と流れの速さが違うため下流二五キロメートルくらいまで、混じり合わないで平行する二条の流れを小舟に乗っ



イグアスの滝、背後が悪魔の喉



ネグロ川（黒色）とソリモインズ川（茶褐色）の合流地点



マナウス川遊びの船頭と筆者（左）

て見て回った。自然が描く見事なそして不思議な一大キャンバスであった。その合流地点には淡水イルカが飛び跳ねておりこれにはびっくりしたが、五〇センチもあるナマズが釣れた時にまたびっくり。次は少し上流の奥へ行ってみるとピラニアが釣れ、ピラニア収穫は二匹で、肩を落として帰ってきた。ピラニアはマナウスでは美味しいと言われ、日本ではまずいと聞いていたので食べてみたが、私の味覚が鈍感なのかもしれないが、とても美味しかったことを皆さんに伝えておきたい。

ブラジル滞在中のことをいま静かに振り返って見る

と、懐かしい思い出が走馬灯のように胸中をよぎる。少年達との別れに幾度か流した熱い涙は、たとえ言葉が通じなくとも真心は通じるものという貴重な体験を得た。日本に居るときに抱いていたブラジルのイメージは現地に行つて全く新しく塗り変えられてしまった。人も景色もスケールが大きく、全てを抱擁し尽す。まさに世界一の大河を抱く大国ブラジルである。

最後に今回の寄稿に関し、故柴田梵天先生にブラジル行きを命じられ、三か月の体験・経験を与えて頂いたことに心から感謝申し上げたい。先生にこの声がもう一度届くことを願う。また冒頭に申し上げた国士館史資料室の福原一成氏に寄稿を薦められ、永久に『楓原』に文字として残すことが出来たことを御礼申し上げ、国士館大学硬式野球部OBの一人がブラジルの地に野球の苗木を植えられたことを誇りに思うとともに、ブラジル人から大選手が出てくることを期待する。

国土館の思い出

## 国土、海を渡りて

### —— 国土館ブラジル支部の回想 ——

法学部二期生

伊井 克己



「国土、海を渡りて五〇年、志し半ばにしてブラジルの赤土と化す」

学生時代に聞いたブラジルへ開拓に渡った日本人の言葉である。

国土館大学入学後、空手道部に所属していた私は、先輩方が卒業後ブラジルのパラ州ベレン市にあった国土館ベレン支部へ空手道指導員として赴任していく姿を他人事のように見ていた。数年後の一九八二（昭和五七）年六月、母校国土館から業務命令を受け地球の裏側のブラジルへ赴任することになるとは当時夢想だにしていなかった。

### 国土館とブラジル

日本とブラジルは一八九五（明治二八）年に「日伯修好通商航海条約」を締結、国交を結び、奴隸制を廃止（一八八八年）し新たな労働力を移民に求めていたブラジルと、日露戦争（一九〇四年～一九〇五年）後の不況による失業者の増大などから国外への移民政策を積極的に進めたい日本との間で移民の送迎が始まった。排日運動が吹き荒れる北米・カナダへの移住が期待出来ないなか、ブラジルへ希望をつなぎ一九〇八（明治四一）年四月二八日、最初のブラジルへの日本人移民をのせた「笠戸丸」が神戸港を出航した。アマゾンへの日本人移住は鐘紡の出資により設立した南米拓植会社（社長・福原八

郎)による一九二九(昭和四)年パラ州アカラ植民地への第一回日本人移民一八九人に始まる。

ブラジル国アマゾンナス州政府からの日本人移民の要請は、当時衆議院議員であり国士館理事であった上塚司(ブラジル移民の父といわれた上塚周平の従弟)が中心となり、一九三〇(昭和五)年四月、アマゾン開拓の指導者養成を目的とした国士館高等拓植学校の設立へとつながった。その後、国士館内部で発生した意見対立により上塚は国士館から離れ、新たに日本高等拓植学校(昭和七年五月三一日認可)を登戸に設立した。国士館高等拓植学校は一九三四年(昭和九)十一月一日に廃止され、国士館によるアマゾンへの開拓指導者派遣事業は一九三二年(昭和七)年四月一六日に同校二回目の卒業生(高拓生)をアマゾンへ送り出したのを最後に幕を閉じた。

五〇年後の一九七九(昭和五四)年一月五日、アマゾン日本人移住五〇周年記念祭に慶祝使節団を送った国士館は、同記念祭での高拓生との再会を機に日伯の武道・スポーツ・文化交流を目的とした支部の設置を決めた。

一九八〇(昭和五五)年七月、国士館大学はパラ州立大学、サンパウロ州立大学(以後USPと呼ぶ)との間

でそれぞれ武道スポーツ教育交流協定を締結し、その年の九月には国士館大学からの派遣教官山本英雄がベレン支部とパラ州立大学で空手道の指導を開始している。時を同じくしてサンパウロでもUSP等で剣道と柔道の指導が開始されている。

## 高拓生

私の学生時代、アマゾン開拓に関しては多くの本が出版されており開拓の苦労が筆舌に尽くしがたいものであったことは承知していた。ベレン支部責任者の越知栄先生は、国士館専門学校の前身である国士館高等部の卒業生で国士館高等拓植学校第一回卒業生(高拓生)の引率監督者として一九三一(昭和六)年五月二〇日神戸港を出航し、アマゾンに渡った国士館の大先輩であった。アマゾン日本人開拓五〇周年祭で国士館が高拓生と再会した事を機にベレン支部の責任者を越知先生にお願いすることとなったのである。

ある日、越知先生のご自宅に夕食の招待を受けた時、アマゾンに渡って間もないころのお話をされたことがあった。入植当時、その自然環境の厳しさから作物が根付き成長することの心配よりも人間が生きて行けるかど

うか分らない環境であったことや、全くの原始林での伐採作業の過酷さを聞くことができ、日本人移民がどれ程の苦勞と努力の末に今日の隆盛を得たのかと考えさせられ心に深く残った。開拓団の生活について高拓生を引率し監督的立場にあった越知先生から直接当時のお話を聞いたことは貴重なことであった。

越知先生は殆ど毎日のようにベレン支部武道館の道場に顔を出され稽古を見学することを日課とされていたが、体力の衰えからか、だんだんとお顔を拝見する機会が少なくなっていた。当時越知先生はブラジルへ渡ってきてからの歴史をまとめていと話されていたが私のベレン在任中に完成されることはなかった。

私はその後サンパウロへ移り、一九九五（平成七）年にブラジルでの任務を終え日本へ帰国したため、越知先生とはベレンを離れて以来お会いすることはなかったが、その後、越知先生が亡くなられた事を知り、まさに巨星が墮ちた脱力感を覚えた。開拓者として海を渡った先輩方の歴史を留めておくことは後世に残された後輩の責務であろう。

## 転換

母校国士館からブラジルのベレンへ行つて空手道の指導をしてくれないかと相談を受けたのは大学卒業後、会社勤めを始めて間もないころであった。私は子供のころ古い師にみてもらったことがあり、将来親元を離れ外国で暮らすようになると言われたそうである。いつごろからか外国で暮らしてみたいという漠然とした願望を持っていた私は、ブラジル赴任の依頼を受け大きく心を動かされ運命のような流れを感じた。アマゾン川河口の町ベレンという、その当時の生活からはあまりにかけ離れた世界に、当初戸惑いはあったが、心の整理をつけるのにそれ程時間はかからなかった。

私は一九八二年四月一日付けで国士館に奉職した。前年には空手道部同期の大木陽悦と鈴木克彦が国士館に奉職し後輩の指導にあたっており、私はベレンへ出発するまで渡航準備を進めながら大学の道場で稽古を続けた。日本を出国する数日前、国士館の海外事業を統括していた国際部の教職員の方々に大学の近くにあった「花壇」というレストランで壮行会を開いていただいた席で、当時国際部副部長だった柴田徳文先生から「骨は私



空手道部同期の仲間（4年生時）（後列左端が筆者）

が拾う」と饒別の言葉を頂いたことが忘れられない。

## ベレン着任

一九八二年六月一七日夜、飛行機のタラップからベレン空港に降り立った。熱帯特有の熱気に包まれ、緑に囲まれた飛行場に大きく「BELEM」とネオンに光る文字を見た時の何ともいえない気持ちを今でも忘れることが出来ない。

この後、一九九五年三月にブラジル勤務を解かれ日本へ転勤帰国するまでに日伯間を八往復し延べ一三年間のブラジル赴任生活を送ることとなった。

私のベレン赴任の目的はベレン支部の前任空手道指導員が帰国することに伴う後任空手道指導員として空手道の指導に当たることであった。ベレン支部は国士館が現地に設置したパラ国士館大学協会（SOCIEDADE KOKUSHIKAN DAIGAKU DO PARA 一九八〇年六月三日ブラジル国認可）を实体とする組織であり、越知栄理事長、東久一理事（高拓生）、町田嘉三理事（空手道師範）の責任体制で運営管理されていた。日本からの派遣空手道指導員は山本英雄、続いて車田享一、伊井克己、飯田隆男、川口雄大と続いた。山本英雄はパラ州立



ベレン支部武道館看板

大学でも客員教授として週一回空手道を指導していた。ベレン支部では汎アマゾンニア日伯協会から山科守剣道師範を迎え剣道指導も行われており、後に日本から剣道指導員として浅野誠一郎、柔道指導員として後藤啓之が赴任しベレン支部にて指導が行われた。

日本からの指導員は就労ビザが取得出来ず観光ビザで入国しているため、六か月ごとに帰国し再度観光ビザを取得して再渡伯するやり方を繰り返していた。前任者の車田享一がビザの切替えて一時帰国し再渡伯するのに合わせて、同じ航空機で私もベレンに赴任した。

### ベレンでの生活

ベレン到着直後は時差ボケ、現地生活への対応、着任後手続き等もあり町田先生から一週間くらいはゆっくりするようにと長旅を労わられた。ベレン支部武道館一階道場脇の一部屋が指導員用の部屋であったが、二人の指導員が生活するには無理があったので武道館から歩いて一〇分くらいの所に車田指導員と二人でアパートを一室借りて共同生活を始めた。

同武道館はベレン市のキンチノ・ボカイウーヴァ通り一六五七番にあり、大きなバス通りに面した市の中心

に所在し生活には大変便利などころである。ベレン市中心街の街路樹は樹齡三〇〇年を越すマンゴー並木で雨季（二月～五月）になると街中のマンゴーが実をつけ、風に吹かれて実を落とし街中がマンゴーの香りで覆われる。この時期はバスに乗っていても屋根にマンゴーがゴトンと落ちると運転手はバスを止めて拾いに行くが乗客は文句を言わない。商店やオフィスの前にマンゴーが落ち人々が拾いに家から飛び出す光景は南国らしく微笑ましい。私も早朝早起きしてマンゴーを拾ったこともあったが、子供達がマンゴー拾いをして小遣い稼ぎをしている邪魔をするような気がして止めた。マンゴーの季節には、一日中マンゴーの木の下で、落ちてくるマンゴーを売って暮らしているような者も現れる。

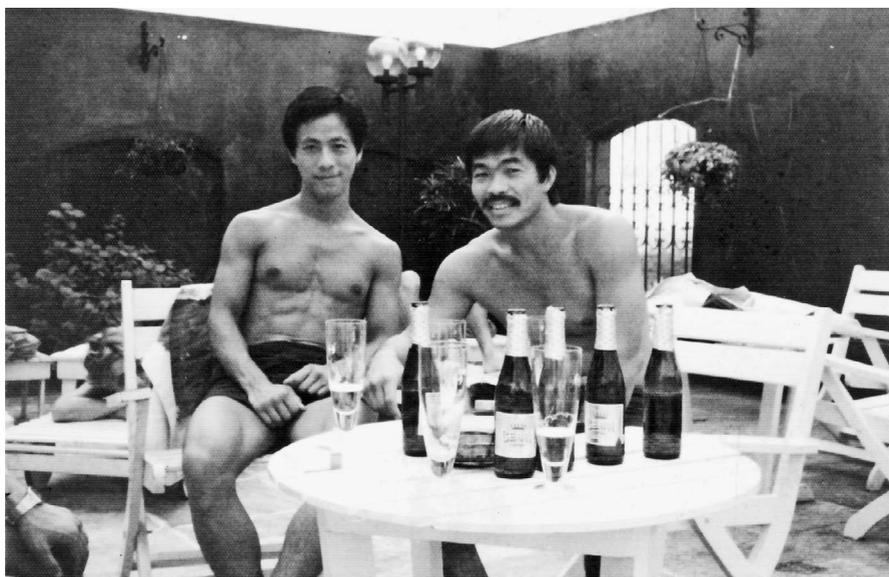
ベレンの気候は、雨季では三〇度～三二度くらいで湿度は八〇～九〇%と高温・多湿だが、日中にスコールという三〇分くらいの一時的な雨が降り気温が下がる。植物が多く茂っているため日陰に入ると涼しく夕方風もありしのぎ易い。このような気候なので普段は短パンにビーチサンダル、上はTシャツかランニング、くつろいだところでは上半身は裸ですごしていた。しかし、日中の日差しは強烈で、昼時間一二時～一四時ころは特定の商店街以外は店を閉めている。着任直後、そうとは知ら

ずに昼に買い物に出たところ、探しているものを買っている店はどこも閉まっており二時間近く炎天下を探し回り、結局諦めて帰ったが熱中症のようになり寝込んでしまったことがあった。

武道館二階には町田先生が家族と暮らしていた。町田先生にはベレン滞在中の生活全般に渡りお世話になり、その後一九九五（平成七）年に日本へ転勤した後も空手道を通じて交流が続いている。町田先生は日本大学卒業後、一九六八（昭和四三）年「あるぜんちな丸」で農業技術者としてブラジルへ移住、その後、学生時代から志しを持っていた空手道を極める道に進んだ。

NHKはこの「あるぜんちな丸」で渡伯した乗船者をその後一〇年ごとに追跡取材し、移民ドキュメンタリーシリーズとして「移住三十一年目の乗船者名簿 前編・後編」（二〇〇〇年三月放映）まで制作してTV放映しており町田先生も毎回出演している。町田先生は何かと食事に誘ってくださり、武道館二階の自宅でビールや地酒ピナガを飲みながら先生の話を聞くのも楽しいひと時であった。休日にはベレン名物のカニを食べに行ったり、先生が会員となっている軍隊将校クラブのプールサイドでビールを飲んだりした。

町田先生にはブラジル人の奥様との間に四人の子供た



1982年10月頃 軍隊将校クラブプールサイドにて（右より町田師範、筆者）

ちと養子が一人いて全員男の子である。それぞれ個性的是があるが特に三男の Lyoto は父親の血をひき格闘技の道に進み、二〇〇九（平成二二）年五月にはアメリカの UFC（アメリカ最大の総合格闘技団体）でライトヘビー級チャンピオンとなった。私のベレン在任中、Lyoto はまだ四歳で他の兄弟と一緒によく私と遊んでいたが、その頃から物怖じしないところがあり、近所の子供たちと喧嘩をしても度胸が据わっていた。二〇〇〇（平成一二）年には、アントニオ猪木にスカウトされ、新日本プロレスに所属し世界の格闘技界で活躍するようになり日本で再会したが、私の車に乗るにも体を屈めなければならぬ程の巨体ながら幼かったころの人なつっこい笑顔は相変わらずだった。

北京オリンピック柔道金メダリストの石井慧が総合格闘技へ進み、二〇〇九年三月に Lyoto Machida を頼りベレンの町田道場（旧国士館ベレン支部武道館）で修行したことは有名な話である。

### 熱帯での稽古

一週間ほどして体も慣れたところでベレン支部武道館の空手道指導を開始した。武道館の指導体制は町田先

生、車田、伊井ともう一人現地雇いの指導員カルロスの四人で、月曜日から金曜日まで七時～八時の指導員稽古、九時～一〇時のレッスン、一六時～二〇時まで一時間ごとの四レッスンをシフトを組んで指導していた。毎週木曜日の午後は地方のカスタニールという町の公民館のような場所を借りて出張指導も行った。

毎朝七時からの時間は町田先生による指導員稽古で、ベレンの他流派道場の指導員も稽古に参加していた。熱帯地域での稽古は気温も湿度も高く、とにかく発汗がはげしく道着はもちろん帯からも汗が滴るほどだ。車田指導員は既に半年以上熱帯で稽古していて体が適応したのか平気な顔で黙々と体を動かしている。

毎回の指導員稽古が終わると疲労困憊した体を引きずり道場並びにある日系の食料品店で冷えたココナッツ椰子を買求めた。店主で日系人の瀬戸さんが大刀でココナッツの上部を切り開けてストローを添えてくれ、その場でいっきに飲み干すと体中にココナッツジュースがしみわたりホッと一息生き返る。着任した当初はとにかく暑さとの闘いで他のことはあまり考えられず体もいっきに痩せていった。

## アサイ

熱帯のベレンは普通に生活しているだけでも疲れるところ、稽古と指導でいきなりバテてしまった。町田先生からアサイを食べたら元気になると教えてもらい、早速食べたところ翌日には元気が出てきた。それからは疲労が重なりしんどい時は、近所でアサイを買って食べることにしていた。

アサイはアマゾン特有のヤシ科の果物で鉄分が多く含まれており、最近では日本でも評判になっている。直径2cmに満たない位の大きさと、殆どが種で回りが薄皮のブルーベリー色の実でアマゾン河流域の湿地帯に茂っている。妊婦が食べると胎児が成長し過ぎて出産出来なくなると云われているほど栄養価が高く、熱帯雨林の厳しい環境下で労働する現地の人たちには欠かせない食べ物である。

アサイは普通の商店では売られておらず、アサイ専門の店で午前中だけ売られていた。街のところどころにバ拉克小屋のような売店があるが必ず開店しているとは限らず開店しているときは店の前に四角の赤い旗が出ている。売店ではアサイの実を、中が攪拌機になっている

専用の機械に入れ、ゆつくりと回転させ薄皮が擦れ合いどろどろの液体となつて下に溜まるジュースを原液のままや水で薄めて売っている。奥地で暮らす現地の人達は大きなタライのような器にアサイの実をいれて手で実を擦り合わせアサイのジュースを作るらしい。買ってきたアサイを器に移し砂糖をくわえてスूपのようにして食べるかフアリーニヤというマンジョーカ芋で作つた粉を混ぜて食べる。水に薄めてジュースのようにして飲む人もいる。厳しい気候風土の環境下に与えられた天の恵みといえる果物アサイに感謝である。

## 武道館の増築工事

一九八二年当時、ベレン支部武道館は表通りに面した門から入ると建物正面入口に受付、建物左脇に真直ぐ裏庭までの路地があり、路地に見学者用の椅子が並べてあった。路地から入れるワンフロアの板の間道場があり奥にはシャワールームとトイレ、部屋が二室あり一室は女中部屋でもう一室が指導員部屋である。路地を突き当たると裏庭があり巻き藁が二本たててあった。

一九八三（昭和五八）年一月三〇日、日本でビザを取り直して再度着任したとき、武道館は前年暮れから増築

工事が始まっており、前年一時帰国前にアパートを引き払っていた私は工事の間、武道館から少し離れた旧市街にある日本人経営の鈴木旅館に宿泊して武道館に通うようになった。鈴木旅館は長年に亘るこの地での日本人への貢献により日本政府から表彰され、感謝状がサロンに飾ってあった。この旅館には前任の車田指導員も帰国前に二か月ほど道場の増築工事のため宿泊している。部屋は六台ほどのベッドが横一列に並んだ病院のような共同部屋で、他の客も宿泊しておりプライバシーは殆ど無い。

鈴木旅館では毎朝、「オ、ミラベル！」と地元新聞の名前を張り上げながら売り歩く子供の声で目が覚める。宿泊客の半分以上が日系人である。この時期の生活は、鈴木旅館から武道館へ朝稽古に行き、午前中のレッスンがある日はそのまま残り指導。昼はいったん旅館に戻り昼食後、また武道館へ戻るといふ日課であった。

旅館では夕方、食事の準備が出来ると宿泊客が食堂に集まり大きな食卓を囲む。港町ベレンの食卓は、刺身に始まり煮魚、焼き魚、揚げ魚と魚三昧である。日本から移民として渡ってきた人が多く、特に独り身の男性が目立った。大学出たての日本の若者が珍しいのか、何かと話しかけてくれた。それぞれの人がいるいるな思いで日

本から地球の裏側に渡ってこられ、成功した人、農業がうまくいかず都会へ流れてきた人など戦前戦後の日本からの移民の人達の生き様を垣間見ることが出来た。

四月か五月頃武道館の増築工事も終り、一階奥にあった二部屋、シャワー室、裏庭までをつぶして板の間道場を拡張し、二階には町田先生の住居の他に指導員宿泊室が二室、トレーニングルーム、シャワー室、トイレ等を新設した。私は鈴木旅館を引き払い武道館二階に新設された指導員宿泊室に入った。

港にはベロ・ペーズという野外市場があり、食べ物から日用品、怪しげなものまで何でも売っていた。ある日散策していると市場の奥で小さな猿が私の目にとまりすぐに気に入った。シャツの胸ポケットに入ってしまう位の小さな焦げ茶色の猿で道場生の人気者となり、一人暮らしの私の心も和ませてくれた。外に出るときは肩にのせたりポケットにいれたりして可愛がっていたが、素人の私には飼育は難しく、いつのまにか逃げてしまった。

### 稽古仲間

一九八二年一二月、車田指導員が帰国した後、練習生への指導は町田先生、伊井、カルロスの三人でシフトを

組んで行っていた。カルロスは年齢三〇代中頃、身長一八〇cmくらい、褐色の肌をもち、がっちりした体格で空手道の指導を職業としていた。

私がベレン支部に赴任し、指導を開始したころ、私とカルロスはコミュニケーションがうまくとれていなかったが、ある日の稽古をきっかけに心を通わせることが出来るようになった。その日の夕方は、練習生が多く、カルロスが担当するレッスンに私が補助でつき、練習生と一緒に私も汗を流していた。当時、道場は多くの練習生や見学者で活況であった。増築前の道場は一レッスンに練習生が三〇人も来ると道場は一杯で全員揃つての移動、基本などは隣と接触しないように気を使っていた。

稽古の後半に二人ずつ向かい合い自由組手が始まり、何順目かに私とカルロスが向かい合い拳を合わせる事となった。カルロスは馬力があり組手稽古で向かい合うと、その力強い技に押し込まれることも多々あった。前任者の車田指導員は五本組手でカルロスの前蹴りを受け損ない右手を骨折したこともあり、基本稽古でも油断は出来なかった。

自由組手が始まって暫くは互いに様子をみながら技を出していたが、カルロスが背後の練習生に気をとられた瞬間、私の上段回し蹴りが彼の左側頭部をとらえた。彼



1983年4月 ベレン支部武道館増築後の空手道大会（左手前よりカルロス指導員、筆者）

の形相が変わり次の瞬間、右の肘打ちを私の頭部に打ち込んできた。私は蹴り技を繰り出した後、連続した逆突きでカルロスの懐に入っており、カルロスの肘打ちは技がつまり肘の先端ではなく小手の部分が私の頭部に当たった。続けて左の肘打ちが打ち込まれてきたので体を相手にあずけてかわし、そのままつかみ合いとなり、もつれて互いに倒れこんでしまった。互いに起き上がったが、回りの練習生たちは指導員同士の組手に注目し、動きを止めてしまっていたのでカルロスは組手稽古を終わらせ、整列させ稽古を終了させた。

その日、練習生が全員帰り、着替えをしている時、カルロスが私に話しかけてきた。稽古中に蹴り技を頭部に受け冷静さを失ってしまったことを反省していると、私に打ち明けてきたのだ。ポルトガル語が不十分な私に理解出来るようにゆっくりと話すカルロスの態度に誠意を感じ、この時から私とカルロスは互いに信頼関係を築けたと思っている。

肘打ちという技は現在の空手道の試合では有効技としては認められず、普段の稽古においてもコントロールが難しく危険な技であるため稽古以外で使うことは少ない。しかし、反射的にこの様な技を繰り出してくるといふのは、空手道をより実戦的にとらえ稽古のなかで身に

つけてきていることの現れである。世界的に競技としての空手道が広まる中、この地では武術としての空手道が根強く息づいていることを強く感じた。

巻き藁一〇〇本突きを始めたのもこの頃である。拳頭の皮が破れ、拳に手拭いを巻いて巻き藁を叩き続けたのも、地力を高める必要性を教えてくれた稽古仲間のカルロスがいたからである。

## 銃社会

ブラジルでは条件を満たせば国民は銃を携行所持できるということは聞いていたが、それがどのような社会を意味するかまでは全く実感としては捉えていなかった。

ベレンに着任して間もない一九八二年八月頃、指導を終え剣道師範の山科守先生と日本食レストラン「博多」で夕食をともししていた時のことである。店の奥にあるカウンター席で山科先生とビールを飲んで雑談をしていると、入口近くのテーブル席にいたグループが口論を始めた。大きな声を出していたので注目していたところ、一人の男が店の外に出て暫くすると何かを振りかざして戻ってきたのである。そのグループから悲鳴が聞こえると同時に店内にいた客の殆どはテーブルの下や調理場へ

姿を隠し、山科先生と私だけがカウンターに腰掛けていた。

私は何か考えがあつて逃げなかったのではなく、入口のほうで何が起こっているのか理解出来ていなかったのである。しかし、一緒にいた山科先生は何が起きていますか理解しており、私に男が銃を持っていると教えてくれた。それでも私は動こうとしなかった。横にいた山科先生がまったく落ち着いた様子で椅子に座っていたからである。男は銃を持ち怒鳴り続けていたが、おもむろに山科先生は立ち上がって平然とその男の前へ進み出た。何か話している様子であつたが、暫くすると男は銃を下に向け入口から出て行った。

ただ啞然として眺めていた私は戻ってきた先生に「大丈夫ですか？」と尋ねると、「ん、本気で撃とうとする者はあるんなに銃を振りかざしたりしないものだよ、脅しで振り回していただけだ」と事も無げに言われたのだった。先生のとつた行動の是非はともかく、銃をもつ相手に素手で向かい合い、事を片付けてしまった先生のその胆力には驚かされた。

この後、いろいろなところで銃社会の現実と向き合うこととなる。ベレンからサンパウロへ勤務が異動した後、サンパウロ支部武道体育館で合宿を行った際、食堂

でミーティングをしていた時に何の弾みか銃の話題となり、参加者各自の車や合宿バッグから銃が集まり、食堂の机の上に一〇丁位の銃が並んだ時には、市民が普通に銃を携行している事に正直驚かされた。

また、郊外の国道を車で移動していた時、前を走っていた友人の車が行きずりの車に抜かれたのをきっかけに抜きあいが始まり、相手の車が前に出たところで路肩に止まれと合図をしてきたようでも友人も路肩に停車した。

私も何か嫌な予感でしたが仕方なく後方に停車して様子を伺うと、相手側の車から銃を持った男が降りてきて車の窓越しに友人の頭に銃を突きつけた。時間にして数分だと思うが友人は無抵抗でやり過ごし、運よく何事も無く相手の車は走り去ったという出来事があった。

さらに、サンパウロのリベルダーデという日本人街にあるブラジル日本文化福祉協会ビルの角にある公衆電話で通話をしているときに、背後からいきなり二人組に脇腹に銃を突きつけられた事があった。ホールドアップで銃を突きつけたまま背後からGパン後ろポケットの財布を抜き取り走り去って行った。ブラジルの公衆電話は頭が隠れる程度の笠のようなものがあるだけで、通話に集中していると体が無防備になる。この出来事以降、外出先では路上の公衆電話を使うことはなくなった。人の家を

訪ねるときは遠くから手を叩いて近づく合図をする、いきなり近づくとは発砲される危険があるからだ。ブラジルではお互いが銃を所持している可能性があるため、日頃からの危機管理意識は日本にいる頃とは全く異なった。

## ブラジルの国技サッカー

私がベレンに赴任した一九八二年はサッカーワールドカップ・スペイン大会（イタリア優勝）の年で私が着任する四日まえに開催されたばかりでブラジル国内はまさにサッカー一色。街中の道路、壁にはブラジル国旗が描かれ、家の周りや電線には紙製の国旗が飾られ、ブラジルを鼓舞する音楽がどの街角からも流れていた。ブラジルの試合がある日は誰もがテレビ観戦するため商店、会社、役所までも開店休業状態で、街頭には人が全くいなくなる。ブラジルが試合に勝つと街全体がカーニバル状態となり大きなブラジル国旗を振り回す車と音楽が街中にあふれ、夜半まで騒ぎ通しとなる。

この大会で優勝したイタリアチームとブラジルが対戦した日、私はテレビもラジオもないアパートで、近所から聞こえてくる実況放送を聴きながら窓の外を眺めていた。実況放送で流れてくるポルトガル語の内容は理解出

来なかったが、ブラジルに点が入ると街中に歓声が湧き起ると同時に花火と爆竹が鳴り響き、逆に点を取られると彼方此方から大きな悲鳴と叫び声が聞こえるので実況の内容は分からなくても点数だけは分かった。このワールドカップでのブラジル代表は、後に日本でも活躍したジーコをはじめ歴代最高のチームと呼ばれていたが、このイタリア戦で敗れてしまった。

## カランゲージョとタカカ

武道館前のバス通りをはさんだ真向かいにはレストラ  
ンがあり稽古の後に生徒たちがビールを飲んでた。誘  
われることもあったが仕事場である武道館の真ん前で酔  
う気にはなれず一、二杯付き合う程度にしていた。

休日の昼はセルピーニャ（ビール）を飲みながらカラ  
ンゲージョ（泥カニ）を食べるのが楽しみであった。日  
本で食べる淡白な蟹と違い独特な味わいがある。私はヘ  
イ・ド・カランゲージョ（カニの王様）という店が好き  
で通っていた。作家の開高健さんもその著作「オーパー」  
で紹介しているカニの専門店である。

店内には古ぼけた作業台のような四人掛けの木製机が  
並んでおり、注文すると茹でた熱々のカランゲージョが

丸ごと机の上に無造作に盛られ、木の棒を使い直接机の  
上で殻を叩き割り指や歯を使ってかぶりつくのである。

ビザの切替えて日本に帰国する晩、空港へ行く前に山  
科先生の家でカランゲージョを食べることにになり、市場  
で買ってからタクシーで先生の家へ戻る途中で、カラン  
ゲージョを結んであった紐が切れて二〇匹くらいの元気  
なカランゲージョがタクシーの中で逃げ出し、車の中で  
あっちこっち挟まれながらカランゲージョを追いかけた  
のは懐かしい思い出である。

タカカとは街角の屋台で売られているインディオから  
伝わる伝統料理である。

街角でよくみかけていたが、屋台で売られている変  
わった食べものだったのでなかなか手をだせなかったが、  
ある日思いきって注文してみた。

マンジオッカという芋を絞ったトウクピーという黄色  
い汁にゴマという同じくマンジョーカで作ったドロっと  
した澱粉を入れ、噛むと口の中が痺れるジャンプーとい  
葉っぱと干しエビを加えたスーブのような食べ物。木の  
実をくり抜いて作ったお椀のような容器に入れてすすり  
ながら食べる。好みてピメタ・ド・シエイロという香辛  
料を加える。最後に何か調味料を入れていたので瓶を見  
たら「AIINOMOTO」と書いてあったので思わず笑っ

た。しかし、この食べ物がやたらと後を引き、食べたくなる。しかし、この食べ物がやたらと後を引き、食べたくなる。となると屋台の夜鳴きラーメンを探すように街に出たこともあった。多分、痺れる葉っぱや香辛料に習慣性があるのではないかと思う。

## マラジヨール島

武道館の増築工事はサンパウロ武道体育館と同じ戸田建設が請負っており、サンパウロから来た日系建築士のSさんが担当していた。ある日、仲良くしていたSさんとアマゾン川のみえるレストランでランチをしていた時、河のはるか向こうにかすかに岸が見えており話に聞いたマラジヨール島かと思いい、「さすがにアマゾン川は大きいな」といったところ、あの岸はアマゾン川河口の中央に位置するマラジヨール島との間にある多くの小島の一つだと教えてもらい、アマゾンの大きさに驚くと同時に、マラジヨール島に大きな興味を抱いた。アマゾン川の河口幅は最大三六〇kmといわれ、マラジヨール島はその中州にある島で面積は九州より広く、日本人の感覚からは桁違いの規模である。

その後、休暇をとってSさんとマラジヨール島へ遊びに行くことになった。出航当日、港のフェリー乗り場は多

くの人でごった返しており、出航時間が過ぎてもなかなか出航しない。どうみても満員なのに乗船は続いており、定員数以上の切符を販売しているようだった。前年、アマゾン川で観光フェリーが定員を超過して出航し途中沈没して二〇〇人以上が肉食魚の餌食になったニュースが頭をかすめた。船内は押すな押すなの大混雑で、しまいにフェリー二階のデッキから一人足を踏み外して転落し運び出される騒ぎが起きたりしたが、なんとか遅れて出航、三時間くらいでマラジヨール島へ着いた。

Sさんの発案で、私たちはホテルには入らず奥地の民家に泊めてもらうことにしていた。土で造られた本当にシンプルな民家だったが本当のマラジヨールを感じる事が出来たと思う。ベッドはなくハンモックを吊るして寝たが、蚊が多いのはまいった。

朝は家の人達と一緒に朝食をとり、その後ゆっくりと島を回った。民家の近くにはマンゴの樹がいつぱいで、あたり一面に実を落としており、採る人もいないのか、野豚があちこちで実を食べていた。昼間は農場へ行きパツファローや馬に乗ったりして過ごした。夕方、宿泊した民家の裏の野原に出て仰向けに寝そべり夜空を見上げた時、辺り一面人工の明かりが全く無く、広がる草原の地平線から星が上がってくる満天の星空は、今でも

脳裏に焼きつき忘れることが出来ない。

## サンパウロへ

ベレンでの生活も徐々に慣れてきた頃、一九八二年七月二五日のサンパウロ支部武道体育館落成式で日本からの国士館訪問団（第六次）と合流するように指示を受け、ベレンからサンパウロへ向かった。サンパウロ到着後、一旦サンパウロ武道体育館のあるサンパウロ支部に着任した。

サンパウロ支部は国士館が現地に設置したブラジル国国士館大学協会 (SOCIEDADE KOKUSHIKAN DA GAKU DO BRASIL 一九八〇年四月二九日ブラジル国認可) を実体とする組織であり、柳森優理事長、サムエル吉田理事（弁護士）、佐々木康之理事の責任体制で運営管理されていた。

その後、サンパウロ市内で柴田梵天総長を団長とする国士館訪問団と合流し、私はとりあえずリベルダーデ区の日本人街にある万里ホテルに宿泊した。このとき、空手道チームと久々の再会をし、その時に CEPEUSP の空手道を指導している佐々木康之先生に初めて紹介された。

佐々木先生は、支部の設立から運営にご協力頂いた先生であり、私にとってはブラジル赴任生活を通じ公私ともに最も関係の深い友人となった。佐々木先生は幼いころに両親と共にブラジルへ渡り、日本人指導者から空手道を学び、USP卒業後、USP体育教官として就職している。空手道の流派林立する中、ベレンの町田先生と共にブラジルでの松濤館流代表者として国士館のブラジルでの活動を支えて頂いた。先生は細身の体ながら力強い技を持ち現役時代はプロレスラーとの他流試合で勝利するなど実戦派の猛者として知られた。

国士館訪問団はサンパウロでの武道体育館落成式を終えた後、ブラジリアを経由してベレンへ回り演武会、大会を開催した後に日本へ帰国した。私は国士館訪問団と共に行動し、ベレン空港で見送った後、ベレン支部の道場で足かけ一年半の空手道指導後、後任の空手道指導員飯田隆男と交代しサンパウロへ移動することとなる。

この年一九八三年七月に日本の国士館で当時の理事が学内で刺殺されるという大事件が起きた。この事件を機に国士館は学園の運営体制が変わり、海外事業も見直され徐々に縮小されていく事になる。

一九八三年一月、私はベレン支部からサンパウロ支部へ異動。支部内の職員用宿泊施設D1に入り、支部の



サンパウロ支部全景

(右上方に武道体育館とA池、右中央にB地区宿泊施設とB池、左上方にC・D地区を望む)

運営・管理業務に当たった。この当時、支部では須藤磐主事のもと、長谷轟、神戸洋一、相田勉、三嶋邦裕、川口雄大、小原政信、そして私が、時期は前後しながら日本から赴任し支部に常駐勤務していた。後に倉田幹雄が現地で専任職員として採用され加わった。三島邦裕は後に、サンパウロを離れポルトアレグレ市へ剣道指導員として派遣されている。川口雄大も後にベレン支部へ空手道指導員として派遣された。

サンパウロ市内では右田重昭、鳥飼利行、岩崎雅仁がUSPと剣道連盟等で剣道指導、中野雅之がUSPと柔道連盟等で柔道指導、細田三三、五百部浩一がUSPほかサッカークラブ等でサッカー研修、三雲千賀子、山口慶司がUSPで新体操指導、上地康夫はバルゼン・グラнде・パウリスタ市の日本語学校で剣道指導というように活動しており、当初、月に一度くらいサンパウロ支部武道体育館に集まり支部会を開いていた。それ以外に峯経治、鈴木輝一、苔米地示路、櫻田博、鷹取寛行、本藤直浩、薬師寺幸、野村加奈子がそれぞれジャカレイ日本語学校、松下サンジョゼ補習校、クリチーバ日本語教室等へ日本語教師として赴任していた。

## サンパウロ支部

サンパウロ支部はサンパウロ市の中心からラッポーズ・タバレス街道へ入り、四五km地点のバルゼン・グラデ・パウリスト市を左折し、パンデイランテス街道へ入り、三km進んだ四八km地点のバス停を右折し、舗装されていないカルモ街道を五kmほど進んだ回りを農場や別荘地に囲まれた場所にあった。道が空いていればサンパウロの中心から車で一時間半くらいの距離であろうか。

カルモ街道は舗装されていない土道で雨が降るとぬかるみ、車の通行は困難を極めることとなり支部を運営していた全期間にわたり大きな障害となった。雨が降ると途中の小川が氾濫し、一時車の通行が出来なくなったり、途中の坂道がぬかるみで普通の車では通行出来なくなることもあり、そのような時は陸の孤島のような状態となる。

サンパウロ支部の所在地はサンパウロ州サンロッケ市カルモ区イタコロミー農場五番で土地面積は五九万一三四三㎡、敷地内は四地区に分かれておりA B C D地区と呼び管理していた。

カルモ街道沿いに正門があり武道体育館まで一本の道

が敷地内を貫いていた。正門を入ると最初に広々とした芝生の広がるD地区、下り坂を下りきると左手にシユラスコ施設や遊戯施設がある。D地区を過ぎるとC地区に入り左手にC池、右手に丘、さらに進むと左手にB池があるB地区、突き当たりを左折して少し上り坂を上がるとA地区で、左右に丘が広がり、武道体育館前で道は行き止まりとなり、武道体育館裏手にはA池が佇んでいた。

D地区には支部職員用住居D1があり一階建ての4LDKで柴田総長用の部屋、来客用の部屋、須藤磐主事の部屋、支部職員用の部屋と大きな居間があった。外にはプールがあり広々とした芝生の庭が広がっており前の所有者が別荘として建てたものであった。

C地区にはC池と道を挟んだ向い側に日本から来た支部職員のための宿泊施設C1と食堂が作られ、日本から派遣されて来る支部職員と現地採用の日本人料理人が住み込んだ。C1の裏手には一〇本以上の柿の木が茂っていた。

B地区には合宿用宿泊施設に改築した宿舎B1があり、支部施設を使った合宿利用時の宿泊所となった。四部屋に二段ベッドが合計一二台備え付けられ二四人が宿泊出来、シャワー室・トイレ・食堂・台所があった。B

地区には他にも二段ベットだけを設備した宿泊所B3があり三〇名の宿泊が出来た。B1の裏手を上がって行くと日系人の使用人ネルソンと家族が住む住居があった。専任料理人が住込みで雇われるまで支部職員は使用人ネルソンの妻に内々の契約で昼食と夕食を作ってもらいネルソンの家で食事をしていた。

A地区には武道体育館と体育館裏手に支部職員用住居A1があった。A1は3LDKで、各支部職員が入れ替わりで宿泊した。

## 使用人

支部には地区ごとに使用人家族が四家族住んでおり、芝生・道路整備・建物の補修等の作業を行っていた。使用人達は陽が昇る前には自宅の鶏や畑の世話をし、七時ころには作業に入っていた。午前中に一回休憩をとり、昼休みは昼食前に池で釣りなどをして昼食を入れて二時間くらい休憩する。午後の作業が終わると釣りをしたり狩りに出かけたりして、夕食後暗くなると寝るという太陽の動きに合わせた生活をしている。

この地域にはいろいろな動物が棲息し、支部敷地内を出入りしており、ときどき使用人たちは仕事が終わると

狩りに出かけていた。使用人たちは年に数回、休日を替ってカピバラを狩りに出る。子豚くらいの大きさでネズミ科に属するという。彼らにとつての狩りは商売目的ではなく生活の一部となっており、食用は勿論、毛皮の利用から煮込んで摂った油は特効薬として家で保存され、塗り薬、飲み薬として重宝される。一度、使用人頭マニエルの家の前で大きな鍋でカピバラを煮込んでいるところを見た事がある。大体このカピバラの油で作った薬で何でも治してしまうようで、彼らは滅多なことでは医者に行かない。

しかしある時、マニエルが具合が悪く医者に行きたいので車を出して欲しいという。連れて行った先は普通の民家で、表で車を停めて待っていると三〇分位して出てきたが、体中から異様な臭いがしており、どうやら卵と何かを混ぜたものを背中に塗られお祈りを受けたようで、一週間体を洗ってはいけないという。その後、一週間くらいで体は治ったようでも有難がっていたが、私には自然治癒しただけのように思えた。

そんな彼らと蛙を狩りに行ったことがある。C地区とB地区の境に小さな沼地があり夕方近くを通るといつも蛙の啼き声が聞こえる。ある時マニエルがその蛙はハンという食用蛙だと教えてくれた。そこである晩、マニエ

ルを誘ってハンを狩りに出かけることにした。竹で作った小さな銚のような道具と懐中電灯を持ち、暗くなつてから沼地に入るといつもの啼き声が聞えてくる。マニエルは懐中電灯をバツと蛙に照らすと目眩しの効果が一瞬うごかなくなり、その瞬間に銚で一突きである。何匹が獲りマニエルが慣れた手つきでさばき、皮を剥ぎ粉をまぶし、油で素揚げにしてくれた。そのみてくれとは正反對にフランスでの高級料理のような上品な食感と味で絶品であった。

### サンパウロ支部での指導業務

翌年の一九八四（昭和五九）年にサンパウロ学生会（一九四九年社団法人としてブラジル政府認可）の運営するアルモニア学園から空手道の指導依頼が寄せられ、週二回サンパウロのサンベルナルド・ド・カンポ市にある同学園へ指導に行く事となった。

この頃、支部では少しでも採算性を上げるため支部施設の有効活用を最優先課題として検討を重ね、外部の団体に施設を貸し出し施設使用料として収益を上げる事と、武道体育館で空手道・剣道を指導し月謝を徴収する事などを実施した。生徒は主に地元バルゼン・グラン

デ・パウリスト市の住民で、約八kmの道程を週三回通ってきてくれた。支部での空手道と剣道の指導はその後、指導職員が日本へ転勤帰国するまで一〇年以上続いた。その間、日本から四人の空手道師範を講師として招き、全伯から参加者を募り、支部内宿泊施設と武道体育館を使い、支部主催の空手道講習会及び空手道大会を四回開催した。剣道も同様の講習会・大会を開催している。

支部の活性化と少しでも収益を上げるため、ベレン支部の施設売却益をサンパウロ支部へ再投資し武道体育館二階にトレーニング機器を導入してウエイトトレーニング、ボディビル、エアロビクス等を合わせた教室を開始し、サンパウロでジムに通い指導教本を取り寄せ、見様見真似で指導に取り組んだ。また、武道体育館にあったレクリエーション用具のバドミントンセットをヒントに数組のバドミントンラケットを購入し、武道体育館にあったバレーボールネットを使ってエアロビクスに来ていた空手道生徒の親たちに遊びでやってみてもらったところ評判が伝わり人気となったことから、正式にバドミントンクラブとして発足させ月謝制とした。正規規格のバドミントンボールとネットを特注で作り、サンパウロのCPBというバドミントンクラブに入会し指導を受け、その内容を受け売りで、そのまま支部で指導した。国士館バド



1984年9月9日 第1回国士館大学サンパウロ支部空手道大会

ミントンクラブとして連盟に登録し、最盛期には会員数も四〇名を数え、武道体育館いっぱい、四面の正規コートを作り、選手からは後にサンパウロのクラブに移籍後、ブラジル選手権で優勝する選手まで輩出した。連盟公認の年間バドミントントーナメントに国士館カップが加わり、支部武道体育館にサンパウロ州各市からの代表クラブを迎え開催するまでになった。

このバドミントンを通じて一人のブラジル人Y氏から、私は大きな影響を受けることとなった。Y氏は医師を職業とし、CPBというバドミントンクラブの役員であり、私が支部でバドミントンクラブを開設する為にCPBに入会し練習を重ねていた時、バドミントンの技術からクラブの運営方法にいたるまで親身に指導してくれた友人であった。支部バドミントンクラブの設立から二年くらい経ち、会員数も毎月三〇人〜四〇人前後で推移するようになりクラブの運営も軌道に乗っていたある日、私はY氏にこれまでの協力を謝意を表すと同時にお礼をしたいと申し出た。この時Y氏は、感謝の気持ちは私にはなく他の人や社会に向けてくださいとお礼の申し出を辞退された。誰かから受けた恩を直接その人に返すのではなく別の人、社会に送るといふY氏の考え方には私は静かな感動を覚えた。この日以来、今日に至るま

で、このY氏の教えは私の課題となっている。

## 本場のシユラスコ

アルゼンチンのエルドラード市で南米親善バドミントン大会があり、国士館からも数人ブラジル代表で選ばれており、国士館バドミントンクラブの仲間達と一緒に連盟のツアーに参加したことがあった。大会最終日にはシユラスコパーティーがあり大いに盛り上がった。

ブラジル同様牛肉生産では世界的に有名なアルゼンチン、その食べ方も豪快である。その日は朝からシユラスコパーティーの準備で焼き場周辺は大忙しであった。直径三〜四cm、長さ一五〇cm位の生木の枝が一〇〇本以上用意され、女性たちがナイフで枝の皮を削いでいる。焼き場付近には五メートル四方くらいのビニールシートが敷かれており、そこへ荷台に牛肉を積んだトラックが入ってくると、荷台が上がりシートの上にザーと肉が下ろされた。その量たるや何百キロ？見当もつかない。その肉を朝から用意した木の枝で串刺しにする。焼き場はレンガ造りの高さ八〇cm位、幅は一五〇cm位の串刺しがセットできる幅で二列あり、長さは二〇mくらいという規模で既に炭が敷いてあった。



シユラスコパーティーの準備を手伝う筆者

男たちが炭火を調整し始め、辺りに煙が立ち込めてくると串刺しの肉がセットされ、焼き場いっばい肉で埋め尽くされた眺めはまさに壮观であった。その後、焼き上がった肉は会場へ運ばれビールと共に平らげられてしまった。南米での焼肉はしつかりした歯ごたえと岩塩だけの味付けという豪快さが持ち味である。戦績はさておき、シユラスコパーティーと共に忘れられない南米大会であった。

## 永住権

渡伯後何年目だったか、私のビザは三か月を更新して六か月の滞在が認められる観光ビザから、一年を更新して二年間滞在できるテンポラリビザへと変わっていた。

当初から心の内では永住覚悟の赴任だったので永住権取得関連の情報収集には気を配っていた。

何回目かのテンポラリビザ更新のとき、いつも手続きをしてくれる弁護士が「今年は不法滞在者に永住ビザを出す年だ」という。ブラジルでは正規の入国手続きを経ずに密入国した不法滞在者が多く、パスポートもIDも無く正規の職に就く事も出来ずに地下に潜り犯罪社会を構成している。政府はこのような不法滞在者に対し一〇

年に一度、永住ビザを発給して基本的権利を与え正規の職に就かせ、犯罪社会を少しでも減らそうとしている。

今年はその年だから、ビザの更新期限が来ても更新手続きをせずに不法滞在者になれば永住ビザを貰えるはずという。さすがに考えてしまった。日本の国士館にこんな説明は通りそうもない。結局正規の更新手続きをし、並行して永住ビザの申請もした。案の定、数か月後に不法滞在者に対し永住ビザが発給される事となった。私も弁護士を通じて申請を出すと、法務局から「あなたは不法滞在者ではなく正規の更新手続きをしているので出せない」という。この国での生き方をまた一つ勉強した。

## 小学校入学

ベレン支部でもそうだったが、サンパウロ支部でも生徒は殆んどブラジル人で日本語は通じないので、拙いポルトガル語を駆使して指導していた。しかし自己流では限界を感じ始めていた頃、支部主催の空手道大会を開催した際に地元バルゼン・グランデ・パウリスタ市の市議会議員で地元小学校校長の村山シゲアキ氏を招待したことから村山校長と親しくなり、ある時小学校を訪ね入学を願ひ出た。村山校長は驚かれたが快く許可を出してく

ださり、その後何かと支援していただいた。業務の合間を縫って通学し何とかお情けで小学校卒業資格を取得した。更には上級学校へ進みたいと相談したところサンパウロ市にある、日本でいえば中学校にあたる学校の速成コースを紹介していただき紹介状を書いてくれた。アルモニア学園に空手道指導に赴く前後や、その他何かと都合をつけて学校に通い、何とかコースを修了する事が出来た。おかげでポルトガル語をはじめブラジルの、歴史、社会、科学、その他の基礎的な学習をする事が出来た事は勿論であるが、小さな子供たちに冷やかされ、かわかれ冷や汗をかきながら勉強したことは忘れられない思い出である。

### ブラジル空手道事情

ブラジルの空手道は、日本から渡った各流派所属の日本人指導員によって広められ、日本人指導員主導の各流派団体組織が作られてきた。しかし、一九七〇年代後半から日本人に学んだブラジル人の弟子たちが独立して各組織の主導権を持つようになり、唯一政府から認められる公式の組織も弟子であったブラジル人空手家が主導権を持つこととなる。

日本で生まれた空手道が世界で広まり、それぞれの国で組織が成熟する過程において、現地の弟子たちへバトンが引き継がれていく段階で既得権益を失うこととなる日本人指導者と、新たに権益を得ることとなる現地人指導者との間に、しばしば確執が生まれることとなる。同様の流れは一九八〇年代のブラジルでも顕在化していた。また別の問題として、空手道が普及するにつれて起る空手道のスポーツ化に対し、一部の日本人指導者たちは伝統的空手道の存続をはかり、独自の思想・技術体系に則った組織作りも行っていた。

そのような事情のなか、国士館はスポーツと伝統武道の両面を重視した人格陶冶に結びつく空手道を模索することとなる。

### ブラジルの経済と生活

私が赴任した一九八二年当時、ブラジルは国際社会に対し債務返済が不能となりモラトリアムを発表し、その後IMFによる国家経済への介入、国際銀行団との債務返済繰り延べ交渉と国中が混乱し、マラリア熱に侵されたようにインフレ熱に侵されていた。一九九〇（平成二）年には年間インフレ率は生活必需品では年間

五〇〇〇%を超えていたといわれ、国民生活は限界に達していたように思われた。政府の発表する公式インフレ率はデータラメで、国は国民の信頼を失い、スーパーマーケットでは毎日のように価格が書き換えられ、映画館の料金が午前と午後で値上がりして書き換えられた時には最早これまでかと思つた。

現金を持っていると価値が下落して、指の間から現金が落ちて無くなつていくように感じられ、こうなると現金を持ち歩くものはいなくなり何をかうにも小切手を使うようになる。銀行口座を常に運用し、振り出した小切手の支払日にその金額だけ運用口座から普通口座に入れるという忙しい毎日である。それでも通貨の目減りが激しく、銀行で運用したり、闇ドルや中古車市場、その他庶民で出来る運用では、全てインフレの数字に勝てるものはなかった。

そのような状態の中、一九九〇年三月一五日、政府は突然一定額以上の銀行預金凍結を発表したのである。青天の霹靂とはまさにこのことで、国中が混乱の極みに達したことはいうまでもない。

数年後に凍結が解除された時、政策の失敗によりハイパーインフレーションが続き、預金者の手元に返された預金額は、実際のインフレ率とはかけ離れた政府発表の

公式インフレ率を基にして利子が計算されており、中間層の多くは財産を失い、企業倒産と多くの失業者を生み出す結果となつた。

## マチュピチュ

一九八三年一二月の末、リベルグデー区の日本人街に出かけた帰り、万里ホテルへ寄りいつものようにマネージャの千葉さんと世間話をしていた。万里ホテルは国士館訪問団で団体利用して以来馴染みにしており、リベルグデーにきた時にはレストランやロビーを利用していた。

ソファに座り何気なく壁の南米地図を眺めていると目に止まったのがペルーのマチュピチュである。以前から興味を持っていたところでもあり、せっかく南米に来ていたので足を伸ばそうという気が湧いてきた。

翌日から情報を集め、一二月三一日の朝には旅行カバンを背にブラジル内陸への基点となるルース駅の前に立っていた。何時間列車に揺られたのかはつきりとは憶えていないが、途中列車が故障しトレースラゴアスという駅で止まったまま動かなくなり、三時間くらいしたらとうとう列車から降ろされてしまった。この先のカン

ポグランドという駅までバスを用意するので乗ってくれという。カンポグランドといえは小野田寛郎さんが牧場を開いたことで聞いたことのある地名である。

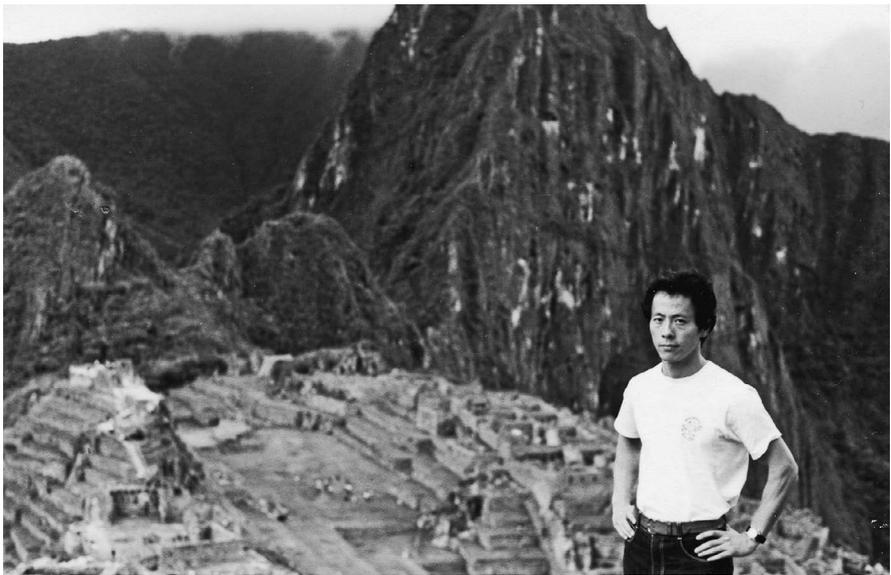
南半球の一二月は夏で、特にこの日は暑かった。全員エアコンも付いていないオンボロバスに乗り込み舗装されていない土道をカンポグランドへ向かった。

五台のバスが連なって走り土煙で前のバスがかすんで見える。あまりの暑さに窓を開けると土煙で体中砂だらけになった。

この辺りは見渡す限りの大草原で延々と景色は変わらない。三時間くらい走りカンポグランドに着くと列車が待っており、直ぐに乗り込みボリビアとの国境に向かった。既に夜になり辺りは真っ暗だったが湿地帯を走っているのは分かった。ブラジルとボリビアとにまたがる世界最大の湿原地帯といわれているパンタナールである。

いつまで走っても湿原で景色は全く変わらなく、いつの間にか眠っていると突然列車が止まり汽笛を上げた。

車掌が「Feliz ano novo (happy new year)」と声を上げながらワインと紙コップを持って車両を回って振舞っている。気さくなブラジル人は車内でワイワイと楽しんでおり、私も乾杯を受けいつの間にか身振り手振りで輪のなかで仲間に加わっていた。



1984年1月 マチュピチュにて

翌朝、終点のコロンバに着きタクシーで国境に向かったが何処が国境か分からない。運転手が、ここが国境だという素振りなので降りると、辺りには草むらの平原と平屋建ての建物が数軒あった。そこがホテルのようで、私がバスポートを見せるとハンコをおしてくれた。これで出入国手続きは完了?…。

この後、ボリビアのサンタクルスからラパスを経てア ندスのチチカカ湖をバスで周りペルーのプーノからクスコに着き、列車でマチュピチュへ登りインカの遺跡に辿り着くまでに片道一週間の旅であった。この間、置引きにあったり、高山病に罹ったり、騙されたり、素晴らしい出会いがあったり、と思いつきの尽きない旅ではあったがとも本稿には収まりそうもなく割愛させていただく。

## その後

一九八〇年四月二十九日、サンパウロ市に国士館サンパウロ支部が、同年六月三日、ベレン市に国士館ベレン支部がそれぞれブラジル国から認可を受け発足、途中一九八六（昭和六一）年三月三十一日の理事会決定によるサンパウロ支部とベレン支部の統廃合によりベレン支部

は閉鎖され、同支部資産は町田嘉三氏へ売却された。サンパウロ支部資産を引き継ぐ組織として学校法人国士館ブラジル支部 (FUNDAÇÃO ESCOLAR KOKUSHIKAN) が同年三月一九日ブラジル国から認可を受け発足。その後、理事会によるブラジル支部閉鎖決定により、一九九七（平成九）年同支部資産はブラジル日本文化福祉協会へ寄贈された。最盛期の一九八三（昭和五八）年には、二九人の専任教職員を派遣した国士館によるブラジルへの海外事業はここに幕を閉じた。

ブラジル日本文化福祉協会に寄贈された旧学校法人国士館ブラジル支部の広大な施設は、現在同協会により運営管理され、「国士館大学スポーツセンター」としてブラジル日系人社会の憩いの施設として活用されている。同協会ホームページに掲載されている同スポーツセンターの案内ページ (<http://www.bunkyo.org.br/ja-JP/centro-esportivo-kokushikan-daigaku-ja>) 〈アクセス：二〇一七年一月一三日〉を紹介し、本稿を閉じることとする。

## あとがき

赴任生活の実態を紹介することで国士館によるブラジ

国士館大学スポーツセンター



サンパウロ市から 51 キロ西方面に位置するサンロケ観光指定都市にある国士館大学スポーツセンターは、ブラジルと日本の交流のすばらしい光景をわたしたちに見せてくれる施設です。

日本の国士館大学によって設立されたスポーツセンターは、1997 年に文協に寄贈され、58 ヘクタールという広大な敷地の一部は、いまだに大西洋岸森林地帯に属する原生林で覆われています。自然に囲まれたスケールの大きな土地で多くの人たちが心地よい時間を過ごしています。

主な建造物は武道各種の稽古場として建てられた体育館ですが、その他にも、マレットゴルフ用のホールやテニスコートが設置されています。この国士館大学スポーツセンターを魅力的なものにするのはなんと言っても 400 本の桜の木々です。美しく咲き誇る満開のサクラを愛でるためにサンパウロ州南部の日系諸団体と共催する 7 月の桜祭りは、文協の主要行事の一つとなっています。桜祭りは毎年、1 万人を超える人たちで大変賑わいます。まだ一度も桜祭りに参加したことのない方、今年の桜祭りに是非お越しください！また大自然の中で癒されたい方も是非こちらまで足をお運びください。

場所：Rodovia SP-250, km 48, São Roque-SP

時間：月曜から土曜-9 時から 17 時

情報：(11)3208-1755 com Wilson ou patrimonio@bunkyo.org.br

ブラジル日本文化福祉協会ホームページより

ル海外事業の理解に繋がれば、との思いから国士館史資料室の求めに応じ筆を執った。

二〇代中頃から三〇代の終わりにかけた一三年間にわたるブラジル赴任生活を振り返ってみると、仕事上のこととは勿論、プライベートでも多くの出来事が思い起こされ、与えられたスペースにはとてもおさめることは出来なかつた。

この間、中南米に民主化運動が巻き起こりブラジルの政治経済は、一九八五（昭和六〇）年三月に二一年間に及ぶ軍事政権の終焉、一九八七（昭和六二）年二月対外国債務金利支払停止、一九八九（昭和六四）年一月大統領直接選挙、一九九〇年三月銀行預金凍結等、国民生活の大混乱が続き、五回におよぶ一〇〇〇分の一規模のデノミという経済金融台風が吹き荒れ、赴任生活も大変不安定なものとなった。

しかし、ブラジルはそのような状況を乗り越え、今日 BRICS を構成する大国となり、オリンピック・パラリンピックを開催するまでになった。リオパラリンピックでの報道でブラジルの人々が「ブラジルではバリアフリーのインフラ整備は不十分だから私たちがそれを補い助け合うんだ」という趣旨の発言が流れていた。

日本の社会はインフラ整備に頼るだけではなく、ブラ

ジルの人々のように人間性による社会づくりを模索する必要性があると思う。国士館は武道・スポーツ・文化交流を目的としてブラジルへ渡ったが、外国人が日本の武道を通じて探し求める人間性は、ハイテク社会の発展と共に、実は日本人自体が失いかけているのかもしれない。

犯罪が多発する反面、庶民による相互扶助社会が根付くブラジル。赴任生活を通じて豊かな人間性に触れることが出来た事は何にも代え難い経験だった。このような経験の機会を与えていただいた国士館と諸先生方、そしてブラジルの人たちに感謝を申し上げ本稿のあとがきとしたい。

本稿を書き上げるにあたり国士館とブラジルの関係情報の調査にご協力頂いた国士館史資料室と図書館・情報メディアセンターレファレンスの皆様方にお礼を申し上げます。

そして最後に、ブラジル赴任中から今日に至るまで私を支えてくれた妻と息子にこの場を借りて感謝を伝えたいと思います。

ムイト オブリガード！

刊行物紹介

『国士館百年史 史料編』

学校法人国士館では、国士館創立一〇〇周年記念事業の一環として『国士館百年史』の編纂を進めて参りました。そのうち、『国士館百年史 史料編』上・下の二冊を二〇一五年三月に刊行いたしました。

上は、国士館の創立から終戦までの時代を、下は、戦後から現在に至る時代における国士館の歴史に関する史料を厳選して収載した史料集です。各巻ともに史料講読の指標となる解題を付して、読者の便をはかっています。



● 目次構成

史料編 上

第一部 国士館の創立と発展

国士館の創立／中等教育機関の創設／高等教育機関の拡充と戦時下の学園／大民団と国士館／校舎配置図

史料編 下

第二部 戦後の再建から総合学園化

復興への取り組み／国士館大学の創設／総合大学化と教育環境の整備／中学校・高等学校の設置と発展

第三部 学園改革から創立一〇〇周年へ

学園改革と教育の発展／創立一〇〇周年に向けて

● 仕様 A5判（上縦組・下横組）／上製本

入手希望の方は左記までお問い合わせください。創立一〇〇周年記念事業募金へのご理解・ご協力を賜れば幸いです。

〒一五四―八五二五 東京都世田谷区世田谷四―二八―一

柴田会館二階

学校法人国士館 国士館史資料室

TEL 〇三―三四―一八一―二六九一

FAX 〇三―三四―一八一―二六九九

E-mail archives@kokushikan.ac.jp

国士館を支えた人々

## 大場 信續



大場信續

現在、私立大学の多くは、一般向け講座の開講や図書館を開放するなど地域住民との結びつきを積極的に図っている。目指すは地域に根差した、地域に愛される学校でありたいということ。総じて、地域に対して何らかの

浪江 健雄



役に立ちたいといったところであろうか。しかしながら、その地域住民の特性に合わせた教育を提供する、すなわち地域住民のための学校を創るということになると話は別である。それは、学校側と地域住民側との密なる協力体制が整ってこそ初めて実現するものであるゆえ、現実的には容易いものではない。しかるにそうした学校が、一九二六（大正一五）年四月、世田谷の地に創設された。国士館商業学校がそれである。そして初代校長に就任したのが大場信續（おおばのぶつぐ）であった。

本稿では、国士館商業学校で初代校長を務め、学校側と地域住民との協力体制を構築し、学校運営に手腕を揮った大場信續の実像と、国士館商業学校の成り立ちに迫ってみたい。

まずは、大場信續が国士館商業学校長になるまでの生

い立ちを、『大場家歴史 続』（大場家歴史編集委員会、一九八四年）に拠ってみていくこととする。

信續は、一八七九（明治一二）年一月四日、東京府荏原郡世田谷村二三六番地（現東京都世田谷区世田谷一丁目二九番一八号）に、父信愛、母以佐の長男として生まれた。大場家は、江戸時代、近江彦根藩世田谷領の代官を務めた家柄であり、数えて一四代であった。

ここで大場家の由緒についてみておきたい。世田谷の地は、江戸時代初期の一六三三（寛永一〇）年に、近江彦根藩の飛び地領（二三〇〇石）とされた。その理由は、当時の藩主井伊直孝が幕府の要職を務めており、そうした者へは便宜上江戸近くにも所領が与えられる慣例からであった。その後、江戸時代を通して世田谷は井伊家が領していた。ちなみに、世田谷の豪徳寺は、一六三三年に直孝が井伊家の菩提寺として伽藍を創建し整備した。寺号は直孝の戒名である「久昌院殿豪徳天英居士」による。こうして世田谷を治めることとなったものの、藩主自らが治めることは困難であったため、代役として代官がたてられた。その代官に任じられたのが大場家であった。大場家は江戸時代以前より在地しており、戦国期には小田原北条氏傘下の吉良氏に仕えていた。ところが、北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされ、吉良氏も

滅亡すると、野に下って帰農していた。しかし、世田谷の地が彦根藩領となった際、井伊家より召しだされ、武士身分に戻され、以後、明治維新に至るまで世田谷の地を治めることとなった。江戸時代の郡代および代官は広域支配をあずかることもあったが、世田谷領は極めて小規模であったこともあり、農民との接点が近く、代官所の掃除人足・風呂番・障子張替などの雑用は、役人ではなく領内の農民があたった。こうしたことから農民の実情も察しやすく、また、歴代の当主たちも自らを律し、農民からも尊敬の念を得られるよう努めていたことが、『大場家督心得』はじめ歴代代官が伝えた家訓などから読み取れる。

一八八三（明治一六）年、四歳となった信續は、世田谷村経堂在家村連合村立桜小学校に入学した。これは村の子供より二年早く、当時散見される例とはいえ、信續にそれだけの能力があつてのことだろう。第二学年からは赤坂小学校に移り、赤坂小学校高等科を卒業後、東京府立尋常中学校（現日比谷高等学校）、第一高等学校（現東京大学教養学部）へと進学した。五歳で小学校へ上がつてからの信續は、今も昔も困難なこのコースを順調に進んでいった。

このように順風満帆であつた信續に、第一高等学校在

学中の一八九九（明治三二）年、不幸が襲う。父信愛が亡くなったのである。信續は物心がつく頃から、父から上に立つ者としての薫陶を受けた。また、母や祖母からも歴代代官が伝えた家訓によって厳しく躰けられていた。したがって、ゆくゆくは第一四代を継ぐ心構えは出来ていたものの、直ちに父の跡を継ぎ、当主としての義務と責任を負って立たねばならなかった。

信續が戸主になった当時、大場家の主な収入源は、小作料を中心とする農業収入であったが、大きな所帯にはそれなりに出費も多い。そのうえ借金も背負っていた。しかしそのために先祖伝来の土地はたとえ僅かでも手放すことはしなかった。当時はまだ山林がかなりあったので、松や杉などを切り出して売り、借金返済に充て、急場を凌いでいった。

一九〇〇（明治三三）年四月、信續は第一高等学校から東京帝国大学農科大学（現東京大学農学部）農学科に進んだ。法科や工科ではなく、あえて農学科を選んだのは、父信愛の意志を継いで世田谷農家の指導者となり、村人と共に生きる覚悟からであろうか。

在学中の一九〇三（明治三六）年二月には結婚もしている。生涯の伴侶となったのは、神奈川県高津村上作延（現川崎市高津区上作延）の地主、三田正綱の長女琴子

である。信續二四歳、琴子一八歳であった。生涯を通して仲睦まじい夫婦であったという。また、同年七月にはめでたく東京帝国大学農科大学農学科を卒業するも、同年の日露開戦によって、一年志願兵に召集。近衛野砲兵聯隊留守隊にあつて日露戦役勤務に服したが、戦争の終息に伴って召集解除となった。

除隊後は想うところあつてか、再び学徒となった。学校は同じ東京帝国大学農科大学だったが、今度はそこに新しく設けられた耕地整理講習、後の農学部農業土木科の第一回生になったのである。在学期間はわずか一か年であったが、この再就学がきっかけとなり、以後、耕地整理ないし区画整理の先駆けとして活躍していくことになる。

このように率先意欲に燃え、次から次へと新しい学問と知識を身につけていくと、同時に村の青年たちのことも思いやられた。彼らのほとんどは貧しいがゆえ上級学校へ行けずにいるわけだが、何とかして彼らにも勉強の場を与えてやりたいと考えていたという。その手始めとして行ったのが、一九〇六（明治三九）年の夜間補習学校の開校であった。これは世田谷村の知識人として知られていた実相院の和尚佐々木義宣の協力も得て、とりあえず桜小学校の教室を借りて、週三日行った。元より産

業、農業実務教育が中心だったが、その他の学科も教えて、実業学校卒業に準ずる学力をつけさせようと努めた。この夜学は、一九一一年（明治四四）年に、世田谷村立桜農商補習学校が正式に発足するまで続いた。こうした信續の青年たちへの温かな眼差しが、後の国士館商業学校設立へと繋がっていったのである。

一九〇八年（明治四一）年一〇月、信續は大学の教授や先輩の推薦によって農商務省に入り、農商務技師に任じられた。当時は農業の合理化と増産のための耕地整理が国の急務であった。したがって、信續の仕事は、政府の命令に従い、都道府県庁へ出張して講習会を開き、または現場に臨んで実地指導をし、耕地整理の専門家を増やすことであった。その後、一九一三年（大正二）年四月には宮内省林野局に栄転する。またその一方、当局の了解を得て、地元に住原郡第一土地区画整理組合を創設、組合長に就任し、一九二四年（大正一三）年一〇月、組合設立の認可を受けた。早速全国に先駆け、現在の世田谷一、二、三、四丁目及び弦巻二、三丁目、若林、赤堤、上馬の一部にわたる地域の大規模な区画整理に着手した。この組合は多方面から注目をされたが、とくに全国に先駆けてメートル法を採用したことで脚光を浴びた。この整理事業の計画は、一九二一年（大正一〇）年四月のメー

ル法採用後早々のもので、一間をメートルに直した単位ではない純メートル単位など、今日でも十分に普及されているとはいえないものである。

一方で信續は、一九二〇年（大正九）年一二月に、相原永吉世田谷村長をはじめ、有志と図り、世田谷村の地主一六〇人の連署を添付した勝光院西線敷設に関する「電車線路延長願」を玉川電気鉄道株式会社に提出するなど率先して事に当たった。勝光院西線とは、現在の下高井戸から三軒茶屋までの東急世田谷線のことである。

また、一九二一年二月、一部には相談もしていた産業組合法による有限責任世田谷信用販売購買組合の設立案を発表した。信續は宮内省林野局に奉職していたが、公共事業のことであったので快諾された。また、地元有志からも是非にとの声が高かった。古くからの慣習で、信續の代になっても大場家へ金を借りに来る地元民が絶えず、その上永い間続いた惰性で、期日が来ても双方何もしないで放置しているのが、借金は増えるばかりという状態であった。そこで今後は一切組合を通しての貸借にしてその悪習を断ちたい、というのが見かねた有志たちの希望であったという。

また、時代の趨勢に眼を転ずると、大正末期の世田谷地域は、関東大震災以降、郊外への私鉄開通も相ま

て、従来の農耕地は住宅となり商家も増え、急速に市街地化が進んだ。そうした状況の中、地域では商業教育の必要性が高まりつつあった。

こうしたなか信續は、一九二四年、官界を去る決断をした。すなわち、これからは一介の民間人として地域の発展のために全てを捧げる覚悟を示すものであった。それまでも地域の発展に尽くすべく、官職では世田谷地域の区画整理に尽力し、その傍ら電車線路延長運動、そして地域経済発展の基盤となった世田谷信用販売購買組合の創設も実現させた。このように信續の関心は地域の問題全般にわたっていたが、純民間人となって最初に手掛けたものは教育事業であった。元来信續は、向学心の厚い青年に対して、進んで手を差し伸べ、引き上げてやる援助を惜しまなかった。書生として大場家に住み込ませ、学校に通わせるなど、信續の庇護、引き立てを蒙った青年は枚挙に暇がない。

こうしたなか国士館では、一九二五（大正一四）年三月三十一日、中学校令に基づく認可申請を行い、同年四月八日に設置認可を受け、国士館中学校を創設した。また、新築の中学校校舎などの施設を公共的に活用したいと考え、世田谷地域の青少年のための無償活用を提言する。これを受けた世田谷町長山崎四六の斡旋により、

一九二五年四月に農商補習夜間塾が開校された。ここで塾長に推されたのが信續であった。入学者数は二〇余名で、普通学と農業大意が講義された。前者を国士館の教員が分担し、後者は信續が担当した。

開講から約一年後、荏原郡長宮城栄三郎、目黒町長土生文之助などを中心に「組織ある中等程度の商業学校」の設立が希望され、世田谷町・駒沢町・松沢村・玉川村・目黒町・碑衾町の「荏原郡西部六か町村」と国士館の協議により商業学校の創設が図られた。やがて、学校の経営主体・財政負担は六か町村とし、校長を大場信續とすること、独立経営が不可能になった場合は国士館が経営の任にあたること、学校名を国士館商業学校とすること、国士館の校舎・施設を利用することなどが決定した。これを受けて、一九二六年二月五日に「実業学校令」に基づく認可申請を行い、同年三月四日に設置認可を受け、国士館商業学校が創設された。

以上の経緯を以て信續は国士館商業学校の校長に就任することになったのだが、当初から国士館を理解し、進んで校長の任に就いたわけではなかった。実のところ、初めはかなりいぶかしんでいたことが、信續が『国士館々報』二巻三号（一九二六年四月一日）に寄稿した「私が国士館を理解する迄」と題する一文（『国士館百年

史』史料編上、四六五（四七二頁）に記されている。まずは、当初思っていた国士館のイメージについて、

出来た当時の国士館の噂は、全く設立者の趣旨とは天地の差でありまして、なんでも壮士を養成するところだらうといふことに、附近の人々は噂をそのまゝ、肯定して怪しみもせなかつたのであります。従て誰も強いて近寄らうとせず、どちらかといへば敬して遠ざけるといふ主義で居たやうであります。

と述べている。しかし、国士館から農商補習夜間塾の講義依頼があり、実際に国士館を訪れ、学生と接するにしがたい「聞くと見るとは正反対」であつたとして、驚きを含めて次のように語っている。

元来石井君（筆者註―澄之助、国士館商業学校主事）が私を目掛けて補習学校に講義を受持つてくれと頼みにきた経路が未だに判らぬのであります。こんな縁故で、私が追々国士館に接近するの機会を得、その後時日を経過するに従つて、国士館内部のことも少しづつ、判るやうになつて見ると、この附近の人々の噂や、私が当初考へて居た国士館なるもの



1926（大正15）年2月2日 商業学校創立相談会  
（後列左より5人目が大場信續、6人目が柴田徳次郎）

とが、寧ろ正反対であるのに驚き且つ喜んだやうなわけであります。いかにも国士館の学生は破れ袴や破れ洋服で、決してきれいではありません。(中略) 国士館の学生のきれいでないのは、一に質実といふ主義から発足したものであるやうであります。現にこれは学生ばかりでなく、職員や役員達に至るまで同一であります。(中略) 私は附近の人々の風説や、自分一己の想像から、国士館といへば、壮士——豪傑——酒と、こんな風に聯想して、定めて酒呑童子のやうな人が多いだらうと思ふて居ましたのに、事実が全く反対なのに驚きもし、又感心もしたのであります。(中略) こんな風に眼や耳で、機会ある毎に国士館なるものが漸次理解さる、やうになりましたと共に、柴田館長やその他の諸君と接近する機会の度重なるに従ひ、国士館の精神方面に就ても、次第に理解がつきまして、理解すればするほど世間の想像と相反して、その精神たるや、至つて健全のものであり、又今日の時勢では、当にさうなくてはならぬものと痛感するやうになつたのであります。

また、信續の校長就任は国士館側も歓迎している。国

士館館長柴田徳次郎は、国士館支援者である麻生太吉へ商業学校創設の経緯を伝えた書簡(『国士館百年史』史料編上、四五六―四五七頁)のなかで「校長には宮内省農務課長農学士大場信續氏とて四十数代当世田谷の名家にて徳川時代の代官、現在も荏原郡一の大地主(五十三才)一寸野田翁(筆者註―卯太郎)の如き人物に御座候」と記している。

一九二六年四月、授業を開始した商業学校であったが、準備期間が短かつたこともあり、当初の生徒数は定員に満たず、また、生徒は職業に従事しながら学ぶために、休暇期間にも課題が生じた。そこで一九二六年六月一日に、前期・後期に入学可能な二期制の導入と長期休暇の短期化、選科生の設置などを骨子とした学則変更を申請した。

その後は時代の要請もあり、一九二七(昭和二)年二月一五日には、高等程度の学校などへの進学者が増加したことによる学科課程の改善や受験料の減額を主な要旨とした学則改正を申請している。さらに、一九二八(昭和三)年一二月には、青年訓練所規定第八条に基づく教練時間などの学科課程変更のため学則改正願を提出し、翌一九二九(昭和四)年一月一六日に認可を得た。これにより商業学校の卒業生は、徴兵猶予と在営年限短縮の



1940（昭和15）年頃 国士館商業学校・中学校校舎夜景

特典を得ることとなった。さらに、急増する就学希望者に対応するため、一九三二（昭和七）年一〇月二六日、修業年限を五年と改め、入学を尋常小学校卒業程度満一二歳に引き下げ、収容定員を五〇〇人とする学則改正願を申請し、同年一二月二七日に認可を得た。

このようにほぼ順調に歩みを進めていった商業学校は、一九三六（昭和一一）年に一〇周年を迎えた。それを記念して同年一〇月四日に商業学校主事関野直次の編集で『商業学校十年小史』が刊行された。巻頭の「祝辞」において、信続の学友で、東京帝国大学教授（農学博士）であり、世田谷区教育会長の佐藤寛次が、信続の人となりについて述べている。

氏は豊富な常識を有つた円満なる人格者であり、又一郷の信望を集めた郷土の先輩であることは、私が特に茲に贅するまでもないことであるが、就中一言したいのは、氏の性格の極めて恬淡なことである、氏は名誉の念にも淡く、利欲の情にも甚だ薄い、その名利に淡泊なことは、氏が官途を退くまで、一技術官の職に安んじて他の榮達を顧みなかつたのでも知ることができよう。氏がこの学校の校長として、十年一日の如く孜々として子弟の育成に没頭して

るのも、全く氏の信念の一つの発露であつて、一身の名声利得を考慮に置くものでないことは、私の熟知する所である。

こうした賛辞は他からも寄せられており、信續もまた自分の信念について、同誌「十周年を顧みて」にて次のように示している。

恰も祖先がこの土を培ひ育み来つたやうに、私も微力の限りを郷土の為に捧ぐる事は、祖先に対し郷土に対して当然の報恩、天与の義務と思つてゐる。然しそれが私の器であるか否かは知らず、少くとも私一箇はしかく信じてゐるのである。私が今現に幾多の公共事業に微力を捧げて、日々多忙の日を送つてをるのも、結局この信念に基く行動に外ならないのである。但し私は凡そ議員と称すべき公職の何物にも席を列してゐないといふのは、さういふ方面には自然人才が多いからであつて、又自らその器でないことをも知つてゐるからである。要するに私は飽くまで側面的な、質素な方向に向つて、郷土を培ひ、郷土の為に尽して行かうといふのが、私の主義でもあり方針でもある。私は名誉や利益に対して寸豪の

欲望もない、唯この郷土愛の信念に始終するのが私の生命である。私が学校長として語り得るものは唯この一事であると思つてゐる。

本校は示上の如き私の主義方針の下にあるのであるから、その経営乃至教育方針も飽くまで質実堅剛に郷土の発展向上を主眼として、主として地方の子弟、それも多くは農商家の子弟をして、家業の傍簡便に自由に修学し得しむることの以外には、一步も踏出してをらぬ。故に甚だ質素な、甚だ平凡な、一面から言へばあまりに見映えのせぬ学校ではあるが、これが私の主義であり方針であり、又この学校の存在する所以でもあるのである。

一九四一（昭和一六）年一〇月、信續は校長の任を柴田徳次郎に譲つてゐる。ただし、その後も地域、そして青少年への援助は生涯を通して続けていった。

一方、信續が組合長を務める世田谷信用販売購買組合は、一九五一（昭和二六）年六月に公布・施行された信用金庫法に伴い、翌一九五二（昭和二七）年七月に世田谷信用金庫となつた。信續は生涯にわたり組合長を務めたが、最後まで「金を出しても口は出さない」態度を貫いた。

一九五四（昭和二九）年五月三日、信續に緑綬褒章が授与された。御年七五歳の折の榮譽であった。これは宮内省林野局に勤めながら、地域振興のため、産業組合精神に基づく世田谷信用販売購買組合を創設し、以来三三年間、組合長および理事長を任じ、併せて地域内中小企業の育成と地域住民の生活向上への尽力が認められたのである。

次いで、一九六二（昭和三七）年一〇月一日の世田谷区制三〇周年記念式典において、世田谷区で最初の「名誉区民」の称号が授与された。これは、第三回定例区議会で決議され、実施された名誉区民条例による表彰で、区政の発展に著しい功績のあった区民に贈られる称号であった。永い間ひたすら郷土の発展を願い、力を尽くしてきた身として「最高の贈り物」と喜んだという。信續の性格からして先の緑綬褒章よりこちらの方が嬉しかったのではなからうか。

世田谷名誉区民第一号の称号を受ける頃までは、元氣でいた信續であったが、やはり寄る年波からか、その後は体調をくずし、一九六四（昭和三九）年一〇月七日、黄泉の客となった。享年八五歳の大往生であった。

戦後、国士館では、勤労青年にも門戸を開くべく、一九四八（昭和二三）年に至徳高等学校定時制商業科

（新制四年制）を、一九五三（昭和二八）年に国士館短期大学経済科二部（二年制）を設置している。両校は共に夜間定時制で、昼間に職業をもつ者が多く入学している。こうした地域住民を支える姿勢は、戦前の国士館商業学校、ひいては大場信續の精神が受け継がれたものと言えるのではないだろうか。

# 1 国士館百年史編纂委員会並びに専門委員会

国士館は、平成一五年六月、創立百周年に向けて年史編纂事業を企図して国士館百年史編纂委員会を発足、同委員会の下に百年史編纂のための調査研究・執筆を担当する専門家組織として、平成二二年六月に専門委員会が発足した。平成二八年度の国士館百年史編纂委員会並びに専門委員会の委員会名簿と各委員会の開催日程及び審議事項は次の通りである。

## (1) 国士館百年史編纂委員会

### 国士館百年史編纂委員会名簿

(任期：平成27年6月～平成29年5月)

顧問 阿部 昭 元理事・元文学部教授

前委員長 (平成21年6月

～平成25年5月)

委員長 中島 徹 理事 (年史編纂担当)

(平成28年4月委嘱)

法学部教授

副委員長 南 克之 理事

副委員長 佐々 博雄 文学部教授・

国士館史資料室長

委員 入澤 充 学長室長 (法学部教授)

(平成28年4月委嘱)

委員 佐藤 圭一 政経学部教授 (学長)

委員 川口 直能 理工学部教授

委員 高野 敏春 法学部教授

委員 朝倉 利夫 体育学部教授

委員 原田 信男 21世紀アジア学部教授

委員 白銀 良三 経営学部教授

委員 平木 茂 高等学校定時制課程教頭

委員 山田 慎吾 理事(総務担当)  
委員 福本 正幸 法人事務局長

(平成28年4月委嘱)

庶務 国士館史資料室事務長 福原 一成  
国士館史資料室 熊本 好宏

平成28年度の編纂委員会開催と審議事項

第20回 平成28年5月28日(土) 13時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス1号館3階

第1会議室

審議事項 『国士館百年史』通史編実施計画につ

いて

『国士館百年史』通史編目次構成につ

いて

(2) 国士館百年史編纂委員会 専門委員会

国士館百年史編纂委員会 専門委員会名簿

(任期…平成27年6月～平成29年5月)

専門委員長 佐々 博雄 国士館史資料室長

文学部教授

副専門委員長 阿部 昭 元理事・元文学部教授

前専門委員長(平成21年6月～平成25年5月)

専門委員

湯川 次義 早稲田大学教育学部教授

専門委員

山崎 真之 東京国際大学人間社会

専門委員

岩間 浩 学部講師

専門委員

前城 直子 元文学部教授

専門委員

原田 信男 元21世紀アジア学部教授

専門委員

安西 博見 元理事

専門委員

枝村 亮一 元文学部教授(平成28

年6月委嘱)

庶務

国士館史資料室事務長 福原 一成

庶務

国士館史資料室 熊本 好宏

庶務

国士館史資料室 浪江 健雄

庶務

国士館史資料室 漆畑真紀子

庶務

国士館史資料室

平成28年度の専門委員会開催と審議事項

第54回 平成28年1月30日(土) 10時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 『国士館百年史』通史編の執筆分担に

ついて

『国士館百年史』通史編の目次構成に  
ついて

通史編実施計画（案）について

第55回 平成28年3月7日（月）10時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 『国士館百年史』通史編の編纂スケ

ジュール（案）について

通史編実施計画（案）について

『国士館百年史』通史編の執筆分担に

ついて

第56回 平成28年4月9日（土）10時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 通史編実施計画（案）について

『国士館百年史』通史編原稿（第2部

第1章第1節）について

『国士館百年史』通史編執筆要領（案）

について

第57回 平成28年5月14日（土）10時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 『国士館百年史』通史編原稿（第2部

第1章第3節）について

『国士館百年史』通史編執筆要領（案）

について

第58回 平成28年6月18日（土）10時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 『国士館百年史』通史編原稿（第2部

第1章第3節）について

『国士館百年史』通史編執筆要領（案）

について

第59回 平成28年7月23日（土）15時00分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 『国士館百年史』通史編原稿（第2部

第2章第1節）について

『国士館百年史』通史編執筆要領（案）

について

『国士館百年史』通史編執筆分担につ

いて

第60回 平成28年9月17日(土) 13時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 『国士館百年史』通史編(第2部第1

章第2節)について

『国士館百年史』通史編執筆要領(案)

について

『国士館百年史』通史編執筆分担(案)

について

第61回 平成28年10月22日(土) 13時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 『国士館百年史』通史編原稿(第2部

第1章第2節)について

『国士館百年史』通史編執筆要領(案)

について

『国士館百年史』通史編執筆分担(案)

について

第62回 平成28年11月19日(土) 13時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 『国士館百年史』通史編(第2部3章

1節)について

『国士館百年史』通史編執筆要領(案)

について

『国士館百年史』通史編執筆分担(案)

について

第63回 平成28年12月9日(金) 13時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 『国士館百年史』通史編(第2部3章

3節)について

『国士館百年史』通史編執筆要領(案)

について

『国士館百年史』通史編執筆分担(案)

について

## 2 国士舘史資料室の活動

### 1 調査・収集

#### (1) 平成28年度の主たる資料調査

本年度、実施した資料調査ならびに収集の主な活動は以下の通りである。

#### 学外調査

##### (1) 松陰神社所蔵資料調査（於松陰神社）

所蔵資料の調査・模造松下村塾瓦受贈。

日時…平成28年1月25日・2月5日・26日

調査者…室長佐々博雄・福原一成・熊本好宏

##### (2) 上塚司関係資料調査（於東京女子医科大学）

上塚司関係資料調査。

#### (3) 国士舘発祥の地調査（於東京都港区南青山）

国士舘発祥の地調査。

日時…平成28年2月5日

調査者…事務局長山田愼吾・参与田房義彦・室長

佐々博雄

#### 学内調査

##### (1) 企画課保管資料調査

企画課保管資料調査。

日時…平成27年10月1日～平成28年5月11日

調査者…熊本好宏・漆畑真紀子

(2) 町田キャンパスフォトサービス所蔵資料調査

フォトサービス作成の卒業アルバム及び写真資料等の調査。

日時…平成28年3月16日

調査者…福原一成・熊本好宏

(3) 経理課保管資料調査

経理課保管資料調査。

日時…平成28年7月5日～8月3日

調査者…熊本好宏・漆畑真紀子

(2) オーラル調査

(1) アンケート調査

次の四名の関係者にアンケート調査を行った。

・高瀬真澄氏 (昭和13年旧制中学校入学)

・板倉紀之氏 (昭和52年体育学部卒)

・小林次明氏 (昭和42年政経学部卒)

・小田勝介氏 (昭和42年政経学部卒)

(2) オーラル・ヒストリー調査

次の一名の関係者にオーラル・ヒストリー調査を行った。

・三浦信行 (元学長・政経学部教授)

(3) 主な寄贈資料

・山根幸夫元文学部非常勤講師 (東京女子大学名誉教授) 関連資料一式 (平成8年度文学部〈世田谷〉時間割表〈平成8年4月1日〉、試験問題・

答案用紙〈平成5年7月19日、平成6年7月18日〉、世田谷キャンパス10号館各室配置図)

寄贈者…嶋暢宏氏 (平成9年文学部卒)、計3点

・長瀬鳳輔稿掲載『国民精神』(第9巻1月号・第9巻9月号・第9巻12号〈大正11年各月〉、第12

巻11月号〈大正14年11月〉) 計4点

寄贈者…濱地光男氏

・模造松下村塾・旧「景松塾」瓦5点 (軒丸瓦〈巴瓦〉1点、軒平瓦〈軒先瓦〉2点、平瓦2点)

寄贈者…松陰神社

・学生時代使用の教科書・ノート・地理実習道具・

アルバム・学帽・体操着袋ほか17点

寄贈者…金成邦昇氏 (昭和50年文学部卒)

・学生時代使用の教科書・ノート・教育実習資料・

名札・靴袋ほか71点

寄贈者…板倉紀之氏 (昭和52年体育学部卒)

・学生時代使用の教科書・ノート・教育実習資料・

名札・靴袋ほか71点

寄贈者…板倉紀之氏 (昭和52年体育学部卒)

・学生時代使用の教科書・ノート・教育実習資料・

名札・靴袋ほか71点

- ・ 第2回国士館専門学校卒業アルバム（昭和9年3月）1点
- 寄贈者：勝谷尚武氏
- ・ 大正後期～昭和20年代頃の古銭一式
- 寄贈者：坂本廣身氏（法人評議員）
- ・ GHQ昭和22年撮影国士館周辺空撮パネル（平成5年頃みどり商会製）1点
- 寄贈者：柴田徳文氏（政経学部教授・副学長）
- ・ 昭和61年度楓門祭パンフレット、昭和60年度歌唱祭パンフレット、国士館60年の歩みポスターカード、国士館史資料目録（国士館史研究会作成文書）、天皇誕生日奉祝式典及び皇居一般参賀について（学生課作成文書）、「鶴川祭ニュース」1号（昭和62年4月10日）、「楓門祭ニュース」第1号（昭和61年7月7日）、楓門祭新聞「平成」第1号（平成元年10月11日）、計8点
- 寄贈者：花田一史氏（平成3年政経学部卒）
- ・ 昭和17年国士館専門学校学生募集ポスター1点
- 寄贈者：佐藤良二氏（平成3年政経学部二部卒）

## 2 整理・保存

### (1) 資料目録作成状況

本年（平成二八年二月三一日現在）の国士館史資料室の所蔵資料、調査収集資料、参考図書等の目録（データベース）作成状況は【表1】の通りである。

### (2) 資料保存

- 本年は、主に以下の資料について修復及び保存処置を専門業者に依託した。
- ・ 法人記録史料青焼図面撮影
  - ・ 昭和17年国士館専門学校学生募集ポスター修復及び撮影
  - ・ 小野家資料写真アルバム撮影
  - ・ 上塚司関係資料撮影
  - ・ 学部年史等学園発行物電子化
  - ・ 新聞『大民』（第2号昭和13年5月～）電子化
  - ・ 昭和9年3月専門学校・昭和15年3月専門学校（柔道科）卒業アルバム撮影
  - ・ 昭和30～40年代学部等卒業アルバム電子化

【表1】収蔵資料及び目録化の進捗状況

名 称	内 容	H26年度 目録化済	H27年度 目録化済	H28年度 目録化済
法人記録史料	法人(教学を含む)組織が作成・発行したか、または外部機関より受領した文書	11,366	12,609	14,157
出版刊行物	学内で刊行される出版物	7,287	7,462	7,903
写真・その他の映像・音声資料	国士館に関わる写真その他の映像・音声資料	6,808	7,031	8,610
物品資料	国士館に関わる物品資料	641	873	953
調査収集資料	学外の関係資料所蔵機関への調査収集資料	5,364	5,404	5,555
参考図書	主に各関係機関が発行している出版物	1,501	1,643	1,736
合計		32,967	35,022	38,914

(平成 28 年 12 月 31 日現在)

### 3 利用・公開

#### (1) 収蔵資料の公開 (収蔵資料検索システム運用状況)

国士館史資料室は、収蔵資料利用者へのサービス強化のため、平成二三年四月に閲覧室を整備し、また同時に、資料室ホームページ上で収蔵資料検索システムの Web 公開を開始している。収蔵資料検索システムを利用後に、資料閲覧のために来室する利用者も増加傾向にある。

平成二八年度の資料室事業として「国士館アーカ

・『スポーツ国士』電子化  
 ・頭山満書軸「忠孝国之大本也」「浩気満宇宙」撮影及び複製作成  
 ・ネガフィルム(広報課資料等)電子化  
 ・オーラル音声資料文字起し(上塚司・中野菊夫・鈴木善一・佐伯弘治・三浦信行)  
 ・アーカイバル容器製作(タトウフォルダ・軸資料箱)

また本年は、業務の進捗に比例して容量増となる諸データを保管・整理するため、簡易的な対応ではあるが新たにHDの増設等を行った。

イブズ」と称した Web サイトを新たに作成し、平成二八年一〇月三日より収蔵資料検索システムを利用した資料画像データ等の閲覧・公開を、学内教職員向けに開始した。この、収蔵資料検索システムを含む「国士館アーカイブズ」は、今年度の学内運用の後に、学外への公開・運用を検討している。なお、一昨年度より引き続き、多種ブラウザに対応したシステム改善等を進めつつある。

(2) ホームページ

【平成 28 年 更新】

「お知らせ」

- ・梅ヶ丘校舎で「国士館の歴史」展を開催（平成 28 年 3 月 1 日）
- ・「国士館史研究年報」第 7 号を刊行しました（平成 28 年 3 月 15 日）
- ・梅ヶ丘校舎で「世田谷の今昔―国士館ゆかりの地―」展を開催（平成 28 年 6 月 1 日）
- ・夏季の一時閉室について（平成 28 年 7 月 15 日）
- ・松陰神社で模造松下村塾（旧景松塾）の修祓式が挙行されました（平成 28 年 10 月 27 日）

【刊行物】

- ・創立 99 周年記念展「国士館 99 年の軌跡」を開催（平成 28 年 10 月 28 日）
  - ・梅ヶ丘校舎で「大正昭和期の国士館学生」展を開催（平成 28 年 12 月 1 日）
- 「刊行物」
- ・国士館史研究年報 楓原第 7 号の全頁（電子ブック・PDF）掲載（平成 28 年 4 月）

アドレス

<http://www.kokushikan.ac.jp/research/archive/index.html>

(3) 教育普及活動

(1) 常設展示

国士館史資料室では、柴田会館四階に展示室を設け、国士館の歩みを示す貴重な関係資料を一般公開している。国士館の創立者柴田徳次郎にゆかりの資料や、創立以来の支援者、各時代の学生生活に関する資料などを展示している。

開室日時 月曜～土曜 10:00～16:00

（日曜祝祭日、学園の定める休日等を除く）

※観覧無料

平成二八年一月～二月の観覧者数は、以下の通りである。

・学内者数 381名

学生・生徒 336名

教職員 45名

・学外者数 236名

卒業生 79名

一般 157名

・総観覧者数 617名

(2) 梅ヶ丘展示コーナー企画展(出張展示)

世田谷キャンパス三四号館(梅ヶ丘校舎)一

階の展示コーナーにおいて、次の企画展を開催した。

・平成28年3月～5月「国士館の歴史」展

・平成28年6月～10月「世田谷の今昔―国士館ゆかりの地―」展

・平成28年12月～平成29年2月「大正昭和期

の国士館学生」展

(3) イベント企画展(出張展示)

本年のオープンキャンパス及び父母懇談会開催時に世田谷キャンパス大講堂において、写真パネルによる企画展示「国士館の歴史」を開催

した。「国士館の歴史」を写真で紹介すると共に、「国士館九十年の軌跡」(DVD)等を上映した。それぞれ実施日及び入場者数は、次の通りである。

平成28年3月27日(日)オープンキャンパス 180名

平成28年5月22日(日)父母懇談会 185名

平成28年6月5日(日)オープンキャンパス 121名

平成28年7月17日(日)オープンキャンパス 183名

平成28年7月31日(日)オープンキャンパス 168名

平成28年8月28日(日)オープンキャンパス 223名

平成28年10月2日(日)オープンキャンパス 131名



「国士館 99 年の軌跡」展ポスター

(4) 創立99周年記念展示「国士館99年の軌跡」(出張展示)

国士館の創立九九周年を記念して、また、楓門祭(大学祭)と秋楓祭(中・高文化祭)などの実施にあわせて、平成二八年一〇月三十一日(月)～十一月五日(土)を会期に、世田谷キャンパス大講堂において、企画展を開催した。入場者数は一七四三名であった。

(5) レファレンス(含資料閲覧)

本年度のレファレンスは、学内・学外合わせて一〇九件(平成二八年一月～二月)であった。また、学外からの資料閲覧者は九名であった。

本年度は、大講堂の文化財指定申請の関係から、世田谷教育委員会による大講堂関連資料の閲覧があった。

(6) 講義等支援

平成二二年四月の国士館史資料室発足後、資料室を利用する講義支援等の依頼は、毎年増加傾向にある。特に、大学の政経学部や法学部で開講する初年次教育の関連ゼミでの支援依頼は

毎年恒例となっている。また、博物館学関連の講義支援も同様となってきた。さらに、一昨年度からは、高校・中学の新入生オリエンテーションでの依頼も加わった。支援にあたっては、座学のみを終始しないように、資料展示室や松陰神社などの見学や、実習体験などを通して、各テーマの理解が深まるよう努めている。また、今年度は、学外の諸団体等からの要請もあり、適宜対応している。

なお、講義支援に留まらず、新採用教職員研修への支援なども随時実施している。主な講義等の支援と担当者は、次の通りである。

- ・平成28年2月4日 21世紀アジア学部スポーツ系・武道系クラブ所属学生オリエンテーション支援(1年生100名)(福原一成)
- ・平成28年2月22日 ハローワーク同期会展示室等の学内案内(5名)(福原一成)
- ・平成28年2月23日 学生部主催クラブリーダーズキャンプ講演(福原一成)
- ・平成28年3月5日 中京大学職員資料展示室見学案内(1名)(福原一成)
- ・平成28年3月25日 法学部新入生オリエン

- ・ テーリング指導学生の事前研修（教員4名、学生11名）（福原一成）
- ・ 平成28年3月30日 文学部仁藤智子准教授引率放送大学生（6名）来訪につき大講堂・資料展示室内（福原一成）
- ・ 平成28年4月5日 新採用教員研修展示室見学等支援（17名）（福原一成）
- ・ 平成28年4月6日 新採用職員研修支援（6名）（福原一成）
- ・ 平成28年4月8日 大講堂にて高等学校新入生オリエンテーション支援（251名）（福原一成）
- ・ 平成28年4月9日 東京ネイチャークラブ学内及び展示室内（9名）（福原一成）
- ・ 平成28年4月9日 資料展示室にて法学部新入生オリエンテーション支援（68名）（漆畑真紀子・稲葉彩香）
- ・ 平成28年4月13日 資料展示室にて法学部福永清貴教授「プレゼミA」講義支援（1年生20名）（福原一成）
- ・ 平成28年4月14日 大講堂にて文学部堀井雅道准教授「教育学の基礎A」講義支援（1年生67名・他3名）（福原一成）
- ・ 平成28年4月20日 資料展示室にて政経学部阿部武司教授「フレッシュユマン・ゼミナール」講義支援（1年生33名）（福原一成）
- ・ 平成28年4月21日 大講堂にて文学部堀井雅道准教授「教育学の基礎A」講義支援（1年生68名・他3名）（福原一成）
- ・ 平成28年4月25日 資料展示室にて政経学部池田十吾教授「フレッシュユマン・ゼミナール」講義支援（1年生28名）（福原一成）
- ・ 平成28年4月27日 松陰神社及び資料展示室にて政経学部松本利秋非常勤講師「基礎ゼミナール」講義支援（2年生19名）（福原一成・漆畑真紀子）
- ・ 平成28年5月18日 資料展示室にて政経学部安永勲教授「フレッシュユマン・ゼミナール」講義支援（1年生31名）（福原一成）
- ・ 平成28年5月31日 資料展示室にて政経学部米山多佳志非常勤講師「基礎ゼミナール」講義支援（2年生5名）（福原一成）
- ・ 平成28年6月2日 柴田会館研修室にて文学部井上尚明非常勤講師「博物館教育論」講義

支援（2年生67名）（熊本好宏）

・平成28年6月20日 経営学部白銀良三教授

「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援

（1年生25名）（福原一成）

・平成28年9月23日 政経学部川村哲章講師

「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援

（1年生33名）（福原一成）

・平成28年11月24日 法学部本山雅弘教授「専

門ゼミⅡ」講義支援（3年生11名）（福原一

成）

・平成28年12月15日 柴田会館研修室にて文学

部井上尚明非常勤講師「博物館展示論」講義

支援（4年生27名）（熊本好宏）

### （7）中学生の職場体験学習の受け入れ

世田谷区内の中学校から生徒の職場体験学習  
についての依頼があり、受け入れを行った。資  
料室では仕事の一環である「歴史を編む」こと  
の体験や展示体験を中心として課題に取り組ん  
でもらった。

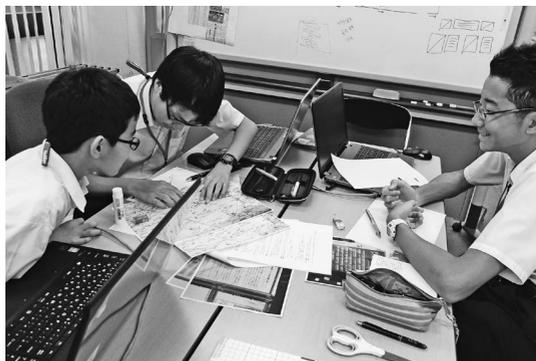
日時、学校名及び学年・受入人数

平成28年9月5日（月）～7日（水）

## 4 室の構成

### （1）職員（平成28年度）

室 長 佐々 博雄（文学部教授）



職場体験中の様子

世田谷区立梅丘中学校2年生3名

平成28年9月13日（火）～15日（木）

世田谷区立松沢中学校2年生3名

(2) 施設の概要

事務長	福原 一成
職員	熊本 好宏
準職員	浪江 健雄
パート職員	稲葉 彩香
アルバイト学生	漆畑 真紀子
東 祥吾	村松幹允
森 弓佳	萬代欣実
川原孝哉	高橋真生
一ノ瀬まみ	千葉圭太
吉野将生	斎藤大悟
林わかな	福島紗羽
飯島優佳	高橋美月
近藤奈史	永見雄基
竹垣大貴	

所在地 〒154-0023 東京都世田谷区若林4-31-10

名称 柴田会館

構造 鉄骨鉄筋コンクリート造、地下2階、地上4階

資料室施設面積

2階・館史事務室21.1㎡、館史研究室36.8㎡、第1史料収蔵庫63.8㎡、第2史料収蔵庫18.5㎡

(平成23年3月設置)、第3史料収蔵庫16.2㎡

(平成28年8月設置)、第4史料収蔵

5 活動日誌

庫21.1㎡(平成28年8月設置)  
4階・室長室13.7㎡、閲覧室13.7㎡、展示室119㎡

(平成28年1月～12月)

【1月】

- 7日 『スポーツ国士』電子化委託(関東インフォメーションマイクロ)
- 8日 音声資料(上塚司資料)文字起し納品(関東インフォメーションマイクロ)
- 15日 法人記録史料(理事会決議書『国士館と教育』等劣化資料)電子化納品(関東インフォメーションマイクロ)
- 18日 音声資料(上塚司資料)文字起し委託(関東インフォメーションマイクロ)
- 28日 昭和15年3月専門学校(柔道科)卒業アルバム撮影、ネガフィルム(広報課撮影資料)電子化委託(堀内カラー)
- 25日 松陰神社所蔵資料調査(室長佐々博雄・熊本好宏)
- 30日 第54回国士館百年史編纂委員会専門委員会開

催

【2月】

- 2日 東京女子医科大学にて上塚司関係資料調査  
(熊本好宏)
- 4日 21世紀アジア学部スポーツ系・武道系クラブ  
所属学生オリエンテーション支援(1年生100  
名)(福原一成)
- 5日 国士館発祥の地調査(於南青山、事務局長山  
田愼吾、参与田房義彦、室長佐々博雄)
- 10日 上塚司関係資料撮影委託(熊本好宏)  
松陰神社所蔵資料調査(熊本好宏)
- 12日 『スポーツ国士』電子化納品(関東インフォ  
メーションマイクロ)
- 15日 斎藤淳二氏(元職員)所蔵写真提供につき来  
室
- 19日 松陰神社所蔵資料調査(熊本好宏)
- 22日 上塚司関係資料撮影委託納品(関東インフォ  
メーションマイクロ)
- 収蔵資料検索システムの資料リンク項目等カ  
スタマイズ作業(関東インフォメーションマ  
イクロ)

ハローワーク同期会学内及び展示室内(5  
名)(福原一成)

23日 学生部主催クラブリーダーズキャンプ支援  
(福原一成)

法人記録史料(「柴田徳次郎日記」「震災善後

急務」)の修復及び電子化、ネガフィルム  
(広報課資料)電子化納品(堀内カラー)

ネガフィルム(広報課資料)電子化委託(堀

内カラー)

25日 音声資料(佐伯弘治資料)文字起し委託(関

東インフォメーションマイクロ)

26日 松陰神社調査(模造松下村塾・旧「景松塾」

瓦受贈)(福原一成、熊本好宏)

29日 国士館史資料室パンフレット(第8版)納品  
(四五〇〇部)

音声資料(上塚司資料)文字起し納品(関東

インフォメーションマイクロ)

【3月】

1日 「国士館の歴史」展開催(5月31日、於世

田谷キャンパス梅ヶ丘校舎展示コーナー)

ホームページ更新(「お知らせ」梅ヶ丘校舎  
で「国士館の歴史」展を開催)

- 5日 中京大学職員資料展示室見学案内（1名）  
（福原一成）
- 7日 第55回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催  
簡易ID納品、増設作業
- 8日 昭和15年3月専門学校（柔道科）卒業アルバム撮影電子化納品（堀内カラー）
- 10日 第99回全国大学史資料協議会東日本部研究会に福原一成・漆畑真紀子が参加（於明治大学生田キャンパス）
- 16日 町田キャンパスフォトサービス店舗資料調査  
（福原一成・熊本好宏）
- 18日 音声資料（佐伯弘治資料）文字起し納品（関東インフォメーションマイクロ）
- 25日 法学部新入生オリエンテーション指導学生事前研修（教員4名、学生11名）（福原一成）
- 27日 平成27年度オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者数180名）
- 28日 ネガフィルム（広報課資料）電子化納品（堀内カラー）
- 29日 展示室修繕（障子紙剥離箇所の補修）作業
- 30日 文学部仁藤智子准教授引率放送大学学生（6名）来訪につき大講堂・資料展示室見学案内  
（福原一成）
- 31日 法学部新入生オリエンテーション指導学生事前研修（教員3名、学生21名）（福原一成）
- 【4月】
- 4日 ネガフィルム（広報課資料）電子化委託（堀内カラー）
- 5日 新採用教員展示室見学対応（17名）  
上塚司関係資料撮影委託（関東インフォメーションマイクロ）
- 6日 新採用職員研修支援（6名）（福原一成）
- 8日 大講堂にて高等学校新入生オリエンテーション支援（251名）（福原一成）
- 9日 東京ネイチャークラブ学内及び展示室案内（9名）（福原一成）
- 資料展示室にて法学部新入生オリエンテーション支援（68名）（漆畑真紀子・稲葉彩香）
- 第56回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催
- 13日 資料展示室にて法学部福永清貴教授「プレゼミア」講義支援（1年生20名）（福原一成）

- 14日 大講堂にて文学部堀井雅道准教授「教育学の基礎A」講義支援（1年生67名）（福原一成）
- 18日 上塚司関係資料撮影委託納品（関東インフォメーションマイクロ）
- 20日 資料展示室にて政経学部阿部武司教授「フレッシュユマン・ゼミナール」講義支援（1年生33名）（福原一成）
- 21日 大講堂にて文学部堀井雅道准教授「教育学の基礎A」講義支援（1年生68名）（福原一成）
- 22日 音声資料（上塚司資料）文字起し委託（関東インフォメーションマイクロ）
- 25日 資料展示室にて政経学部池田十吾教授「フレッシュユマン・ゼミナール」講義支援（1年生28名）（福原一成）
- 26日 上塚司関係資料調査・資料返却（熊本好宏）
- 27日 松陰神社及び資料展示室にて政経学部松本利秋非常勤講師「基礎ゼミナール」講義支援（2年生19名）（福原一成・漆畑真紀子）
- 30日 音声資料（中野菊夫資料）文字起し委託（関東インフォメーションマイクロ）
- 【5月】
- 6日 音声資料（上塚司資料）文字起し納品（関東インフォメーションマイクロ）
- 9日 インフォメーションマイクロ）  
ネガフィルム（広報課資料）電子化納品（堀内カラー）
- 14日 第57回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催
- 16日 頭山満書軸「忠孝国之大本也」撮影及び複製委託（堀内カラー）
- 18日 小野家資料写真アルバム撮影委託（関東インフォメーションマイクロ）
- 18日 資料展示室にて政経学部安永勲教授「フレッシュユマン・ゼミナール」講義支援（1年生31名）（福原一成）
- 18日 アーカイバル容器（タトウフォルダ）製作納品（堀内カラー）
- 19日 音声資料（中野菊夫資料）文字起し納品、音声資料（鈴木善一資料）文字起し委託（関東インフォメーションマイクロ）
- 22日 平成28年度父母懇談会にて「国士館の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者185名）
- 23日 小野家旧蔵アルバム撮影委託（関東インフォメーションマイクロ）

- 26日 全国大学史資料協議会東日本部会2016年度総会に漆畑真紀子が参加（於東京農業大学世田谷キャンパス）
- 28日 第20回国士館百年史編纂委員会開催
- 30日 小野家資料写真アルバム撮影委託納品、法人記録史料（展示重要資料）撮影委託（関東インフォメーションマイクロ）
- ネガフィルム（広報課資料）電子化委託（堀内カラー）
- 31日 資料展示室にて政経学部米山多佳志非常勤講師「基礎ゼミナール」講義支援（2年生5名）（福原一成）
- ネガフィルム（広報課資料）電子化委託（堀内カラー）
- 【6月】
- 1日 「世田谷の今昔―国士館ゆかりの地―」展開催（9月30日、於世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎展示コーナー）
- ホームページ更新（「お知らせ」梅ヶ丘校舎で「世田谷の今昔―国士館ゆかりの地―」展を開催）
- 2日 柴田会館研修室にて文学部井上尚明非常勤講師「博物館教育論」講義支援（2年生67名）（熊本好宏）
- 5日 平成28年度オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者121名）
- 7日 法人記録史料（展示重要資料）撮影委託納品、同追加分（展示重要資料）撮影委託（関東インフォメーションマイクロ）
- 13日 アーカイバル容器（軸資料箱）製作納品（堀内カラー）
- 14日 法人記録史料（青焼図面）撮影委託（堀内カラー）
- 16日 学部年史等発行物資料電子化委託（河北印刷）
- 17日 三浦信行元学長オーラル・ヒストリー調査
- 18日 世田谷区教育委員会、大講堂関連資料閲覧
- 20日 第58回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催
- ネガフィルム（広報課資料）電子化納品（堀内カラー）
- 経営学部白銀良三教授「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（1年生25名）（福原一

成)

21日 音声資料(鈴木善一資料)文字起し納品(関東インフォメーションマイクロ)

【7月】

1日 音声資料(三浦信行資料)文字起し委託(関東インフォメーションマイクロ)

4日 法人記録史料(展示重要資料)撮影委託納品、法人史料(青焼図面等)撮影委託(関東インフォメーションマイクロ)

7日 経理課保管資料調査(於世田谷キャンパス1号館)(熊本好宏・漆畑真紀子)

14日 経理課保管資料調査(於世田谷キャンパス1号館)(熊本好宏・漆畑真紀子)

17日 平成28年度オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催(於世田谷キャンパス大講堂、入場者183名)

20日 音声資料(三浦信行資料)文字起し納品(関東インフォメーションマイクロ)

22日 丸善雄松堂アカデミックセミナー2016(東京会場)「大学のグローバル化の進展と、その過程としての研究・教育支援における新たな展開」に福原一成が参加(於フクラシア

品川クリスタルスクエア)

22日 経理課保管資料調査(於世田谷キャンパス1号館)(熊本好宏・漆畑真紀子)

23日 第59回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催

25日 経理課保管資料調査(於世田谷キャンパス1号館)(熊本好宏・漆畑真紀子)

26日 経理課保管資料調査(於世田谷キャンパス1号館)(熊本好宏・漆畑真紀子)

29日 学部年史等発行物資料電子化委託納品(河北印刷)

31日 平成28年度オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催(於世田谷キャンパス大講堂、入場者168名)

【8月】

2日 第3・4史料収蔵庫設置につきカーペット交換及び暗幕設置

学部年史等発行物資料電子化委託(河北印刷)

4日 第3・4史料収蔵庫書架設置工事

5日 第3・4史料収蔵庫へ資料移動(学外発行物・物品資料・写真資料等)

- 23日 法人記録史料（青焼図面）撮影委託納品（堀内カラー）  
 新聞『大民』（第2号）及び昭和30年～40年代学部等卒業アルバム電子化委託（関東インフォメーションマイクロ）
- 28日 平成28年度オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者223名）
- 29日 頭山満書軸「忠孝国之大本也」撮影及び複製納品、頭山満書軸「浩気満宇宙」撮影及び複製委託（堀内カラー）
- 【9月】  
 2日 学部年史等発行物資料電子化委託納品（河北印刷）  
 5日 法人史料（青焼図面等）撮影委託納品（関東インフォメーションマイクロ）  
 5～7日 世田谷区立梅丘中学校2年生（3名）職場体験学習のため来室  
 13日～15日 世田谷区立松沢中学校2年生（3名）職場体験学習のため来室  
 16日 日本政教研究所関連資料の移管準備作業（福原一成）
- 17日 第60回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催  
 20日 新聞『大民』及び昭和30年～40年代学部等卒業アルバム電子化納品（関東インフォメーションマイクロ）  
 23日 資料展示室にて政経学部川村哲章講師「フレッシユマン・ゼミナル」講義支援（1年生33名）（福原一成）  
 27日 大講堂・資料展示室にて大学機関認証評価実施調査対応（7名）  
 昭和9年3月専門学校卒業アルバム撮影委託（堀内カラー）
- 【10月】  
 2日 平成28年度オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者131名）  
 3日 学内教職員向け「国士館アーカイブズ」サイト開設  
 11日 昭和40年代学部等卒業アルバム電子化委託（関東インフォメーションマイクロ）  
 20日 新聞『大民』（第47号）電子化委託（関東インフォメーションマイクロ）

- 22日 第61回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催
- 23日 第8回若林歴史講演会にて室長佐々博雄が「国士館創立を支えた人々」を講演（於世田谷キャンパスメープルセンチュリーホール、聴講者80名）
- 27日 松陰神社模造「松下村塾」修繕につき修祓式に室長佐々博雄・福原一成が参加（於松陰神社）
- ホームページ更新（「お知らせ」松陰神社で模造松下村塾（旧景松塾）の修祓式が挙行されました）
- 28日 ホームページ更新（「お知らせ」創立99周年記念展「国士館99年の軌跡」を開催）
- 29日 文学部創設50周年記念レセプションにてスライドショー上映支援（熊本好宏）
- 31日～11月5日 創立99周年記念展「国士館99年の軌跡」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者数一七四三名）
- 【11月】
- 10日 昭和40年代学部等卒業アルバム電子化納品（関東インフォメーションマイクロ）
- 10日～11日 第42回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国（三重）大会に漆畑真紀子が参加（於男女共同企画センター〈三重県総合文化センター〉・三重県総合博物館 MieMu）
- 12日 フォトサービス所蔵ネガ等写真資料借用
- 昭和9年3月専門学校卒業アルバム撮影依託（堀内カラー）
- 18日 昭和9年3月専門学校卒業アルバム撮影納品、昭和17年専門学校学生募集ポスター撮影及び複製依託（堀内カラー）
- 19日 第62回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催
- 22日 新聞『大民』（第457号）電子化納品（関東インフォメーションマイクロ）
- 24日 法学部本山雅弘教授「専門ゼミⅡ」講義支援（3年生11名）（福原一成）
- 【12月】
- 1日 「大正昭和期の国士館学生」展開催（～2月28日、於世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎展示コーナー）
- ホームページ更新（「お知らせ」梅ヶ丘校舎で「大正昭和期の国士館学生」展開催）

9日 文化庁による大講堂の国指定文化財指定についての視察対応

第63回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催

15日 柴田会館研修室にて文学部井上尚明非常勤講師「博物館展示論」講義支援（4年生27名）  
（熊本好宏）

16日 頭山満書軸「浩気満宇宙」撮影及び複製納品  
（堀内カラー）

関係法規

国士館百年史編纂委員会要綱

(趣旨)

第1条 学校法人国士館（以下「本法人」という。）に、国士館創設以来の歴史を記録する国士館百年史（以下「百年史」という。）を編纂するため、国士館百年史編纂委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(委員会の構成)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 理事のうちから、理事長の指名する者 若干人
- (2) 国士館大学専任教員のうちから、学長の指名する者 若干人
- (3) 中学校・高等学校教員から、校長の指名する者 若干人

- (4) 法人事務局長、国士館史資料室長
  - (5) 学識経験者で、理事長が指名する者 若干人
- 2 委員は、理事長が委嘱する。
  - 3 第1項第1号、第2号、第3号及び第5号の委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。第4号の委員は、職務在任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第3条 委員会に、委員長及び副委員長を置く。

- 2 委員長及び副委員長は、理事長が指名する。
- 3 委員長は、委員会を統括する。
- 4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

(顧問)

第4条 委員会に顧問を置くことができる。

2 顧問は、理事長が委嘱する。

3 顧問は、必要に応じ委員会に出席するものとする。

4 顧問の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(委員会の任務)

第5条 委員会は、次の各号の事項を行う。

(1) 百年史の編纂方針に関すること

(2) 百年史の刊行に関すること

(3) その他、百年史編纂に関すること

(委員会の運営)

第6条 委員長は、委員会を招集し、議長となる。

2 委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決する。可否同数の場合は、委員長が決する。

4 委員会は、必要に応じ、委員以外の者を出席させることができる。

ことができる。

(専門委員会の設置)

第7条 委員会に、専門委員会を置く。

(専門委員)

第8条 専門委員は、委員長の推薦により理事長が委嘱する。

する。

2 専門委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(専門委員長及び副専門委員長)

第9条 専門委員会に、専門委員長及び副専門委員長を置く。

2 専門委員長は、委員会委員のうちから理事長が指名する。副専門委員長は、委員会委員のうちから専門委員長が指名する。

置く。

2 専門委員長は、委員会委員のうちから理事長が指名する。副専門委員長は、委員会委員のうちから専門委員長が指名する。

3 専門委員長は、専門委員会を統括し、代表する。

4 副専門委員長は、専門委員長を補佐する。

3 専門委員長は、専門委員会を統括し、代表する。

4 副専門委員長は、専門委員長を補佐する。

(専門委員会の任務)

第10条 専門委員会の任務は、次の各号のとおりとする。

る。

(1) 百年史の刊行計画案の作成

(2) 百年史の執筆・編集・校訂

(3) 資料の調査収集、その他百年史編纂に関すること

(専門委員会の運営)

第11条 専門委員長は、専門委員会を招集し、議長となる。

2 専門委員会は、必要に応じ、専門委員以外の者を出席させることができる。

(経費)

第12条 委員会及び専門委員会の経費は、国士館史資料室の予算を充てる。

(委員会及び専門委員会の庶務)

第13条 委員会及び専門委員会の庶務は、国士館史資料室が担当する。

(改廃手続)

第14条 この要綱の改廃は、理事長が決定する。

附 則

この要綱は、平成21年5月27日から施行する。

## 国士館史資料室規程

### (趣旨)

第1条 この規程は、国士館史資料室（以下「資料室」という。）の組織及び運営について定める。

ない。

### (職員)

第4条 資料室に、必要な職員を置く。

### (目的)

第2条 資料室は、国士館の歴史に関わる文献、文書及び物品等（以下「資料」という。）を収集・整理・保管し、将来に継承して、建学の精神の高揚と学園及びその教育・研究の進展等に資することを目的とする。

### (学術調査員)

第5条 資料室に、学術調査員を置くことができる。

2 学術調査員は、本学園の教職員のうちから資料室長が推薦し、理事長が委嘱する。

3 学術調査員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

(資料室長)  
第3条 資料室長は、理事会の議を経て理事長が委嘱する。

2 資料室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げ

4 学術調査員は、資料室長の指示を受け、次の調査研究等に従事する。  
(1) 本学の理念及び本学史に関すること

- (2) 資料の収集・整理・保管等に関すること
- (3) 年史・資料集等に関すること
- (4) その他資料室に関わる学術的事項

(専門員)

第6条 資料室に、専門員を置くことができる。

2 専門員は、資料室長の指示を受け、次の業務に従事する。

- (1) 資料の収集・整理・保管・展示及び情報収集
  - (2) 年史・資料集等の企画及び編纂
  - (3) その他資料室に関わる専門的事項
- 3 専門員の任用期間は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

(収集資料)

第7条 資料室は、次の資料を収集する。

- (1) 国士館の建学の精神に関する資料
- (2) 国士館の発展の経緯に関する資料
- (3) 国士館が設置する諸学校に関する資料
- (4) 国士館の創立者及び先人に関する資料
- (5) その他国士館に関する資料

(所蔵資料の開放)

第8条 資料室は、学園内外の希望者に所蔵資料を開放し、教育研究に資するとともに学園の歴史の紹介に努めるものとする。

2 資料室の開室及び所蔵資料の閲覧等の細部は、別に定める。

(資料の貸出し)

第9条 資料室の所蔵資料は、貸出しをしないものとする。ただし、教育研究及び学園の広報に役立つ等、特に必要性が認められた場合は、所定の手続を経て貸出しをすることができる。

(資料の管理)

第10条 資料室の資料及び物品の物品管理責任者は、資料室長とする。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

## 編集後記

おかげさまで、今年度もすばらしい論稿に恵まれました。論文では、本学ともゆかりの深い浄土宗の学僧で、数多くの社会事業に貢献した渡辺海旭の研究をされている菊池結氏の論稿をいただきました。また、四名の方から寄せられた「国士館の思い出」には、それぞれ当時の様子が鮮明に描かれています。まさに力作揃いです。是非ご覧下さい。

来年度はいよいよ創立一〇〇周年を迎えます。より気を引き締めて編纂事業に臨む所存です。

(浪江健雄)

## 執筆者紹介

菊池 結	大正大学総合仏教研究所研究員
板倉 紀之	国士館大学体育学部卒業生
江崎 澄子	元国士館大学福祉専門学校助教
田所 清人	学校法人国士館職員
伊井 克己	学校法人国士館職員
浪江 健雄	国士館史資料室室員

## 国士館史研究年報 楓原 二〇一六 第八号

平成29年3月10日発行

編集 国士館百年史編纂委員会専門委員会

国士館史資料室

発行 学校法人国士館

〒一五四―八五一五

東京都世田谷区世田谷四―二八一―

TEL 〇三―三四―一八一―二六九一

Fax 〇三―三四―一八一―二六九四

E-mail archives@kokushikan.ac.jp

印刷 藤原印刷株式会社



